

특별 전

문자, 그 이후

기념 심포지엄

일 시 : 2011년 10월 14일 금요일 13:30~17:50

장 소 : 국립중앙박물관 교육관 제2강의실



국립중앙박물관
NATIONAL MUSEUM OF KOREA

특별전

문자, 그 이후
기념 심포지엄

- 일시 : 2011. 10. 14. (금) 13:30~17:50
- 장소 : 국립중앙박물관 교육관 제2강의실
- 일정

순 서	시 간	내 용	발 표 자
인사말	사회(1, 2부 포함) : 김동우 (국립중앙박물관 학예연구관)		
	13:30 - 13:35	인사말	김영나 (국립중앙박물관장)
제1부 : 기조강연	13:35 - 14:00	古代韓國と日本の文字文化交流	平川 南 (日本 國立歷史民俗博物館長)
제2부 : 주제발표	14:00 - 14:25	韓國 古代 築城金石文의 特性	朴方龍 (國立中央博物館 考古歷史部長)
	14:25 - 14:50	新羅浦項中城里碑にみる6世紀 新羅碑の特質	李成 市 (日本 早稻田大學 教授)
	14:50 - 15:15	「龍王」銘木簡と古代東アジア世界 -韓日出土木簡研究の新展開-	三上喜孝 (日本 山形大學 教授)
	15:15 - 15:40	出土 文字資料에 나타난 人名表記 方法	朴仲煥 (國立金海博物館 學藝研究室長)
	15:40 - 16:05	사발을 쓴 新羅文書(佐波理加盤付屬文書)의 검討	李容賢 (國立中央博物館 學藝研究士)
제3부 : 종합토론	사회 : 이기동 (전 동국대학교 교수)		
	16:20 - 17:50		발표자 전원 橋本 繁 (日本 學術振興會 會員) 畑中綾子 (日本 學習院大學校 助教) *통역(번역) : 정애영 (숙명여자대학 강사)

목 차

제1부 : 기조강연

古代韓國と日本の文字文化交流 平川南 (日本 國立歷史民俗博物館長)	06
---------------------------------------	----

제2부 : 주제발표

韓國 古代 築城金石文의 特性 朴方龍 (國立中央博物館 考古歷史部長)	22
新羅浦項中城里碑にみる6世紀新羅碑の特質 李成市 (日本 早稻田大學 教授)	32
「龍王」銘木簡と古代東アジア世界 - 韓日出土木簡研究の新展開 - 三上喜孝 (日本 山形大學 教授)	60
出土 文字資料에 나타난 人名表記 方法 朴仲煥 (國立金海博物館 學藝研究室長)	86
사발을 쓴 新羅文書(佐波理加盤付屬文書)의 檢討 李容賢 (國立中央博物館 學藝研究士)	92

제1부 : 기초강연

古代韓國と日本の文字文化交流

平川南 (日本 國立歴史民俗博物館長)

一、古代朝鮮と日本(倭)の文字と文体

漢字を学ぶ(七世紀)

●字書木簡

日本書紀第十四

熊津(久麻那利)

熊「汗吾(ウゴ)」

音訓 UNG KOM KOMA

漢音イウ(ユウ)

「熊汗羅彼下通布恋爾」

「蜚伊戸之忤懼」

蜚伊戸「皮伊(ハイ)シ」漢音ヒシ

八七×五×五〇五

奈良県飛鳥池遺跡出土の木簡。8世紀初め。漢字の読みが小字で示されている。

群島県山ノ上碑

〔銘文〕

辛巳歲集月三日記

佐野三家定賜健守命孫黑賣刀自此

新川臣兒斯多々弥足尼孫大兒臣娶生兒

長利僧母為記定文也 放光寺僧

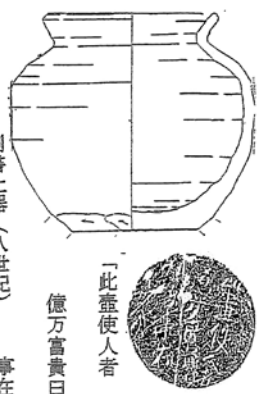
〔訓読〕

辛巳(巳) 歲集月三日記す

佐野の三家を定め賜える健守命の孫黑賣刀自、此れ

新川臣の兒斯多々弥足尼の孫大兒臣と娶いて生める兒

長利僧、母の為に記し定める文也 放光寺僧



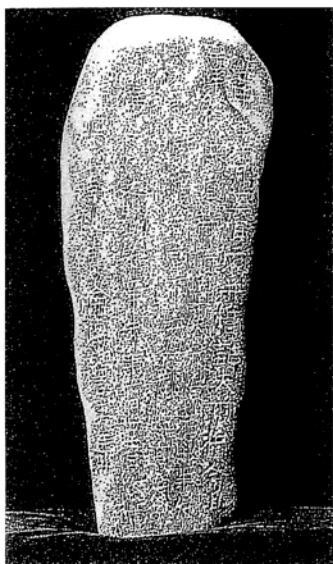
刻書土器(八世紀)

事在「

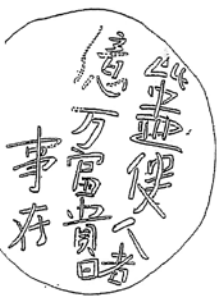
壬申誓記石(韓國慶州・新羅)

壬申年六月十六日一人并誓記天前誓今日三年以後忠道執持
過失无誓若此事失天大罪得誓若國不安大亂世可容行誓之
又別先辛未年七月廿二日大誓詩問書礼伝傳得誓三年
(読み下し)

壬申年六月十六日に、二人并びて誓い記す。天の前に誓い、
今自り三年以後、忠道を執持し、過失无きを誓い、若し此の
事を失えば、天に大罪を得んことを誓い、若し國安からず大
いに亂世たらば、まさに「忠道を行」べきを誓えり。又別
に先の辛未年七月廿二日に大いに誓い、詩「経」、尚書「礼伝
を倫い得んことを誓ふこと、三年。



▲壬申誓記石。1935年、新羅の古都慶州から出土した。冒頭の「壬申年」は552年または612年



埼玉県鳩山町
広町B線跡出土

漢音ーセイ
吳音ージョウ

【城】

高句麗ー「xor(ホル、またはコル)」
百濟ー「ki(キ)」
新羅ー「cas(ツァス)」

日本ー「サン」(『日本書紀』の訓)

大邱戊戌銘鳩作碑

- ①戊戌年土月朔十四日另冬里村高△鳩作記之此成在△
- ②人者都唯那寶藏阿尺干都唯那懸藏阿尺干
- ③大工尺仇利支村蓋利力兮費干支△上△蓋△利干
- ④道尺底△生之△△村△△夫作村毫令一伐奈生一伐
- ⑤居毛村代丁一伐另冬里村沙木乙一伐得所利村也得失利一伐
- ⑥鳩珍此只村△△一尺△△一尺另所△一伐伊此木利一尺
- ⑦△助只彼日此鳩大廣廿步高五步四尺長五十步此作
- ⑧起數者三百十二人功夫如十三日了作事之
- ⑨文作人蓋利兮一尺

滋賀県野州市西河原宮ノ内遺跡出土木簡

- 刀自右二人貸稻□稻二百□又□稻冊□貸
- 人佐太太連
- 首弥皮加之
- おびとのみはかし
- 二人知
- 文作人石木主寸文通。」
- (289) X 45 X 5

鎰と鑰

音ーイツ
訓ーかぎ(新羅・日本)
※中国では「鑰」にカギの意なし
(古の目方の単位)。

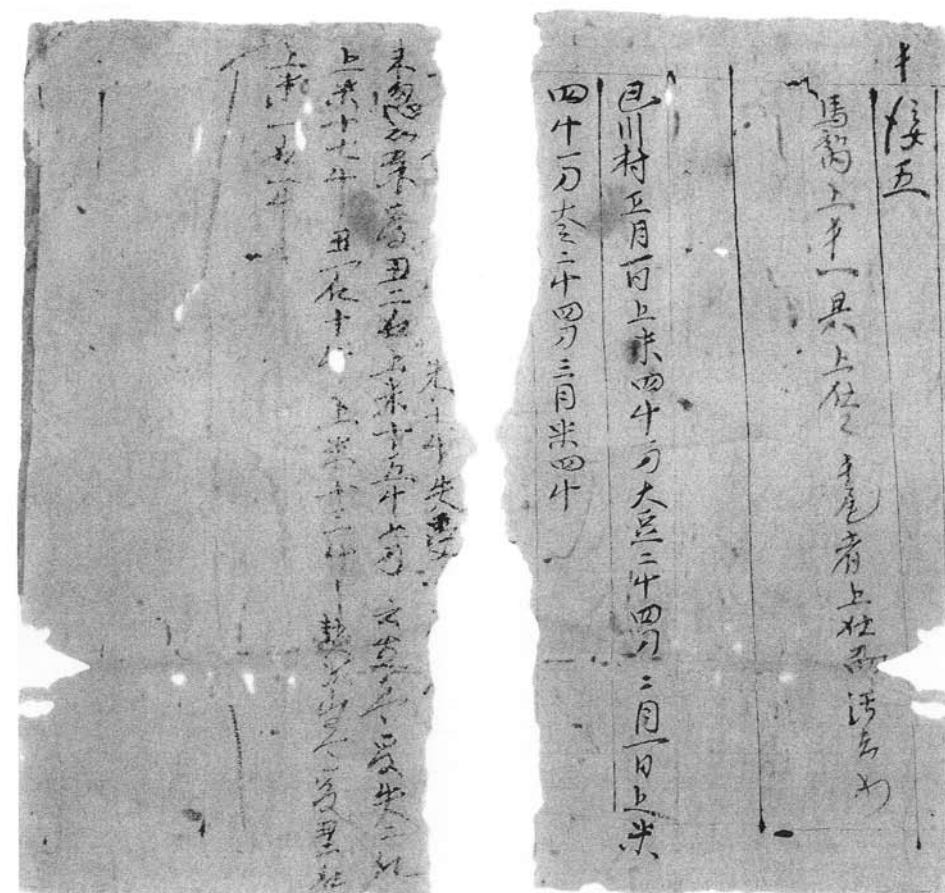
東門鎰

合零閼鎰



韓國・雁鴨池出土鉄製鑰とその銘文

二. 正倉院佐波理文書 — 穎稻・粳(穀)・米 —



33 佐波理加盤付属文書 表裏 (南倉47)

〔表文書〕

才倭五

馬飼上才一具上仕之 其尾者上仕而汚去如

巴川村正月一日上米四斗一刀大豆二斗四刀二月一日上米
四斗一刀大豆二斗四刀三月米四斗

〔裏文書〕

□

□米十斗失受□

永忽知^(蓋)受丑二石上米十五斗七刀之互^(蓋)□受失二石
上米十七斗丑一石十斗上米十三斗^(蓋)熱□山□受丑二石
上米一石一斗

永忽知 ^(蓋)	受丑二石	米十斗失受□
之互 ^(蓋)	受失二石	上米十五斗七刀(升)
	丑一石十斗	上米十七斗
熱□山□ ^(蓋)	受丑二石	上米一石一斗

「上」の例

○扶餘・双北里 第一号木簡

〔表〕

〔刻線〕

戊寅年六月中 固淳□三石

○

佐官貸食記

止夫三石上四石□□

佃麻那二石 比至二石上一石未二石 習利一石五斗上一石未一石 ×

〔刻線〕

〔裏〕

素麻一石五斗上一石五斗未七斗半 佃首門一石三斗半上一石未石甲 并十九石□×

○

今沽一石三斗半上一石未一石甲 刀已邑佐三石与

得十一石 ×

(二九一) × 四二 × 四 (単位ミリメートル) 型式〇一九

穎稻・粃・米

○兵庫県朝来市・柴遺跡出土木簡

〔驛子委文マ□足十束代稻粃一尺〕

316 × 32 × 5.5 033

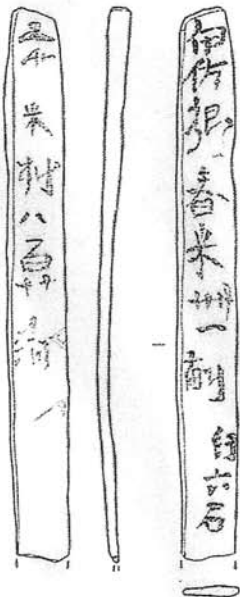
○茨城県筑西市・栗島遺跡出土木簡

第一号木簡 (七四三年〜九世紀中葉)

・伊佐郷春米冊一斛 自六石

・□□米料八百升束 □□□

(144) × 16 × 5 019



一束＝米五升と換算すれば、穎稻八二〇束×米五升＝春米四一〇〇升(＝四一斛)となる
(一斛＝一〇斗＝一〇〇升)。「春米冊一斛(石)」の割書部分に「白(米六石)」とあるので、
欠損箇所には「黒(米卅五石)」と記されていたとみなすことができよう。

「丑」の字体

扶余・陵山里寺址木簡

七号

「仇伐干好女村卑戸稗一石〇」

八号

「及伐城□刀巴稗」
「
」

九号

「竹戸□牽干支稗一」

○「𪛗」の旁部分の異体字

刃・刃・刃・刃
丑

らるを被
〔粃〕
26857

てゐる

らを被つてゐる米。粟

もみ。①穀物の實の皮。もみがら。すくも。穀皮。粃。②か

【粗】
26870

シウ
ニ、ユ
(集韻)忍九切

米コメ飯イハ〔説文〕𥼶、雜飯也、从米丑聲。

三、二〇一一年九月二一日公表の福岡市西区元岡古墳群G6号墳

象嵌銘文入り大刀――暦の受容――

大正八年正月

原自考作見十二果

大歲庚寅正月六日庚寅日時作刀凡十二果口

「練」
力

銘文部分の拡大

諸皇子舟師東征

日本書紀卷三 神武天皇(即位前紀甲寅年)

◎是年也太歲甲寅。◎其年冬十月丁巳朔辛酉。天皇親帥

日本書紀卷十七 繼體天皇(廿五年辛亥)

○冬

十二月丙申朔庚子葬于藍野陵。或本云。天皇廿八年歲次甲寅崩。而此云。廿五年歲次辛

于安羅營。城是月高麗弑其王安。又聞日本天皇及太子皇子俱崩。由此而言辛亥之歲當廿五年矣。後勘校者知レ之也。

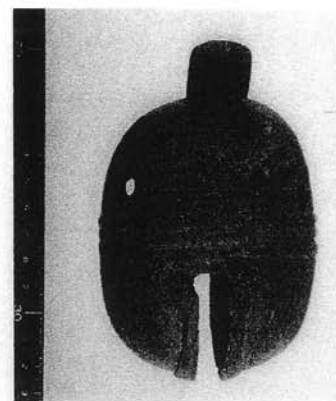
日本書紀卷十九 欽明天皇(十四年癸酉)

○六月遣内

臣・關使於百濟。仍賜良馬二疋。同船二隻。弓五十張。箭五十具。勅云。所請軍者。隨

王所須。別勅。博士。易博士。曆博士。等。宜依番上下。今上

件色人正當相代年月。宜付還使相代。又卜書。曆本種種藥物。可付送。



日本最大級の銅鈴

- 1、大きさは全長 12cm で、古墳時代では国内最大級。
- 2、これまでの出土例はいずれもその地域の有力豪族クラスの墓。
- 3、このような大型の銅鈴は馬に裝飾としてつけられたもので、朝鮮半島に起源をもつもの。



元岡・桑原遺跡群第 56 次調査地点遠景(南から)
石室内副葬品出土状況(南から)



一西区元岡古墳群G 6 号墳一

福岡市教育委員会

- 古墳の年代は七世紀中頃。墳丘規模は直径約 18m。
- 石室は両袖式単室の横穴式石室。玄室は幅 1.6m ～ 2.1m、全長 2.0m、天井高 1.8m。羨道は長さ 3.0m、幅 1.3m、高さ 1.4m。
- 出土遺物：玄室内から銘文入り象嵌大刀 1 点、水晶製切子玉、ガラス小玉、土玉、金銅製耳環、金銅製飾り金具破片、須恵器容器類など。閉塞部上面から青銅製大型鈴 1 点、墓道床面直上から鉄矛 1 点。

欽明天皇十五年甲戌

○二月百濟遣下部杆率將軍三貴。上部奈率物部烏等乞

救兵。仍貢德率東城子莫古代前番。奈率東城子言五經博士王柳貴代固

德馬丁安僧曇惠等九人代僧道深等七人別奉勅貢。易博士施德王道良

博士固德王保孫醫博士奈率王有悽陀採藥師施德潘量豐固德丁有陀。

樂人施德三斤季德已麻次季德進奴對德進陀皆依請代之。

延喜式卷第十六

陰陽寮

凡進曆者、具注御曆二卷、六月以前爲上卷、納漆、七月以後爲下卷、納漆

函、安漆案、御曆一百六十六卷、納漆櫃、著臺、十一月一日至延政門外候、中

東宮御曆、其七曜御曆、正月一日候承明門外候、並見

凡造曆用度者、御曆三卷、二卷具注、料、上紙一百廿張、請圖書寮、冊七張具注曆料、廿三張七曜

其麻紙四張、內藏寮、上墨大半廷、請圖書寮、上宋沙三兩、請圖書寮、免毛筆十二管、請圖書寮、膠

一兩、請圖書寮、花軸三枚、請圖書寮、白絹三條、別長一尺六寸、中宮東宮各二卷、其料亦准此、破

料在御曆料、御曆一百六十六卷料、紙二千六百五十六張、月別十六張、有兩、標紙料五十

六張、以二枚、草案料一百廿九張、曆草廿四張、日度草十五張、月度草十五張、交、曆本三卷料九

十張、冊七張具注本料、廿四張、曆草五張、五曜草五張、五曜行草廿張、墨十二延半、以二、鹿毛筆九十八管、已上紙筆墨並

糊料大豆三升三合、請圖書寮、檜軸一百六十六枚、工寮、竹十六株、山堀園

御曆 天皇に獻じられた具注曆を書寫して、諸司・諸國に頒布すること。また曆そのものを指す。維新6条に「内外諸司、各給一本、並令年所至所在」とあり、太政官式33条および儀式10には、外宮から内外諸司に頒つたとある。天皇に獻する具注曆は六月までを上巻、七月以降を下巻としたが、諸司・諸國に頒つものは一巻一年分で、合計一六六巻であった

奈良県明日香村 石神遺跡出土木簡

持統三年(六八九) 曆・元嘉曆



(表)



(裏)

持統天皇 三年 三月 ~ 四月

108・100・14 065

□ (庚カ) 申丸	□ (庚カ) 上玄	□ (庚カ) 虚厭	□ (申カ) 平	□ 天間日血忌
□ 辛酉破	□ 三月節急盈九	□ 馬牛出掠	□ 丁酉定	□ 天李乃井
□ 壬戌皮	□ 絶紀帰忌	□ 天間日	□ 戊戌丸	□ 望天倉小
□ 癸亥色	□ 忌	□ 忌	□ 己亥皮	□ 往亡天倉重
□ 子成	□ 忌	□ 忌	□ 庚子危	□ 人出宅大小
□ 丑枚	□ 忌	□ 忌	□ 丑成力	□ (成カ)

54 曆日編 (欽明天皇29年~同31年)

年 号 1年の日数	月	月の 大小	朔日 の 干支	朔		ユリウス暦			中 気			節 気		
				大余	小余	年	月	日	No.	大余	小余	No.	大余	小余
欽明29年 天皇 戊子 354日	1	小	丁酉	33.1662	568	2	14	(4) 37.8289	(5) 53.0476					
	2	大	丙寅	2.6968	568	3	14	(6) 8.2662	(7) 23.4848					
	3	小	丙申	32.2274	568	4	13	(8) 38.7034	(9) 53.9220					
	4	大	乙丑	1.7580	568	5	12	(10) 9.1406	(11) 24.3592					
	5	小	乙未	31.2886	568	6	11	(12) 39.5779	(13) 54.7565					
	6	大	甲子	0.8191	568	7	10	(14) 10.0151	(15) 25.2337					
	7	小	甲午	30.3497	568	8	9	(16) 40.4523	(17) 55.6709					
	8	大	癸亥	59.8803	568	9	7	(18) 10.8895	(19) 26.1081					
	9	小	癸巳	29.4109	568	10	7	(20) 41.3268	(21) 56.5454					
	10	大	壬戌	58.9415	568	11	5	(22) 11.7640	(23) 26.9826					
	11	大	壬辰	28.4721	568	12	5	(0) 42.2012	(1) 57.4198					
	12	小	壬戌	58.0027	569	1	4	(2) 12.6384						
同 30年 己丑 354日	1	大	辛卯	27.5332	569	2	2	(4) 43.0757	(3) 27.8570					
	2	小	辛酉	57.0638	569	3	4	(6) 13.5129	(5) 58.2943					
	3	大	庚寅	26.5944	569	4	2	(8) 43.9501	(7) 28.7315					
	4	小	庚申	56.1250	569	5	2	(10) 14.3873	(9) 59.1687					
	5	大	己丑	25.6556	569	5	31	(12) 44.8246	(11) 29.6059					
	6	小	己未	55.1862	569	6	30	(14) 15.2618	(13) 0.0432					
	7	大	戊子	24.7168	569	7	29	(16) 45.6990	(15) 30.4804					
	8	小	戊午	54.2473	569	8	28	(18) 16.1362	(17) 0.9176					
	9	大	丁亥	23.7779	569	9	26	(20) 46.5735	(19) 31.3549					
	10	小	丁巳	53.3085	569	10	26	(22) 17.0107	(21) 1.7921					
	11	大	丙戌	22.8391	569	11	24	(0) 47.4479	(23) 32.2293					
	12	小	丙辰	52.3697	569	12	24	(2) 17.8851	(1) 2.6665					
同 31年 庚寅 384日	1	大	乙酉	21.9003	570	1	22	(4) 48.3224	(3) 33.1038					
	2	小	乙卯	51.4309	570	2	21	(6) 18.7596	(5) 3.5410					
	3	大	甲申	20.9614	570	3	22	(8) 49.1968	(7) 33.9782					
	4	小	甲寅	50.4920	570	4	21	(10) 19.6340	(9) 4.4154					
	5	大	甲申	20.0226	570	5	21		(11) 34.8527					
	6	小	癸丑	49.5532	570	6	19	(12) 50.0713	(13) 5.2899					
	7	大	癸未	19.0838	570	7	19	(14) 20.5085	(15) 35.7271					
	8	小	壬子	48.6144	570	8	17	(16) 50.9457	(17) 6.1643					
	9	大	壬午	18.1449	570	9	16	(18) 21.3829	(19) 36.6016					
	10	小	辛亥	47.6755	570	10	15	(20) 51.8202	(21) 7.0388					
	11	大	辛巳	17.2061	570	11	14	(22) 22.2574	(23) 37.4760					
	12	小	庚戌	46.7367	570	12	13	(0) 52.6946	(1) 7.9132					
			庚辰	16.2673	571	1	12	(2) 23.1319	(3) 38.3505					

1) 書紀 4月甲申朔, 閏字脱落

現行太陽暦 (グレゴリオ暦) = ユリウス暦 + 2日

6 5 4 3 2 1
日 日 日 日 日 日
庚 己 戊 丁 丙 乙
寅 丑 子 亥 戌 酉

内田正男編著

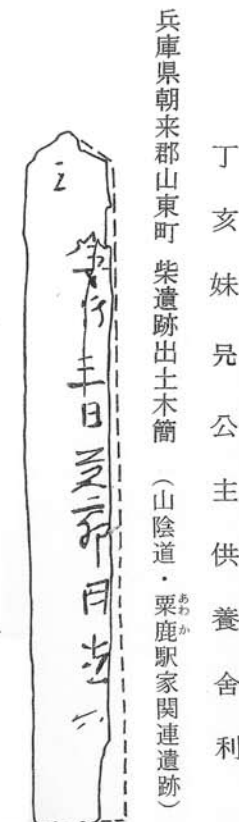
『日本暦日原典』

雄山閣

「以今月三日癸卯日送物」

242 × (29) × 45

文書木簡



丁亥妹兒公主供養舍利

창왕명석조사리감 昌王銘石造舍利龕 (陵山里寺跡)
Stone Sarira Shrine with inscription
567年, 부여 능사, 높이 74.0, 국립부여박물관, 국보 제288호

日本出土銘文刀剣一覧 (古墳時代)

番号	刀剣	時期	文字	素材	位置	現存長	古墳名等	所在地等	古墳の時期	備考	発見年
1	漢中平年銘大刀	186-189	24	金	背	110	東大寺山古墳	奈良県天理市	4世紀後半	重文	1961年
2	銀象嵌銘大刀	5世紀後半	75	銀	背	90.6	江田船山古墳	熊本県菊水町	5世紀後半	国宝	1873年
3	辛亥銘鉄剣	471年	115	金	表裏	73.5	福荷山古墳	埼玉県行田市	5世紀後半	国宝	1978年
4	王陽銘鉄剣	5世紀中頃	12	銀	表裏	73	福荷台1号墳	千葉県市原市	5世紀中頃		1968年
5	額田部臣銘大刀	6世紀後半	12	銀	裏	60	岡田山1号墳	島根県松江市	6世紀後半	重文	1983年
6	戊辰年銘大刀	608年	6	銅	表	68.8	箕谷2号墳	兵庫県養父市	7世紀前半	重文	1983年
7	七支刀	369年	60	金	表裏	84	石上神宮	天理市	伝世品 国宝		
参考資料	有銘卑龍文環頭大刀	5世紀	16	銀	表	84.6	東京国立博物館	東京都	伝世品 出土		
	丙子椒林剣	7世紀代	4	金	表	65.5	四天王寺	大阪市	伝世品 国宝		
	金象嵌銘直刀	7世紀代	4	金	表	77.5	-	群馬県	伝世品 重文		

大歳庚寅正月六日庚寅日時

제2부 : 주제 발표

韓國 古代 築城金石文의 特性
朴方龍 (國立中央博物館 考古歷史部長)

新羅浦項中城里碑にみる6世紀新羅碑の特質
李成市 (日本 早稻田大學 教授)

「龍王」銘木簡と古代東アジア世界
－ 韓日出土木簡研究の新展開 －
三上喜孝 (日本 山形大學 教授)

出土 文字資料에 나타난 人名表記 方法
朴仲煥 (國立金海博物館 學藝研究室長)

사발을 쓴 新羅文書(佐波理加盤付屬文書)의 檢討
李容賢 (國立中央博物館 學藝研究士)

韓國 古代 築城金石文의 特性

朴 方 龍

國立中央博物館

I. 韓國 古代의 築城工事

古代 韓國은 ‘城郭의 나라’, ‘山城의 나라’로 불려지고 있다. ‘城郭의 나라’는 古代 政治史的으로서의 중요성 뿐만 아니라 東亞細亞 어느 나라보다 그 수가 많은데에서 기인하며 일찍이 朝鮮 世宗代의 學者 梁誠之가 한 말이다. 또한 한국 성곽의 대부분이山城이고 어느 나라에서도 한국만큼 발전된 곳이 없기 때문에 ‘山城의 나라’라고 할 수 있는 것이다. 韓半島는 地形的으로 平地에 비하여 山地가 압도적으로 많은 점도 있지만 平地에 城郭을 축조한 경우는 行政城으로서 사람들의 접근이 용이한 장점은 있으나 防禦에는 불리하다. 따라서 역사상 古代로부터 끊임없는 外勢로부터 침입을 당해 왔기 때문에 守城用 성곽 축조가 활발히 이루어진 것이다. 平地城은 守城에 유리한 입지적 조건이 아니므로 後代의 行政城으로서 邑城 築造에 약간 이용되었고 대부분의 성곽은 山城을 선호하여 축성되었다.

한국 古代 城郭의 體城 築造法은 크게 土築城과 石築城으로 大別된다. 土築城은 성곽이 처음 나타날 때부터 만들어져 古代의 보편적인 축성기법 가운데 하나였고 百濟에서 많이 볼 수 있다. 石築城郭은 高句麗에서 일찍부터 축조되다가 新羅와 百濟에서는 5세기 무렵부터 채택된 築城法이다. 石城은 土城에 비하여 축조에 많은 시간과 인력이 소모되는 短點은 있으나, 築城 후에는 쉽게 무너지지 않아 半永久的으로 사용할 수 있는 長點이 있다. 고구려에서 石城築造는 五女山城, 尉那巖山城(山城子山城) 등 중국과 가까운 지역의 前期 山城에 많으며, 石城으로 築造한 확실한 時期를 알지 못하고 있지만, 삼국 가운데 가장 먼저 시작한 것은 분명하다. 百濟는 土城을 선호하는 경향이 있었고 熊津期와 泗泚期에 와서 內托法의 石築城을 채택하였던 것으로 보인다. 신라의 石築山城은 『三國史記』의 기록으로 보았을 때, 忠淸北道 報恩에 三年山城에서 찾아 볼 수 있다. 이 山城은 470년(慈悲王 13)에 축

조되었고 486년에 改築하였다는 石城이며 신라 石城으로 대표적인 예이다. 이와 같은 사실로 비추어보아 新羅의 경우, 늦어도 400年代 중반 무렵부터는 石城築造가 활발히 이루어 졌음을 알 수 있다. 이와 관련하여 古代에는 體城의 城石이나 城內 바위에 築城關聯 사실을 새기거나, 別途의 築城碑를 만들어 城壁에 세워두는 축성관련 金石文들이 집중적으로 만들어졌다.

II. 古代 築城關聯 金石文의 製作年代

축성관련 金石文이 만들어진 최초의 예로는 籠吾里山城 石刻이다.

1. 籠吾里山城 石刻

籠吾里山城은 平安北道 泰川郡 용산리(『朝鮮寶物古蹟調查資料』, 1943, 朝鮮總督府에는 태천군 西邑內面 山城洞)에 소재한다.

산성의 體城은 內托法으로 축성된 石築城인데 둘레가 1.3km, 화강암을 이용하여 四角錐形으로 다듬어 쌓았다. 이 산성의 南門址 안쪽 自然岩壁에 축성당시의 기록인 石刻文이 있다. 石刻文은 1943년에 발간된 『朝鮮寶物古蹟調查資料』에는 “성내 천연바위에 글자가 새겨진 것이 있으나 마멸되어 불명하다”고 한 것으로 보아 이때 처음으로 발견되었으나 그 내용을 파악하지 못하였던 것으로 보인다. 그 후 1957년 가을 태천고급중학교에서 향토사연구를 목적으로 이 山城을 조사하다가 자연암벽에서 글자를 발견하여 신의주역사박물관에 신고하였다고 한다. 이에 1958년 초에 定式으로 조사하여 學界에 소개되면서 그 내용이 밝혀졌다.

이 石刻은 南門址안에서 동북 100m지점에 있는 큰 玄武巖 자연암벽에 새긴 것으로 암벽의 石刻面 上部가 마치 碑蓋를 씌운 것 같아서 비바람을 가리도록 되어있고 石刻面이 北向이기 때문에 비바람을 적게 받아 지금까지 보존 될 수 있었다고 한다.

石刻文은 岩面을 70cm×50cm 크기로 다듬은 후 글자를 새겼다. 모두 3行 22字이며 1行의 길이는 57cm~60cm이다. 判讀文은 다음과 같다.

- ① 乙亥年八月前部
- ② 小大使者於九婁治
- ③ 成六百八十四間

이 石刻文은 乙亥年에 籠吾里山城을 축조하면서 이를 기념하기 위하여 자연 바위에 새겼던 것이다. ‘乙亥年’이 언제인가에 대해서 손량규는〈1987:20〉 瑠璃王 34년(15)설을 제기하고 있으나 이때에 둘레가 1.3km 되는 石築山城을 쌓았다고 할 수 없다. 이에 대하여 김레환·류택규는〈1958:53〉 書體로 보아 ‘乙亥年’을 4세기 후반 以後라

고 한 점이 주목된다. 이 石刻文은 籠吾里山城을 축조할 때 새긴 것이 확실하므로 城內에서 채집되는 土器片, 瓦片 등 유물과 축성기법을 확인하여 편년되어야 할 것이다. 신라의 경우 三年山城이 470년(慈悲王 13)에 축조되었다는 것을 참고하면 이보다 앞선 375년(小獸林王 5) 또는 435년(長壽王 23) 가운데 하나라고 생각된다. 閔德植이 〈1990:85~88〉 廣開土大王碑, 壺杆塚 壺杆銘文, 延嘉7年銘 金銅佛像 銘文 등의 書體와 유사하다고 한 점 등을 참고 하면 435년일 가능성이 크다고 판단된다.

2. 明活山城作城碑

明活山城은 신라의 首都 金京 동쪽 明活山에 있는 산성으로 都城을 수비하기 위하여 축성되었으며, 慈悲王 18년(475)~炤知王 10년(488)까지 行宮 역할을 하였던 곳이다. 1988년 이 山城의 北門址 부근에서 石城을 쌓을 때 만든 明活山城作城碑가 발견되었다.

明活山城作城碑는 9行 148字를 새겼는데 全文을 소개하면 다음과 같다.

- ① 辛未年 十一月 中 作城也 上人邏頭 本波部
- ② 伊皮余利 吉之 郡中上人 烏大谷 仇支支 下干支
- ③ 匠人 比智休 波日 并 工人 抽兮 下干支 徒 作受 長 四步
- ④ 五尺一寸 △叱兮 一伐 徒 作受 長 四步五尺一寸△△
- ⑤ 利 波日 徒 受 長 四步五尺一寸 合 高 十步 長十
- ⑥ 四步三尺三寸 此記者 古他門 中 西南回
- ⑦ 行 其作石立記 衆人至 十一月 十五日
- ⑧ 作始 十二月 廿日 了 積卅五日也
- ⑨ 書寫人 源欣利阿尺

이 碑石의 제작연대 ‘辛未年’은 551년(眞興王 12년)이다. 眞興王은 영토를 확장함과 동시에 首都 防禦에도 관심을 보여 이 山城을 土城에서 石城으로 고쳐 축성한 것이다. 上人邏頭 伊皮余利 吉之가 총책임자가 되고 그 이하 3개 무리(徒)를 동원하여 길이 14步 3尺 3寸되는 石城을 축조하였다는 내용이다. 현재 확실한 明活山城 築城碑로서는 1基만 확인되었으나 南山新城碑의 예로 보아 더 많은 築城碑가 세워졌을 것으로 추측된다.

3. 長安城 刻字城石

高句麗의 長安城은 平壤城으로 더 많이 알려진 都城이다. 『三國史記』 卷 19, 高句麗本紀 7, 陽原王 8년(552)條에 ‘築長安城’이라 하였고 平原王 28년(586)條에 ‘移都長安城’이라고 한 것에서 그 유례를 알 수 있다. 長安城은 都城으로서의 중요성이 있지만 무엇보다 1766년에 城壁에 새겨진 刻字城石이 발견되면서 주목되고 있는 성곽이다. 尹游의 『平壤續志』(1730년)에 처음으로 소개된 刻字城石은 내용이 불확실하여 이를 제외하면 현재까지 5점

이 알려져 있다. 가장 먼저 발견된 第1刻字城石은 1766년에 발견되어 『海東金石苑』에 수록되었고 第2刻字城石은 1829년에 발견되어 『海東金石苑』, 第3刻字城石은 1829년에 발견되어 『三韓金石錄』, 第4刻字城石은 1913년에 발견되어 『朝鮮金石總覽』에 각각 수록되었다. 第5刻字城石은 1964년에 발견되어 현재 인민대학습당 북서쪽 귀퉁이에 성벽에 복원되어 있다고 한다. 현재 第1·3刻字城石은 명문내용만 알려져 있고 城石은 所在未詳이며, 第2刻字城石은 梨花女子大學校博物館에, 第4刻字城石은 平壤中央歷史博物館에 각각 소장되어 있다.

第1刻字城石: 己丑年五月廿八日始役西向十一里小兄相夫若倅 ??利 造作

第2刻字城石: 己酉年△(三)月廿一日自此下向東十二里物苟小兄俳湏百頭作節矣

第3刻字城石: 己丑年三月廿一日自此下向△下二里內中百頭上位使尔文作節矣

第4刻字城石: 丙戌十二月中漢城下後 卍小兄文達節自此西北行涉之

第5刻字城石: 卦婁盖切小兄加群自此東廻上(△)里四尺治

이 刻字城石의 製作年代를 나타내는 己丑年, 己酉年, 丙戌年의 干支를 언제로 보아야 하는지에 대해서 學者 간의 견해차이가 있다. 그러나 長安城 축성이 552년(陽原王 8년)에 되었다는 『三國史記』의 기록을 따랐을 때 552년 以前으로는 볼 수 없으므로, 刻字城石의 丙戌年은 566년, 己丑年 569년, 己酉年 589년으로 추정되고 있다. 따라서 刻字城石은 566년~589년에 제작되었고 따라서 6세기 중후반 무렵 石城으로 築城 또는 改築되었다는 사실을 알 수 있다.

4. 南山新城碑

591년(眞平王 13년) 石城으로 축조할 당시의 築城碑이다. 1934년 第1碑가 발견된 이후로 破片을 포함하여 10점이 발견되었다. 이 가운데 全文을 알 수 있는 것으로는 第1碑를 비롯하여 第2·3·9碑 정도인데 전체적인 형식은 明活山城作城碑와 같다.

① 辛亥年二月廿六日南山新城作南山新城作節如法以作後三

② 年崩破者罪教事爲聞教令誓事之阿良邏頭沙喙

③ 音乃古大舍奴含道使沙喙合親大舍營沽道使沙

④ 喙△△△知大舍郡上村主阿良村今知撰干渠吐

⑤ △△知余利上千匠尺阿良村末丁次干奴舍村次

⑥ △△禮干文尺△文知阿尺城促上阿良沒奈生上

⑦ 干工尺阿△丁次干文尺竹生次一伐面捉上珍巾

⑧ △面捉上知禮次△捉上首次小石捉上辱厂次

⑨ △△△受十一步三尺八寸

〈第 1碑 判讀文〉

다만 南山新城碑에는 “辛亥年 二月廿六日 南山新城作節 如法以作後三年 崩破者 罪教事爲聞 教令誓事之”라는 꼭 같은 序頭部 양식이 있으나, 明活山城作城碑에는 없다는 차이점과 明活山城作城碑보다 築城 參加者의 職名과 人名을 좀더 세분하여 기록하여 한 층 발전된 형태를 보이고 있다는 정도이다. 南山新城碑의 1개 碑文에서 담당 한 거리는 담당지역의 역량에 따라 차이가 있었던 것으로 보이며, 이를 平均해 보면 12步 2尺 정도로서 明活山城作城碑의 담당거리 14步 3尺 3寸과 비교해 보았을 때 큰 차이는 없다.

5. 泗沘都城 銘文城石

高句麗의 성곽축조 관련 金石文으로는 籠吾里山城 刻石과 長安城 刻字城石이 있고 신라에는 明活山城作城碑와 南山新城碑, 關門城 新垆里城銘文城石이 있으나 백제에는 존재하지 않는 것으로 알려져 왔다.

그러나 2007년 무렵 忠南 扶餘郡 東南里 鄉校 동쪽 논 가운데 있던 것을 1928년 5월 扶餘博物館으로 옮겨졌다는 소위 ‘標石’을 李炳鎬(2007:119~120)는 都城築造와 관련이 있는 유물로 해석하는 견해를 발표하여 주목된다.

잘 알려진 대로 이 ‘泗沘都城 銘文城石’은 上部銘(20cm×44cm)과 前部銘(22.5cm×46.0cm) 두 개가 1組인 것으로 알려져 왔다.

—上部銘：上 卩前 卩 △(川)自此矣 △△△

—前部銘：前部

먼저 前部銘은 큰 글자로 ‘前部’라 하였고 上部銘은 ‘上 卩前 卩 川自此矣 △△△△’라고 작은 글씨로 썼다. 글씨 형태나 ‘上 卩 · 前 卩’의 ‘部’를 ‘卩’로 표기한 방식이 같은 점이나 크기가 비슷한 점으로 보아 두 점이 1set로 인식되고 있다. 이같이 인식 된 데는 이 유물이 1928년 扶餘 東南里 鄉校 동쪽 논(논둑)에서 발견되었고 2점이 함께 收拾되어 扶餘博物館에 보관되었다는 정도의 정보밖에 없었으며, 이를 百濟 部の 경계를 나타내는 標石으로 인식되어 왔기 때문이었다. 그러나 ‘前部銘’과 ‘上部銘’은 별도의 장소에서 수습되었고 수습한 날짜도 달랐다고 한다. 이에 대하여 李炳鎬는(2007:119~120) ‘前部銘’은 1933년 5월 鄉校 東便에서 발견되었고 ‘上部銘’은 鄉校 동쪽에서 발견된 ‘前部銘’보다 훨씬 서쪽인 定林寺址 북서쪽 市場入口 부근에서 발견되었다는 洪再善의 견해를 빌려 밝히고 있으며 ‘上部銘’에 주목하였다. 그는 “특히 ‘上 卩前 卩’명 표석은 고구려 평양성 석각과 내용과 형태가 매우 유사하여 도성 내 담장이 아닌 나성이나 부소산성의 ‘城壁’에 끼워졌던 것이 옮겨졌을 가능성을 배제할 수 없다”라고 하는 중요한 견해를 제시하였다. 그리고 “上部와 前部에서 어떤 지점을 경계로 일정하게 작업을 분담했음을 알려주는 자료로 활용될 수 있다. …나성 성벽에서 확인된 ‘축조구간 단위’와 관련시켜 보면 나성의 성벽을 쌓는데 일정한 작업 분담이 있었음을 다시금 확인하게 된다.”라고 하여 羅城 城壁에 작업분담 구간에 城石으로 사용되었음을(金英心 2007:252) 비치고 있다. 筆者 또한 전적으로 同意하며, 長安城 刻字城石 · 新垆里城의 銘文城石과 형태

가 흡사하고 30.5cm정도 뾰족하게 축 형태로 되어있어 城石이 틀림없다. ‘上部銘’의 내용 또한 長安城 刻字城石과 유사하므로 扶蘇山城이든 羅城이든 泗沘都城 築造와 관련된 金石文임은 확실하다고 생각하여 명칭을 ‘標石’이 아닌 ‘銘文城石’이라 호칭하였다. 제작연대는 聖王 16년(538) 熊津에서 泗沘都城으로 移都할 즈음, 都城을 정비하는 과정에 된 것으로 본다면 6세기 중반 무렵으로 생각해 볼 수 있을 것이다.

6. 關門城 新垆里城 銘文城石

新羅 金京의 東南쪽으로 침입하는 倭를 防禦하기 위하여 축성한 關門城의 新垆里城이 있다. 이 산성은 標高 590m 鳳栖山 줄기의 頂上部에 둘레 1.8km의 石城으로 包谷式이다. 그 서쪽으로 關門城이라고 하는 길이 12km 규모의 長城과는 별개의 山城이다. 이 新垆里城의 外城壁에 高句麗 長安城刻字城石과 같은 형태의 銘文城石 10개가 발견되었다.

第1銘文石：骨估南界

居七山北界 受地七步一尺

第2銘文石：熊南界

骨估北界 受地四步一尺八寸

第3 · 4銘文石：押啄南界

△△北界 △△△△△△△

第5銘文石：金京元千毛主作

北堺 受作五步五尺

第6銘文石：金京道△作

北堺 五步五尺

第7銘文石：切火郡北界 受地十步二(三)尺七寸

第8銘文石：退火南界

第9銘文石：西良郡

第10銘文石：△△郡 受地五步△尺北界

이 銘文石에는 축성연대를 나타내는 干支가 없이 담당 地名과 거리만 있다. 이 산성의 體城 축조방법은 前時代의 신라 성곽에서 볼 수 없는 물림쌓기(層段手法)로 되어 있고 城石 형태도 소위 ‘옥수수알 기법’과 유사하여 고구려 石築城의 축조수법과 흡사하다. 『三國史記』와 『三國遺事』에 기록된 대로 722년에 축성된 毛伐關門(關門城)과는 다르며, 두 성곽의 축조기법은 같은 계통으로 볼 수 있으므로 722년 이전에 축성된 것은 확실한 것으로 생각된다. 따라서 銘文石의 書體와 산성의 축성배경으로 보아 三國時代라기보다는 統一新羅 前後 7세기 中後半에 축성된 것으로 보인다.

앞서 살펴 본 축성관련 金石文을 정리 해 보면, 5세기 무렵 고구려 籠吾里山城에서 자연바위에 石城을 축조한 사실을 새긴 것에서 시작되었음을 알 수 있었다. 신라에서는 551년 明活山城 土城을 石城으로 改築하면서 明活山城作城碑를 세웠는데 地方民을 동원하여 石城을 쌓고 담당한 구간 마다 築城碑를 세웠다. 한편 고구려에선 6세기 중후반(566~589년) 長安城을 정비하는 과정에서 體城의 城壁 城石에 간략한 내용을 새겼다. 그 뒤를 이어 신라에서는 591년 南山新城을 축조하면서 南山新城碑를 담당구간 마다 세웠는데 碑文의 담당거리와 현재 남은 山城 길이를 참조해 보면 200基 가량 세워진 것으로 추측되고 있다.

이제까지 백제에서는 축성관련 金石文이 없는 것으로 알려져 있으나, 泗沘都城 內的 鄉校부근에서 발견되었다는 소위 ‘標石’은 泗沘都城 축조와 관련된 ‘泗沘都城 銘文城石’으로 판단된다. 이 銘文城石의 製作時期는 聖王 16년(538) 熊津에서 泗沘都城으로 移都할 즈음, 都城을 정비하는 과정에 새긴 것으로 보고 6세기 중반 무렵으로 추정하였다.

關門城 新垆里城의 銘文城石은 三國末 ~ 統一新羅時代 즉, 7세기 중후반 무렵의 축성되었으므로 古代의 마지막 築城關聯金石文임을 알 수 있게 되었다.

III. 古代 築城 金石文의 特性

1. 築城 時期 및 期間 問題

우리나라에서 石築山城이 三國時代에 축조되었다는 데는 모두가 인정하고 하고 있는 사실이지만 구체적인 築城時期와 築城 工事期間에 대해서는 문제시되고 있다.

築城關聯 金石文에서 作業時期 및 期間이 기록된 것을 찾아보면, 籠吾里山城 刻石에는 乙亥年(5세기 추정) 8월, 明活山城作城碑(551년)에는 11월 15일~12월 20일까지 작업이 이루어 졌고 모두 35일이 소요되었다고 하였다. 長安城刻字城石에는 5월 28일, 3월 21일, 3월 21일, 12월 中(566년~589년)이라 하였다. 그리고 南山新城碑에는 2월 26일(591년)로 되어 있다.

먼저 籠吾里山城의 ‘乙亥年’을 435년으로 본다면 고구려의 경우 5세기 초반 무렵에는 石城이 축조되었고, 신라는 551년 이전, 백제는 標石 제작연대로 본다면 泗沘都城과 관련하여 6세기 이전에 石城築造가 이루어 졌음을 알 수 있다. 月別로 보면 8월(籠吾里山城 刻石) 11월(明活山城作城碑), 長安城에는 3월, 5월, 12월로 기록되어 있다. 여기서 金石文에서의 ‘8월 · 11월 · 3월 · 5월 · 12월 · 2월’이라는 날짜는 공사를 시작한 날짜인지, 종료한 시점을 말하는 것 인지부터 밝혀져야 할 것이다. 이 문제는 明活山城作城碑에 따르면 첫머리에 “十一月中 作城也”라고 하였고 끝부분에 가서 “十一月 十五日 作始 十二月 廿日 了”라고 하여 첫머리에 나오는 11월이 공사를 시작한 날짜이고 공사기간은 35일이 소요되었음을 알 수 있다. 이 같은 사실은 南山新城碑에서도 보인다. 南山新城碑에는 “辛亥年二月廿六日 南山新城作”이라 하였고 『三國史記』에는 “辛亥年 秋七月築 南山城”이라 하였는데, 이는 2월 26일에 공사를 시작하여 秋7월에 완공되었으며, 4개월 남짓 걸렸던 것으로 파악된다. 그러므로 金石文에서의

‘8월 · 11월 · 3월 · 5월 · 12월 · 2월’은 모두 築城공사를 시작한 날짜로 보아도 좋을 듯하다. 1개 城郭의 築城 工事期間은 짧으면 35일 정도였고 三年山城처럼 예외적인 경우를 제외하면 4~5개월 정도 소요되었던 것으로 짐작해 볼 수 있을 것이다.

2. 築城工事 責任者の 官等

籠吾里山城 刻石에는 “前部 小大使者 於九婁治”, 明活山城作城碑에는 上人邏頭 本波部 伊皮余利 吉之, 長安城 刻字城石에는 小兄(第1 · 2 · 4 · 5刻字城石), 上位使(第3刻字城石), 百頭(第3刻字城石)가 있다. 百頭는 축성공사를 맡을 때의 職名으로 ‘100명 단위의 役夫를 조직했던 者’로 보기도 하는데, 末尾에 ‘頭’가 붙는 郡頭, 鎭頭, 邏頭 등은 武官職의 성격을 띤 官職이며, 南山新城碑에는 道使 · 邏頭 등의 官等이 大舍나 小舍에 해당된다. 籠吾里山城 築城 책임자의 관등이 小大使者이며, 이는 고구려 14官位 중에 拔位使者로부터 小兄까지를 第3階層으로 보는데 長安城 第3刻字城石의 上位使, 長安城 第1 · 2 · 4 · 5刻字城石의 小兄이 모두 여기에 속한다.

高句麗와 新羅에서 一定區間の 築城을 감독하였던 人物들의 官位는 낮았음이 파악된다. 이는 축성관련 金石文에 새겨진 人名들은 축성에 참여하였다는 기념으로서의 성격도 없지 않았겠지만, 이 보다는 추후 공사구간에 문제가 발생하였을 때 책임을 묻기 위한 것이었다고 보여 지며, 특히 築城碑를 세운 신라의 경우는 더욱 그러하다고 생각된다.

이와는 별도로 성곽 전체 구간을 총괄하는 총책임자의 경우에는 官職이 높았던 것 같다. 『三國史記』 卷 20, 高句麗本紀 8, 榮留王 25년(642)條에는 “西部大人 蓋蘇文에게 命하여 長城(千里長城)의 役事을 감독하게 하였다”라는 기록이 있다. 신라에서는 新羅本紀 3, 炤知麻立干 8年(486)條에 “正月에 伊滄 實竹을 將軍으로 삼고 一 善界의 장정 三千名을 징집하여 三年山城과 屈山城을 改築하였다”는 기록, 新羅本紀 5, 武烈王 3年(656년)條 에 “…金仁問이 唐 나라로부터 돌아와서 軍主로 임명되고 簞山城의 築造를 監督하였다”고 하였다. 『三國遺事』에도 聖德王 21년(722년) 10월 角干 元眞이 役夫 39,262名을 동원하여 毛伐關門(關門城)을 쌓았다는 기록으로 보아 중요 성곽의 축조 총책임자는 高官이었던 것이다.

3. 築城關聯 金石文 用語

三國의 축성관련 金石文에 공통적으로 쓰이는 용어가 있다. 年度끝에 ‘…中’, ‘𐏺(部)’, ‘自此’, ‘作’, ‘節’, ‘回, 行’, ‘治’는 三國이 공통적으로 많이 쓰는 용어이다.

‘…中’은 ‘~에’라는 의미로 사용되었는데 長安城 4刻字城石에 ‘丙戌 十二月 中’이라 하였고 明活山城作城碑에서는 ‘辛未年 十一月 中’이라 하였다. ‘自此’는 長安城 第2~第5刻字城石과 泗沘都城 銘文城石에도 보인다. 시작하는 지점을 나타내는 말이다.

‘𐏺(部)’는 字典에 ‘𐏺’를 ‘절’로 읽지만 삼국에서는 ‘部’의 의미로 쓰여 혼용하였음은 잘 알려진 사실이다. 前部 銘의 ‘前部’는 정자체로 ‘部’라고 하여 籠吾里山城의 前部와 같은 글자이고, 上部 銘의 ‘上 𐏺前 𐏺’는 異體字로 ‘𐏺’라고 하여 長安城 第4刻字城石과 같은 글자이다.

‘作’·‘節’은 長安城 第1~第4刻字城石과 南山新城碑의 序頭부분에 있으며 ‘作節’ 두 글자는 붙여서 사용하였다. 그리고 ‘作’은 南山新城碑 第3碑에서 ‘受作’ 關門城 新垆里城 第5·第6銘文石의 ‘作’, 第2銘文石의 ‘受地’와 같은 의미로도 쓰였으며, 籠吾里山城과 長安城 第5刻字城石에서의 ‘治’와 같은 의미로 썼다.

‘回’는 長安城 第5刻字城石에, ‘行’은 長安城 第4刻字城石에 있으며, 두 글자를 붙여서 ‘回行’으로 쓴 예로는 明活山城作城碑이다. 모두 築城 시작 방향을 나타내는 뜻으로 사용되었다.

이밖에도 劃數가 비교적 적은 두 글자의 官等名을 上下로 붙여서 合字한 예가 南山新城碑에서 보인다(秦弘燮 1976:149). 즉 南山新城碑에는 大舍·小舍(第2碑·第3碑), 一伐(第2碑·第4碑·第9碑), 上千(第2碑·第4碑·第5碑), 一尺(第2碑·第4碑·第9碑), 大鳥·小鳥(第3碑), 上人(第4碑) 등 官等名이다. 이와 같은 古新羅의 合字는 統一新羅時代의 癸酉銘全氏阿彌陀佛三尊石像(國寶 106號, 673年)·癸酉銘三尊千佛碑像(國寶 108號, 673年)에 ‘大舍·小舍’, 貞元銘永川菁堤碑(798年)의 ‘乃末’의 예에서 볼 수 있는 것처럼 계속되었다.

IV. 맺음말에 대신하여

以上에서 韓國 古代 築城關聯 金石文에 대하여 살펴보았다.

韓國 古代 築城關聯 金石文은 고구려의 長安城, 백제의 泗沘都城, 신라의 明活山城과 南山新城, 三國末 무렵에는 關門城의 新垆里城에서 볼 수 있어 三國 공통으로 나타나는 한국적인 특징이라 할 수 있다. 또한 고구려의 籠吾里山城외에는 모두 都城을 守備하기 위한 山城이거나 重要視되던 城郭에 축성관련 金石文을 남겼다. 三國 가운데 고구려·백제는 城石이나 자연 바위에 간단한 축성기록을 남긴데 비하여, 신라는 明活山城作城碑와 南山新城碑같은 碑石에 築城內容을 상세하게 기록한 점이 특이 하다. 신라는 壬申誓記石에서 ‘三年’을 기약하고 수련할 것을 誓約하였고 南山新城 築城에도 ‘作後三年’ 안에 城壁이 崩壞될 경우 책임을 지고 補修 하겠다고 하여 瑕疵補修期間을 三年으로 하였다는 것도 흥미롭다. 이러한 전통은 關門城의 新垆里城에서 長安城 刻字城石과 泗沘都城 銘文城石과 동일한 형식으로, 銘文內容上 明活山城作城碑와 南山新城碑로 이어져 왔던 것이다.

결국 築城關聯 金石文은 부실공사로 인한 폐단을 막기 위하여 築城 實務者(地域), 담당거리 등을 기록한 것이며, 이는 古代 東亞細亞 여러 나라에서 볼 수 없는 韓國 城郭만의 특징이라 하겠다.

[參考文獻]

－ 김레환·류택규, 「룡오리산성에서 발견된 고구려 석각문」, 『문화유산』 1958 - 6, 과학백과사전출판사, 1958.

－ 秦弘燮, 「南山新城碑의 綜合的 考察」, 『三國時代의 美術文化』, 同和出版公社, 1976.

－ 崔義林, 『고구려 평양성』, 과학백과사전출판사, 1978.

－ 佐藤興治, 「朝鮮古代の山城」, 『日本城郭大系』 別卷 I, 新人物往來社, 1981.

－ 朴方龍, 「新羅關門城의 銘文石 考察」, 『美術資料』 31, 國立中央博物館, 1982.

－ 田中俊明, 「高句麗長安城城壁石刻の基礎的研究」, 『史林』 68-4호, 1985.

－ 손량구, 「태천군 룡오리산성을 쌓은 년대에 대하여」, 『조선고고연구』, 1987.

－ 朴方龍, 「明活山城作城碑의 檢討」, 『美術資料』 41, 國立中央博物館, 1988.

－ 閔德植, 「高句麗 籠吾里山城 磨崖石刻의 「乙亥年」에 대하여」, 『韓國上古史學報』 3호, 1990.

－ 徐永大, 「平壤城 石刻」, 『譯註 韓國古代金石文』 1, 韓國古代社會研究所, 1992.

－ 金英心, 「標石」, 『譯註 韓國古代金石文』 1, 韓國古代社會研究所, 1992.

－ 閔德植, 「高句麗의 平壤城刻字城石에 관한 研究」, 『韓國上古史學報』 13호, 1993.

－ 李炳鎬, 「泗沘都城의 構造와 築造過程」, 『百濟의 建築과 土木』, 忠清南道歷史文化研究院, 2007.

－ 金英心, 「百濟의 地方統治에 관한 몇 가지 再檢討」, 『韓國古代史研究』 48, 韓國古代史學會, 2007.

新羅浦項中城里碑にみる6世紀新羅碑の特質

李 成 市

日本 早稲田大學

はじめに

2009年5月に、新羅の王都が所在した慶州の北方約20キロ隔てる慶尚北道浦項市興海邑中城里から新羅碑が発見された（以下、中城里碑と呼称する）（1）。

碑文冒頭には「辛巳」の干支が見られ、これが立碑年と推定されるが、国立慶州文化財研究所による調査を経た後の公表の際には、441年と501年の可能性が示された。その後の研究によって、辛巳年は501年とする見解が有力であるが、441年を積極的に唱える論者や、5世紀の可能性を排除すべきでないという慎重な立場の論者もあって、必ずしも一致していない（2）。

約200字からなる碑文の特徴は、3行目冒頭に刻まれた碑文中のどの文字よりも大きな「教」字に認められる。この「教」字の前に、新羅の王京に居住する六部名を帯びた数人の人名を記して、さらに「教」字の後には、六部名や官位を帯びた王京人と王京外の地方名を帯びた首長たちの人名とを列挙し、その上で「若後世更導人者与重罪」という威嚇の文言を記すという形式からなる。こうした様式は、6世紀初頭の「迎日冷水碑」（503年）や「蔚珍鳳坪碑」（524四年）などの新羅碑と類似している（3）。

これまで、韓国において中城里碑に関する学会会議は3回開催され17人の研究者が各々の見解を発表し、そ

れらに基づいた論文集も刊行されているものの、碑文の立碑年次はもとより、その性格に関しては様々に異論があって共通理解がえられていない（4）。

これまで新羅中古期の石碑研究をリードしてきた朱甫墩氏は、最も基本的で核心的といえることすら確實になっていないことに苦言を呈している。何よりも「碑文の性急な歴史解釈を試みる前に、碑文自体と関連した基礎的なことについて前後の脈絡が通るように徹底して問い詰めてみる努力と姿勢が絶対的に望まれる」と指摘している（5）。

そこで本稿は、中城里碑の可能な限り共有できる知見を提示し、併せて6世紀新羅碑の特質について言及してみたい。

1. 石碑の釈文

碑は、高さ105.6cm、幅は47cmから49.4cmほどの自然石（花崗岩）を利用しており、碑石の一面には12行にわたって約200字の文字が刻まれている。罫線はなく、各行の字数は不統一であり、最多で22字、最小では5字からなっている。字の大きさも一定せず、最大3×5cm、最小2×2cmほどである。碑面の下方は、全体の四分の一ほどのスペースが空白になっており、この部分は台座の部分に埋め込まれ、立碑されていたものと推測されている（6）。

碑石全体の保存状態は良好であり、数箇所に碑面が剥落した部分があるものの、刻まれた文字の判読は比較的容易である。問題は3箇所にわたる剥落した部分の文字であるが、1行目冒頭の干支の後に、年月が記されていたと推定されており、この箇所の文字数が特定できない。ただ1行目の下端は後に論じるように、さらに2字があった可能性がある。また、6行目から8行目にかけての上端部は、6行目の上部に2字、8行目最初の1字が欠けているので、206字前後と推定される。

国立慶州文化財研究所が2009年9月に開催した学術シンポジウムで公表した資料および、シンポジウム当日の現碑の調査やこれまでの各論者の検討を参照しながら作成した釈文は次のとおりである。

（3）蔚珍鳳坪新羅碑については、李成市「蔚珍鳳坪新羅碑の基礎的研究」（『古代東アジアの民族と国家』岩波書店、1998年）、冷水碑については、韓国古代市研究会編『韓国古代史研究』（3、迎日冷水里新羅碑特集号、1990年）、深津行徳「迎日冷水新羅碑について」（『韓』116、1990年11月）を参照。

（4）シンポジウムの発表論文は、下記ものを参照。文化財庁・国立慶州文化財研究所『浦項中城里碑発見記念シンポジウム』（2009年9月3日、慶州普門団地内ドリームセンター）、浦項精神文化研究院・韓国古代史学会『新発見浦項中城里新羅碑に対する歴史学的考察』（2009年10月6、7日、浦項市庁）、韓国古代史学会『第113回定期発表会『浦項中城里碑考察』』2010年4月10日、慶北大学）。

（5）朱甫墩「浦項中城里新羅碑に対する研究展望」（『韓国古代史研究』（59、2010年9月、ソウル）33、34頁）。

（6）国立慶州文化財研究所『浦項中城里新羅碑』（前掲書）16頁。

（1）国立慶州文化財研究所『浦項中城里新羅碑』（国立慶州文化財研究所、2009年、慶州）。

（2）441年を積極的に唱える見解は、盧重国「浦項中城里碑を通してみた麻立干時期新羅の紛争処理手順と六部体制の運営」（『韓国古代史研究』（59、2010年9月、ソウル）であり、李文基「浦項中城里新羅碑の発見とその意義」（『韓国古代史研究』（56、特集 浦項中城里新羅碑、2009年12月、ソウル）は441年の可能性を排除しないとする。

① 辛巳() 只折蘆葛()

② 喙部習智阿干支沙喙斯德智阿干支

③ 教沙喙尔抽智奈麻喙部本智奈麻本牟子

④ 喙沙利夷斯利白争人喙評公斯弥沙喙夷須牟旦

⑤ 伐喙斯利壹伐皮末智本波喙柴干支弗乃壹伐金評

⑥ □□干支祭智壹伐使人奈蘇毒只道使喙念牟智沙

⑦ 喙鄒須智世令于居伐壹斯利蘇豆古利村仇鄒列支

⑧ □干支沸竹休壹金知那音支村卜岳干支走斤壹金知

⑨ 珍伐壹晋云豆智沙干支宮日夫智宮奪尔今更還

⑩ 牟旦伐喙作民沙干支使人果西牟利白口若後世更

⑪ 導人者与重罪典書与牟豆故記

⑫ 沙喙心刀里

積文備考 * 不明な文字だが積文可能な文字

□ 積文不可能な文字

— 積文が一定していない文字

2. 立碑年次

立碑年の「辛巳年」を特定する手がかりとして注目したいのは、2行目の「沙喙 斯德智 阿干支」なる人物である。というのも503年の冷水碑には、「沙喙至都盧葛文王」の次に「沙喙斯德智阿干支」と記されており、同一人物とみなせるからである。論者によっては、「徳」字は判読できず「斯德智」とは見なしがたいとするが、現碑を熟視すれば、「徳」字と見なして特段の問題はない(7)。

また、一行目の「折蘆」の直前の文字は、当初より「中」と積文され、「辛巳」年の下に「某月」の文字

を推測し、さらに時格の助詞である「中」字が続くものと推定されてきたが(8)、残画から「中」字とはなりえない。この箇所は、字画の痕跡から、ある文字の左下の部分に相当するので、あえて推測すれば「只」字の左下の部分に近い(9)。

「只」字であれば、下の2文字と続けて「只折蘆」となり、冷水碑に見える「沙喙斯德智阿干支」の直前に記された「至都盧葛文王」の「至都盧」の異表記となる。その下の文字には草冠の字画が残っており(10)、その下が剥落して数文字のスペースがあるので「葛文王」が入る余地は十分にある。

冷水碑にも見える「至都盧葛文王」とは、500年に即位したと伝わる智證王のことであり、『三国史記』や『三国遺事』には、智證王の諱として「智大路」「智度路」「智哲老」などと伝わっており、「只折蘆」と積文できれば、これらの智證王の諱の表記と対応することになる。

冷水碑によれば、「癸未年九月廿五日」に、「至都盧葛文王」を筆頭にして「沙喙斯德智阿干支」等の7人が「教」を下す主体となり、財物紛争の裁定に関与しているが(11)、このような形式に対応するかのように、中城里碑には1行目から2行目にかけて次のように3名の人物名が3行目冒頭の「教」字の前に刻されており、この「教」の主体として記されているとみなすことができる。

□□ 只折蘆 葛□□

喙部 習智 阿干支

沙喙 斯德智 阿干支

両碑に著録された人名の一致や、「教」の主体になりうるとい地位の対応関係からも、碑の立碑年次である「辛巳」年は、冷水碑に2年先立つ501年と見なせる。また、これによって「辛巳」の後の剥落した部分には、これまで年月を推定してきたものの、冷水碑には「至都盧葛文王」を「沙喙」としているのも、ここに部名が入る可能性があることを提起しておきたい(12)。

碑文中でひときわ大書された「教」の主体としての位置に、冷水碑と同一の人物が検出されることは形式的にも軽視されてはならず、これらの点をも踏まえて、立碑年次の「辛巳」年は501年と考えられる。

(8) 国立慶州文化財研究所『浦項中城里新羅碑』(前掲書)24頁、宣石悦「浦項中城里碑の金石学的位置」(文化財庁・国立慶州文化財研究所『浦項中城里碑発見記念シンポジウム』前掲)41頁。

(9) 2009年9月6日のシンポジウム開催前に許可された調査で確認し、当日の宣石悦の発表に対する討論で指摘した。ただし、同碑文の第6行14行目にも「只」字があるって、字画の角度がやや異なる点に課題を残している。

(10) 草冠の字画については、ほぼ一致した指摘がある。また、その下が大きく剥落していることは現碑によって確認できる。

(11) 木村誠「朝鮮における古代国家の形成」(『新版 古代の日本』2、角川書店、1992年)115頁。

(12) 「只折蘆」を「至都盧葛文王」と推定することについて、「只」字とは判読できないとする批判の他に、中城里の2年後に立碑された冷水碑に「至都盧」とある人名と全く異なる表記がなされうるかという疑念も強く出されている。朱甫墩「浦項中城里新羅碑に対する研究展望」(前掲)13～15頁。

(7) 盧泰敦「浦項中城里碑と外位」(『韓国古代史研究』(59、前掲、52、53頁)には、同様の趣旨の指摘がある。

3. 六部の表記法

これまでの中城里碑研究において、諸説が百出する理由の一斑は、碑文の大変を占める歴記事の構成を明確に分節できないことにあった。論者によって、部名、人名、官位の分節が一致しないのである。新羅王京人は、六つの地縁的、血縁的な集団から構成されており、「六部」と称した。中城里碑は、これまで文献にも石碑にも現れなかった表記がなされているために、分節を困難にしていた。

中城里碑には、六部中、五つの部が現れるが、それらは、次の通りである。

喙、沙喙、牟旦伐喙、本波喙、金評

これらの部名のうち四つの部には、「喙」字がつくが、「喙」は文献史料には、「梁」と記され、「梁」は「督」字でも表記されていたので、「トク」「タク」と読まれていたと指摘されてきた(13)。

これまで「喙」字を含む部名は、喙部と沙喙部の二つに限られてきたが、さらに二つの部にも「喙」が附いていることが判明した。そもそも喙部には「及梁」との異表記が文献に伝わっていた。「及」とは、「および」「並びに」の固有語「●」(mit)」を表記することによって、「物事の根本、基礎」を意味する固有語の「●」(mit)をいわば仮借したのであって、「及梁」とは「本来の梁部」であり、沙梁(沙喙)とは「沙」が新の訓(「●」sai)を表すとの指摘がなされていた(14)。つまり「本来の梁部」に対して、「新たな梁部(喙部)」ということになる。

したがって、中城里碑によって、さらに「牟旦伐」の喙や、「本波」の喙という部名の表記法があったことが判明した(15)。六部名の由来を解明する上で、中城里碑がはたす史料的作用は小さくない。要するに、六部とは、「喙」を基底にしていたのである。

さらに新たに判明した部名表記の一つに金評がある(16)。「金評」とは、文献史料の「習比」「習部」に比定され、冷水碑には「斯波」と表されていた。「習」は「sup」を、「比」は「pi」「pir」を写したと

の指摘がすでにあるように(17)、それらの音は「斯波」に対応していることは容易に推測できる。また「斯」と「金」が互換的に用いられていたことは、新羅の国号が「斯羅」「徐羅伐」などと表記され、それが王京を意味する「金城」にも転化して用いられていることから問題はない。

「評」とは、古代日本において「コホリ」と読まれる例が知られているが、「評」が古代韓国語の村の義である「pol」を写したとする説もまた古くから唱えられている(18)。つまり、「評」は「比」「波」のp音で一致しており、そえゆえ「金評」は、「習比」「斯波」と同一の実体の異表記であると見なせる。

注目すべきは、六部のひとつに「評」字をもつ「金評」が現れると共に、中城里碑には、喙部を「喙評」とも記している点である(19)。

「喙評」とは、『梁書』新羅伝には、521年に派遣された新羅の使節によって梁に伝えられた新羅の国情に関わる記事に現れていた(20)。すなわち、それによれば、新羅の邑の名称は、「内に在る」ものを「啄評」と言い、外に在る「五二邑勒」に対して、内に「六啄評」があったと梁王朝に伝えられていたのである。六つの「啄評」こそは、王京の六部を指称するのであって(21)、六部の部名が「喙」、「喙評」を基本としていたことを中城里碑は伝えており、同時代の文献と金石文の両者は一致することになる(22)。

以上の六部名の理解が得られれば、中城里碑に記された人物は、30名となり、一覧表に示したとおりである。

4. 碑文の構成

中城里碑の特徴は動詞が少なく、まとまった文章を構成している部分もわずかであって、文字の大半は匿名記事で占められているために、その内容の正確な把握は困難とされてきた。しかしながら、これまでの論者の見解は、およそ「争人、奪尔、更還などの用語とともに『若後世更導人者与重罪』という文章を媒介

(13) 「喙」の音は「カイ」であるが、梁、督、喙などと互換的に用いられており、新羅では、「トク」、「タク」と読まれていたと見られている。末松保和「新羅六部考」(『新羅史の諸問題』東洋文庫、1954年) 299、300頁。

(14) 末松保和「新羅六部考」(前掲書) 300頁。末松は、前掲恭作の指摘をそのまま用いて及梁部は「元からの梁部の意味である」としているが、「及」は、「および」「並びに」の固有語「●」(mit)」を表記するのに用いることによって、さらに「物事の根本、基礎」を意味する固有語の「●」(mit)を表記するという転化の過程が省略されている。中城里碑によって、「牟旦伐喙」「本波喙」が検出され、「沙喙」とあわせて、「及梁」が「本源的な喙」を意味することが明らかになった。

(15) 末松保和「新羅六部考」(前掲書、301頁)は根拠は異なるが、「本彼も、もと『本彼トク』といはれてゐたのではないかと疑われる」と指摘していた。なお、「本波喙」までを部名とすると、人名は、「柴」1字となるが、朱甫噉「浦項中城里新羅碑に対する研究展望」(前掲誌、23頁)は、尊待の接尾辞である「智」「知」などもなく、「柴」の1字をもって名を表記することはないと批判している。

(16) 李鎔賢「中城里碑の基礎的検討－冷水碑・鳳坪碑との比較的視点」(韓国古代史学会『第113回定期発表会 浦項中城里碑考察』2010年4月10日、慶北大学) 33頁。これまで「金評」を人名と見なしたのは6行目の冒頭の文字を「沙」と判読し、その下の文字「干支」と続けて「沙干支」としたことに基づく。しかし、「沙」と判読することは文字の痕跡がほとんどなく困難である。しかも同一部内(本波)の人物であるとすれば、官位の序列から、ここに「沙干支」がくることはありえない。つとに橋本繁氏は観察にもとづき、「金評」を部名として把握することを唱えていた。

(17) 末松保和「新羅六部考」(前掲書) 304頁。

(18) 研究史の概要は、末松保和「梁書新羅伝考」(『新羅史の諸問題』前掲) 388、390頁参照。

(19) 李鎔賢「中城里碑の基礎的検討－冷水碑・鳳坪碑との比較的視点」(前掲)。

(20) 武田幸男「新羅官位制の成立」(旗田巍先生古稀記念会編『朝鮮歴史論集』上巻、龍溪書舎、1979年) 180頁。

(21) 今西龍「新羅史通史」(『新羅史研究』国書刊行会、1970年) 7頁。

(22) 中城里碑には、喙部は、「喙」、「喙部」、「喙評」と三通りの異なる表記が同一の碑の中でなされていたことになる。

にして、その当時、ある諍いが進行した果てに、中央の政治勢力が公式的に介入し、これ対する正式な判決が下されたことによって一段落したという概略は不十分ながらも明らかである」(23)との指摘があるように、少なくともこうした理解が最大公約的な見通しとして共有されている。

このような理解を基礎として全体の構成を検討してみると、中城里碑には、6世紀初頭の二つの新羅碑にみられるように、役名ないし職名として「争人」「使人」「典書」などがあり、それらの下に人名が列挙されている。そこで、以下において、立碑年(辛巳)の下に記されている全文を、そのまま文字を入れ替えることなく順次記してみることにする。

それらの表記に際しては、役名ないし職名を上端に記し、動詞は下端に太字で記すことにする。また作業仮説として一つの集団と見なせる場合は冒頭に数字を付し、歴名部分は、出身地、人名、官位に分節して、全文を掲げればつぎのとおりである。(資料参照)

見られるように、碑文中の歴名は(1)から(8)までのグループに分けることができる。「教」の主体である(1)と、「争人」の歴名である(3)については既に述べたとおり、それらは王京の六部人で構成されている。王京人は(2)(4)(8)にも見られるが、それらは所属する部が明記されており、官位を帯びる者と無い者がある。

王京人が帯びる官位(京位)は(1)と(2)には、「阿干支」と「奈麻」がみられ、520年を画期に体系化される17等の京位体系の中に見出すことができる(24)。(6)には、「豆智」と「牟旦伐喙」の「作民」(25)が「沙干支」を帯びているが、これもまた京位の体系に見出せる。ただし、「豆智」には京位を帯びながら部名がなく、この点是不審であるものの、(6)が単なる歴名記事でなく、紛争の内容を示すので、これについては次節で検討することにする。

王京人が帯びるとされる官位で問題となるのは「争人」が帯びている「干支」と「壹伐」とである。「干支」は、すでに冷水碑や鳳坪碑にも現れているように、部の有力者や地方の首長が帯びており、京位や外位の体系に組み込まれない伝統的首長号とみられている(26)。

一方「壹伐」は、京位の体系に求めるならば、第1位の「壹伐干支」に比定できると考えられるが、中城里碑が立てられた6世紀初頭には京位は体系化されておらず、「干支」2字の脱落もそれと関連させて考えておきたい。いずれにしても「干支」と同様に部の高位者であったとみられる。

(5)は四つの地方名の下に6人の人名が列挙されているが、「干支」は上述のとおり、冷水碑に村主が

帯びている事例がある。また、「壹金知」は、冷水碑には「壹今知」とあって、やはり村主の帯びている官位として記されているが、現在まで知られている京位や外位の体系内に見出すことができない。しかしながら、冷水碑の2人の村主が各々「干支」と「壹今知」を帯びていることに対応しており、この当時には外位の体系は未成立ではあるものの、「壹金知」を外位の範疇でとらえておきたい。

部名も地方名も欠いているのは(7)使人の「果西牟利」と、(8)典書の「与牟豆」であるが、その果たしている役割を勘案して王京人と推定しておきたい。

以上の八つのグループの歴名にみられる人物の出身地と官位を検討したが、王京人で構成されている(1)(2)(4)(8)は、喙部と沙喙部との二部で構成されており、6世紀の新羅碑に広く見られるように、行政にあたる指導層の構成に一致する(27)。したがって、これらの人物が碑石の発見地で生じた紛争の解決に、行政執行の立場で関与したと推測することができる。また、「争人」は六部中の五部の有力者層で構成されており、「争人」の名称が冠されているように、紛争の利害に関与する者たちと推定される。

そもそも紛争は立碑された地域(興海邑)が中心的な位置を占めていたであろうが、(5)に見られるように、四つの地域の首長の名が記されており、紛争に関わる地域は、特定の一つの地域というよりは、複数の地域にまたがっていたと想定したほうがよさそうである。

これらの八つの集団が相互にどのように結びつくのかについては、集団の歴名の終わりに記された動詞に注目してみたい。中城里碑に見られる動詞は、まとまりをもった集団の末尾に記されていることから、作業仮説として、それらの動詞を各集団の行動内容を示すものとして全体の流れを下記のように見なしておくことにする。なお(6)の解釈は碑文の核心的な内容であるので、次節で論じることにする。

- (1) 只折盧葛文王以下の3人が、教した。
- (2) 沙喙と喙部の5人が白した(申し伝えた)。
- (3) 争人は喙部、沙喙、牟旦伐喙、本波喙、金評の五部の代表者たちである。
- (4) 使人として奈蘇毒只の道使(地方官)である喙と沙喙部の2人が世令した。
- (5) 于居伐、蘇豆古利村、那首支村、珍伐の四地域の首長の6人は云った。
- (6) 「豆智 沙干支 宮、日夫智 宮、奪余、今更還 牟旦伐喙 作民 沙干支」
- (7) 使人の果西牟利は、白口した(申し伝えた)
若し後世に更導する人は重罪を与える
- (8) 典書の与牟豆は故記した(そのまま記した)。

(27) 武田幸男「新羅の二人派遣官と外司正」(西嶋定生博士追悼論文集編集委員会『西嶋博士追悼論文集』山川出版社、2000年) 396頁。

(23) 朱甫墩「浦項中城里新羅碑に対する研究展望」(前掲誌、12頁)

(24) 新羅官位制については、武田幸男「新羅官位制の成立にかんする覚書」(武田幸男編『朝鮮社会の史的展開と東アジア』山川出版社、1997年)参照。

(25) これまでの中城里碑研究にあっては、新羅の人名表記には、「作民」という漢語として意味をなすような表記はありえないとの見解が支配的である。しかし部名と官位の間にありながら、上記のような理由のみをもって人名と見なさないのは理解しがたい。

(26) 武田幸男「新羅官位制の成立にかんする覚書」(前掲書)124頁。

5. 「争人」と紛争の対象

(1) から (8) までの推移によって、案件の紛争処理に対する王権の意志が伝達され執行された過程を見て取ることができる。なかでも、「争人」は、紛争に関わる王京の利害関係者であり、その紛争に直接関わっているのは、(5) に記された四地域の首長たちとみられる。そのような四地域の首長たちが「云った」とされる内容が下記の (6) の文章である。

「豆智 沙干支 宮、日夫智 宮、奪尔、今更還 牟旦伐喙 作民 沙干支」

(6) のこの部分と、(7) の「若後世更導人者と重罪」とある文章のみが、中城里碑文中では、ひとまとまりの文章をなしており、紛争の処理に直接関わる内容が記されていると推測される。

そこで (6) の解釈であるが、動詞が「奪尔」「更還」とあることから、従来この動詞の主語が誰であるかが重要な課題とされてきた。ただ、奪ったり、還したりするには、目的語がなければならず、ここでは主語を特定する前に、目的語を明らかにしておきたい。結論を先に言えば、奪ったり、還したりした対象として最もふさわしいのは、動詞の直前にある「豆智」と「日夫智」の2人の「宮」をおいて他にはありえない。というのも碑文中で「宮」のみが奪ったり、還したりする対象になりえるからである。

新羅の「宮」については、「宅」と互換的に用いられており、7世紀以降の事例ではあるが、真骨貴族(王族)の家号や、「宅一区」のように建物の一画を表したり、官司・離宮などの施設・機関を表したりする用例が確認できる(28)。とりわけ最後の用例が目されるが、施設・機関としての「宮」の性格をよく示すものとして、『三国史記』文武王二年(662)条には、対高句麗戦の論功行賞のなかで、

功を論じ、本彼宮の財貨、田莊、奴僕を中分して庚信・仁問に賜う。

とあって、「宮」が財貨、田莊、奴僕などの従属民をも含む経営体であったことをかいま見ることができる。9世紀に30以上伝わる真骨貴族の「宅」にも各々家政機関があった。その支配権は広く新羅の全土に及んでおり、やはり9世紀の例ではあるが石刻の田券(『開仙寺石燈記』891年、全羅道潭陽郡)にも宅の所有地が刻まれている(29)。

また、高麗初期に康州(慶尚南道晋州)に所在した伯巖禪寺の古伝(『三国遺事』巻3、伯巖寺石塔舍利条)には、

前代の新羅の時、北宅の廳基を捨てて玆の寺を置く。

とあって、地方に所在した宅の所有地には「廳」つまりは家政機関が存在したことが伝わっている。

したがって、「豆智」と「日夫智」の「宮」は、中城里の付近にあったとしても不都合な点はない。中城里碑の発見された興海邑は、新羅が5世紀末より高句麗との抗争を激化させてゆく東海岸の幹線道を北上する、いわば起点としての要衝の地であり、碑石が発見された地点から南に700メートルほど隔てたところには彌実城(一名、南彌秩夫城)がある。この彌実城については、『三国史記』新羅本紀・智證麻立干五(504)年秋九月条に、

役夫を徴して波里・彌實・珍徳・骨火等の十二城を築く。

とある「彌實」城に該当するとみられており、智證王代に築造されたとする記録があるとなら、この地域が6世紀初頭の新羅にとって前哨基地としての役割を果たしていたと推定さる(30)。

この地域の付近に所在していたと推測される「豆智」と「日夫智」の「宮」が、この時に改めて還された(「今更還」とされるが、とすれば、還された対象がなければならない。(6) には「今更還」の後に「牟旦伐喙の 作民・沙干支」と続いているにも拘わらず、この人物が歴名中であっては孤立しているように見えた。しかし、この人物こそが「宮」が還される対象になるのではなかろうか。つまり、「豆智の宮と日夫智の宮を奪ったが、今更めて(再び)牟旦伐喙の 作民に還す」と解釈してみたい。

碑文中の最大の疑問とされる「豆智の宮と日夫智の宮を奪った」とする主体(主語)については、(5) の4地方の6人の首長が該当するのではなかろうか。なぜならば、まず(5) の末尾で「云った」という内容を(6) で「豆智の宮と日夫智の宮を奪ったが、今更めて牟旦伐喙の 作民に還す」と受けていると見なせるからである。

このように(6) で紛争の解決策が6人の主体によって宣誓された後に、(7) では、使人の果西牟が申し伝えたとする言葉は、「若し後世に更導する人は重罪を与う」というものであった。こうした文言が当地でなされなければ、この地で立碑する根拠はなくなるであろうから、威嚇の文言が差し向けられた対象こそが、奪ったり還したりした主体とならざるをえない。

これと同じように、冷水碑でも紛争の解決策を教令をもって示した後に、財物紛争に関わった珎而麻村の2人に対して、

(28) 李成市「正倉院所藏新羅甄貼布記の研究」(『古代東アジアの民族と国家』岩波書店、1998年) 319～321頁。

(29) 李成市「正倉院所藏新羅甄貼布記の研究」(前掲書) 334頁。

(30) 国立慶州文化財研究所『浦項中城里新羅碑』(前掲書) 14頁。

末鄒斯申支此二人、莫更導此財、若更導者、教其重罪耳。

末鄒と斯申支の二人は、後にこの財を更（ふたたび）導（の）べる莫かれ。若し更び導れば、其れ重罪にせんことを教す。

と教が下されている。中城里碑と冷水碑の両者の文言は、酷似しているだけでなく、冷水碑の場合は、財物紛争の当事者に言い渡されていることから、同様に（5）の6人に対して、「更導」すれば（むしかえせば）「重罪」をもって処することを告知したものと推量される。

要するに、4地域の首長たちが、この地域にあった「豆智」と「日夫智」2人の「宮」を奪ったが、それを牟旦伐喙の「作民」に返還すると述べさせた上で、この問題を再度、言挙げすることを法的規制で強く禁止し、裁定の経緯を関係者と共に記し、将来にわたって順守させるために碑石に刻んだことになる。

ついでながら、「豆智」と「日夫智」2人には部名が記されていなかったが、2人の宮が「牟旦伐喙」の「作民」に「更還」された（再び還された）ところから、2人の属していた部もまた「牟旦伐喙」ではなかったかと推測しておきたい。

おわりに

中城里碑の発見以来、2年が経過するが、これまで中城里碑の性格は、「五里霧中」との指摘もあるように（31）碑文の内容は判然としなかった。しかし、歴名記事の分節を明確にすれば、立碑年については、冷水碑や鳳坪碑など6世紀初頭の新羅碑の基本的な様式は一致し、「教」の主体となる人物の占める位置や地方人が帯びる称号、官位などから、両者がきわめて近い時期に立碑されたことは否定できない。中城里碑は、501年に建立された現存最古の新羅碑とみなせる。

碑石の内容についても、基本的な構成において冷水碑と多くの点で共通する形式を備えている。碑文のおおよその内容は、王京六部人が六部の外方に展開していた経営体としての「宮」をめぐる王京人と在地首長との紛争について、新羅王権が紛争を処理した経緯を記して告知した布告碑とみなせる。

残された疑問は、在地首長たちによる王京人の「宮」に関わる紛争に対して、六部中の五部までの有力者が「争人」として名を連ねていることである。「争人」が、地方に所在した「宮」をめぐる紛争に、いかなる立場で、どのように関与したのかを明らかにしなければならないであろう。

「争人」が紛争の利害に関わると論じたが、六部有力者が地方に領有する「宮」の所有関係に関与するところこそ、この時代の王京六部の史的性格が凝縮されているように思われる。六部とは支配共同体と概念

化できるように（32）、各部は慶州に居住する六つの地縁的血縁的集団として、互いに外方（他共同体）への支配において利害を共有する「共同体」であった。六部は一体となり、『梁書』新羅伝わる新羅領域内の「五十二邑勒」に対して軍事的、貢納的、宗教的支配をしていたとみられる。

その一方で、六部の各部は、外方の地域に対して各々が固有の支配領域を各々に展開していたであろう。それらは支配共同体が、古代国家として公的領域を拡大していく際に（それは王権を伸張させていく過程でもあるが）、必ずや抵触せざるを得ない不可避の利害調整の過程であったはずである。中城里碑には、行政執行の役割を担った者たちが喙部と沙喙部の二部で構成されているように、新羅の中核的な政治集団はこの二部で形成されてゆく。「争人」が喙部、沙喙部を除いて各部の有力者で占められているのも、そのような関係を暗示しているものと推察される。

6世紀の新羅の石碑に刻された王京人の人名には、ほとんど例外なく、部名が明記されている。そのような人名表記に不可欠の部名は、7世紀末以降には全く現れなくなる。部名を誇示し、わけても喙部、沙喙部の二つの部を中心に、中核的な政治集団が形成されていたことを示している点は、6世紀における新羅碑の共通した特徴である。中城里碑は6部中の5部の名を刻んでいる点で最も多く、六部の歴史的由来を探る上でも注目されるが、中城里が6世紀以降の新羅碑の原初的な政治集団のありかたが遺憾なく示されており、そのような第三権力としての新羅六部の権力構造を示しているところに格別の意義があるといえよう。

（31）朱甫瞰「浦項中城里新羅碑に対する研究展望」（前掲誌）12頁。

（32）武田幸男「朝鮮三国の国家形成」（『朝鮮史研究会論文集』17、1980年3月）。

「蔚珍鳳坪新羅碑」(五二四年)

- 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46
- 一 甲辰年正月十五日、倭部牟即智麻錦王、錦王沙喙部、倭智麻文王本波部、夫智、
- 二 千支寄喙部、美斯智千支沙喙部、粘智太阿千支先智阿千支、一毒夫智、一吉千支、喙勿力智、一吉千支、
- 三 慎、宋智居伐千支、一夫智太奈麻、一尔智太奈麻、心智奈麻沙喙部、十斯智奈麻悉尔智奈麻等所教事、
- 四 別教令居伐千支、牟羅男只本是倭人、是倭人前時王大教、法道侯、昨陰所界城、失兵、遠城、滅、大軍、起、若、
- 五 者、一依、爲、之、人、備、土、軍、王、大、奴、村、貧、其、值、一、二、其、餘、尹、種、種、奴、人、法、
- 六 新羅六部、然、斑、牛、口、口、口、事、大、人、喙、部、內、沙、智、奈、麻、沙、喙、部、一、登、智、奈、麻、男、次、邪、足、智、喙、部、比、須、妻、邪、足、智、居、伐、牟、羅、道、
- 七 使、卒、波、小、舍、帝、智、悉、道、使、烏、婁、次、小、舍、帝、智、居、伐、牟、羅、尼、牟、利、一、伐、弥、宜、智、波、且、部、只、斯、利、口、智、阿、大、今、村、使、人、
- 八 奈、尔、利、杖、六、十、葛、戶、奈、尔、利、居、口、尺、男、弥、只、村、使、人、異、口、杖、百、口、即、斤、利、杖、百、悉、支、軍、主、喙、部、尔、夫、智、奈、
- 九 麻、節、書、人、牟、珍、斯、利、公、吉、之、智、沙、喙、部、善、文、吉、之、智、新、人、喙、部、述、刀、小、烏、帝、智、沙、喙、部、牟、利、智、小、烏、帝、智、
- 十、立、石、碑、人、喙、部、博、士、于、時、教、之、若、此、者、誓、罪、於、天、居、伐、牟、羅、異、知、巴、下、千、支、辛、日、智、一、尺、世、中、卒、三、百、九、十、八

- A 甲辰年正月十五日、倭部牟即智麻錦王「歷名A」等所教事。
- B 別教令居伐千支、牟羅男只本是倭人、是倭人前時王大教、法道侯、昨陰所界城、失兵、遠城、滅、大軍、起、若、一依、爲、之、人、備、土、軍、王、大、奴、村、貧、其、值、一、二、其、餘、尹、種、種、奴、人、法、
- C 新羅六部、然、斑、牛、口、口、口、事、大、人、喙、部、內、沙、智、奈、麻、沙、喙、部、一、登、智、奈、麻、男、次、邪、足、智、喙、部、比、須、妻、邪、足、智、居、伐、牟、羅、道、
- D 于時教之若此者誓罪於天。「歷名D」。
- (A) 甲辰年正月十五日、倭部牟即智麻錦王の……等に教せし所の事。
- (B) 別に教令す。「居伐牟羅・男弥只は、本とされ倭人、是れ倭人と雖も、前時、王大いに教せしに、「法道侯く、昨陰なれば、所界の城、兵を失い遠城滅びん。大いに軍を起し、若し有らば、一に依りて之を爲せ」と。人を備え土を寧ぜよ。」と。王大いに、奴村の其の値一二を貧ぐり、其餘は種種、奴人法を尹だす。
- (D) 若し此のごときは、罪せらるるを天に誓う

(A)		(B)		(C)		(D)		(E)		(F)		(G)		(H)		(I)		(J)		(K)		(L)		(M)		(N)		(O)		(P)		(Q)		(R)		(S)		(T)		(U)		(V)		(W)		(X)		(Y)		(Z)		(AA)		(AB)		(AC)		(AD)		(AE)		(AF)		(AG)		(AH)		(AI)		(AJ)		(AK)		(AL)		(AM)		(AN)		(AO)		(AP)		(AQ)		(AR)		(AS)		(AT)		(AU)		(AV)		(AW)		(AX)		(AY)		(AZ)		(BA)		(BB)		(BC)		(BD)		(BE)		(BF)		(BG)		(BH)		(BI)		(BJ)		(BK)		(BL)		(BM)		(BN)		(BO)		(BP)		(BQ)		(BR)		(BS)		(BT)		(BU)		(BV)		(BW)		(BX)		(BY)		(BZ)		(CA)		(CB)		(CC)		(CD)		(CE)		(CF)		(CG)		(CH)		(CI)		(CJ)		(CK)		(CL)		(CM)		(CN)		(CO)		(CP)		(CQ)		(CR)		(CS)		(CT)		(CU)		(CV)		(CW)		(CX)		(CY)		(CZ)		(DA)		(DB)		(DC)		(DD)		(DE)		(DF)		(DG)		(DH)		(DI)		(DJ)		(DK)		(DL)		(DM)		(DN)		(DO)		(DP)		(DQ)		(DR)		(DS)		(DT)		(DU)		(DV)		(DW)		(DX)		(DY)		(DZ)		(EA)		(EB)		(EC)		(ED)		(EE)		(EF)		(EG)		(EH)		(EI)		(EJ)		(EK)		(EL)		(EM)		(EN)		(EO)		(EP)		(EQ)		(ER)		(ES)		(ET)		(EU)		(EV)		(EW)		(EX)		(EY)		(EZ)		(FA)		(FB)		(FC)		(FD)		(FE)		(FF)		(FG)		(FH)		(FI)		(FJ)		(FK)		(FL)		(FM)		(FN)		(FO)		(FP)		(FQ)		(FR)		(FS)		(FT)		(FU)		(FV)		(FW)		(FX)		(FY)		(FZ)		(GA)		(GB)		(GC)		(GD)		(GE)		(GF)		(GG)		(GH)		(GI)		(GJ)		(GK)		(GL)		(GM)		(GN)		(GO)		(GP)		(GQ)		(GR)		(GS)		(GT)		(GU)		(GV)		(GW)		(GX)		(GY)		(GZ)		(HA)		(HB)		(HC)		(HD)		(HE)		(HF)		(HG)		(HH)		(HI)		(HJ)		(HK)		(HL)		(HM)		(HN)		(HO)		(HP)		(HQ)		(HR)		(HS)		(HT)		(HU)		(HV)		(HW)		(HX)		(HY)		(HZ)		(IA)		(IB)		(IC)		(ID)		(IE)		(IF)		(IG)		(IH)		(IJ)		(IK)		(IL)		(IM)		(IN)		(IO)		(IP)		(IQ)		(IR)		(IS)		(IT)		(IU)		(IV)		(IW)		(IX)		(IY)		(IZ)		(JA)		(JB)		(JC)		(JD)		(JE)		(JF)		(JG)		(JH)		(JI)		(JJ)		(JK)		(JL)		(JM)		(JN)		(JO)		(JP)		(JQ)		(JR)		(JS)		(JT)		(JU)		(JV)		(JW)		(JX)		(JY)		(JZ)		(KA)		(KB)		(KC)		(KD)		(KE)		(KF)		(KG)		(KH)		(KI)		(KJ)		(KK)		(KL)		(KM)		(KN)		(KO)		(KP)		(KQ)		(KR)		(KS)		(KT)		(KU)		(KV)		(KW)		(KX)		(KY)		(KZ)		(LA)		(LB)		(LC)		(LD)		(LE)		(LF)		(LG)		(LH)		(LI)		(LJ)		(LK)		(LM)		(LN)		(LO)		(LP)		(LQ)		(LR)		(LS)		(LT)		(LU)		(LV)		(LW)		(LX)		(LY)		(LZ)		(MA)		(MB)		(MC)		(MD)		(ME)		(MF)		(MG)		(MH)		(MI)		(MJ)		(MK)		(ML)		(MM)		(MN)		(MO)		(MP)		(MQ)		(MR)		(MS)		(MT)		(MU)		(MV)		(MW)		(MX)		(MY)		(MZ)		(NA)		(NB)		(NC)		(ND)		(NE)		(NF)		(NG)		(NH)		(NI)		(NJ)		(NK)		(NL)		(NM)		(NN)		(NO)		(NP)		(NQ)		(NR)		(NS)		(NT)		(NU)		(NV)		(NW)		(NX)		(NY)		(NZ)		(OA)		(OB)		(OC)		(OD)		(OE)		(OF)		(OG)		(OH)		(OI)		(OJ)		(OK)		(OL)		(OM)		(ON)		(OO)		(OP)		(OQ)		(OR)		(OS)		(OT)		(OU)		(OV)		(OW)		(OX)		(OY)		(OZ)		(PA)		(PB)		(PC)		(PD)		(PE)		(PF)		(PG)		(PH)		(PI)		(PJ)		(PK)		(PL)		(PM)		(PN)		(PO)		(PP)		(PQ)		(PR)		(PS)		(PT)		(PU)		(PV)		(PW)		(PX)		(PY)		(PZ)		(QA)		(QB)		(QC)		(QD)		(QE)		(QF)		(QG)		(QH)		(QI)		(QJ)		(QK)		(QL)		(QM)		(QN)		(QO)		(QP)		(QQ)		(QR)		(QS)		(QT)		(QU)		(QV)		(QW)		(QX)		(QY)		(QZ)		(RA)		(RB)		(RC)		(RD)		(RE)		(RF)		(RG)		(RH)		(RI)		(RJ)		(RK)		(RL)		(RM)		(RN)		(RO)		(RP)		(RQ)		(RR)		(RS)		(RT)		(RU)		(RV)		(RW)		(RX)		(RY)		(RZ)		(SA)		(SB)		(SC)		(SD)		(SE)		(SF)		(SG)		(SH)		(SI)		(SJ)		(SK)		(SL)		(SM)		(SN)		(SO)		(SP)		(SQ)		(SR)		(SS)		(ST)		(SU)		(SV)		(SW)		(SX)		(SY)		(SZ)		(TA)		(TB)		(TC)		(TD)		(TE)		(TF)		(TG)		(TH)		(TI)		(TJ)		(TK)		(TL)		(TM)		(TN)		(TO)		(TP)		(TQ)		(TR)		(TS)		(TT)		(TU)		(TV)		(TW)		(TX)		(TY)		(TZ)		(UA)		(UB)		(UC)		(UD)		(UE)		(UF)		(UG)		(UH)		(UI)		(UJ)		(UK)		(UL)		(UM)		(UN)		(UO)		(UP)		(UQ)		(UR)		(US)		(UT)		(UU)		(UV)		(UW)		(UX)		(UY)		(UZ)		(VA)		(VB)		(VC)		(VD)		(VE)		(VF)		(VG)		(VH)		(VI)		(VJ)		(VK)		(VL)		(VM)		(VN)		(VO)		(VP)		(VQ)		(VR)		(VS)		(VT)		(VU)		(VV)		(VW)		(VX)		(VY)		(VZ)		(WA)		(WB)		(WC)		(WD)		(WE)		(WF)		(WG)		(WH)		(WI)		(WJ)		(WK)		(WL)		(WM)		(WN)		(WO)		(WP)		(WQ)		(WR)		(WS)		(WT)		(WU)		(WV)		(WW)		(WX)		(WY)		(WZ)		(XA)		(XB)		(XC)		(XD)		(XE)		(XF)		(XG)		(XH)		(XI)		(XJ)		(XK)		(XL)		(XM)		(XN)		(XO)		(XP)		(XQ)		(XR)		(XS)		(XT)		(XU)		(XV)		(XW)		(XZ)		(YA)		(YB)		(YC)		(YD)		(YE)		(YF)		(YG)		(YH)		(YI)		(YJ)		(YK)		(YL)		(YM)		(YN)		(YO)		(YP)		(YQ)		(YR)		(YS)		(YT)		(YU)		(YV)		(YW)		(YZ)		(ZA)		(ZB)		(ZC)		(ZD)		(ZE)		(ZF)		(ZG)		(ZH)		(ZI)		(ZJ)		(ZK)		(ZL)		(ZM)		(ZN)		(ZO)		(ZP)		(ZQ)		(ZR)		(ZS)		(ZT)		(ZU)		(ZV)		(ZW)		(ZX)		(ZY)		(ZZ)	
役名	職名	出身地	人名	官位(主)	官位(輔)																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																										
立石碑人	新人	師書人	悉支主	男弥只村使人	阿太今村使人	葛戸桑村使人	居伐牟羅連使	悉支連使	大人	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部	沙唵部																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																												

「南山新城碑」

(A)	役名	出身所	職名	人名	貫石(石高)
(B)	家	沙家		新主智 乃智	(H) (H)
(C)	武庫人	沙家	家	△△△ 千惣智 只主智 只心智	(或△△△) ④區斗支 ④區斗支 ④斗支 ④區斗支
(D)	家	本家 結臣	家	照親智 重忠智	②斗支 ②斗支
(E)	家	家	家	重主智 刻重智 須根你 心覺△	①宗家
(F)	家	家	家	沙主 照親利 照親文	
(G)	村主		村主	要文 須文	斗支 現今智

A 斯羅の喙・斯夫智王と乃智王。此の二王、教を用つて「坏而麻村の節居利を譲と爲し、其れをして財を得さしめよ」と教す。

B ⑥癸未年九月廿五日 沙喙・至都盧・葛文王と斯德智・阿干支と子倍智・居伐干支と喙尔夫智・壹干支と只心智・居伐干支と本彼・頭腹智・干支と斯彼・暮斯智・干支。

⑦此の七王等、共論して教を用つて、「前世の二王の教を譲と爲し、財物を取るは盡く節居利をして之を得さしめよ」と教す。

⑧別に教す。「節居利、若し先に死して後は、其の弟の兒、斯奴をして此の財を得さしめよ」と教す。

⑨別に教す。「末郷と斯申支。此の二人、後に此の財を更増する莫かれ。若し更増せば、其れ重罪にせん」と教す。

C ⑩典事人、沙喙・壹夫智・奈麻と到盧と弗須仇休と喙・耽須道使・心管公と喙・沙夫と那斯利と沙喙・蘇那支。

⑪此の七人、跟跪して了事せしを所白し、牛を烹して、献いて誥す。故に記す。

D 村主の與支・干支と須壹今智。此の二人、世に了事す。故に記す。

(五九一年) 南山新城碑·第一碑 祝文

[illegible]

9	8	7	6	5	4	3	2	1	
□	□	□	□	□	喙	音	年	辛	1
□	□	□	□	□	□	崩	破	亥	2
□	□	□	□	□	□	者	罪	年	3
□	□	□	□	□	□	赦	教	二	4
□	□	□	□	□	□	舍	事	月	5
□	□	□	□	□	□	舍	爲	廿	6
□	□	□	□	□	□	道	開	六	7
□	□	□	□	□	□	使	教	日	8
□	□	□	□	□	□	沙	令	南	9
□	□	□	□	□	□	喙	新	山	10
□	□	□	□	□	□	合	城	城	11
□	□	□	□	□	□	親	督	事	12
□	□	□	□	□	□	大	之	節	13
□	□	□	□	□	□	舍	阿	如	14
□	□	□	□	□	□	營	良	法	15
□	□	□	□	□	□	塢	良	以	16
□	□	□	□	□	□	道	暹	作	17
□	□	□	□	□	□	使	頭	後	18
□	□	□	□	□	□	沙	沙	三	19
□	□	□	□	□	□	喙	喙	月	20

[illegible]

46_

신라 포항 中城里碑에 보이는 6세기 신라비의 특징

李 成 市

日本 早稻田大學

*번역 : 정 애 영 (숙명여대)

머리말

2009년 5월에 신라의 왕도가 있었던 경주에서 북쪽으로 약 20킬로 떨어진 경상북도 포항시 흥해興海읍 중성中城里에서 신라비가 발견되었다(이하 중성리비로 부르겠다).¹⁾

비문 모두에는 「辛巳」의 간지가 보이고 이것이 비가 세워진 해로 추정되는데 국립경주문화재연구소에서 조사한 후, 441년과 501년의 가능성이 제시되었다. 그 후의 연구에 의해 辛巳年은 501년이라는 견해가 유력해졌으나 441년을 적극적으로 주장하는 논자나 5세기의 가능성을 배제할 수 없다는 신중한 입장의 논자도 있어 반드시 일치하지는 않고 있다.²⁾

약 200자로 이루어진 비문의 특징은 3행 째 첫머리에 새겨진 비문 중의 어느 글자보다도 큰 「教」자가 보인다는 점이다. 이 「教」자 앞에 신라 왕경에 거주하는 六部名을 띤 수 명의 인명을 쓰고, 「教」자 뒤에는 六部名이나 관위를 지닌 왕경인과 왕경 외의 지방명을 지닌 수장들의 인명을 열거하고 그 위에 관위를 가진 왕경인과 왕경외의 지

방명을 가진 수장들의 인명을 열거하고 나서 「若後世更濫人者与重罪」이라는 위협적인 문언을 쓰는 형식으로 되어 있다. 이러한 양식은 6세기 초두의 「迎日冷水碑」(503年)나 「蔚珍鳳坪碑」(524年) 등의 신라비와 유사하다.³⁾

지금까지 한국에서 중성리비에 관한 학술회의는 3회 개최되어 17명의 연구자가 각각의 견해를 발표하고 그에 기초한 논문집도 간행되었으나 비문의 입비연차는 물론 그 성격에 관해서는 다양한 이론이 존재하여 공통적인 이해를 얻지 못하고 있다.⁴⁾

지금까지 신라중고기의 석비연구를 리드해 온 주보돈朱甫墩씨는 가장 기본적이고 핵심적이라 할 수 있는 것조차 밝히지 못하고 있는 것에 대해 비판적인 견해를 제시하고 있다. 무엇보다도 “비문의 성급한 역사해석을 시도하기 전에 비문 자체와 관련한 기초적인 것에 대해 전후의 맥락이 통하도록 철저한 고증의 노력과 자세가 절대적으로 필요하다”고 지적하고 있다.⁵⁾

그래서 본고는 중성리비의 가능한 한 공유할 수 있는 지견을 제시하고 아울러 6세기 신라비의 특징에 대해 언급하기로 하겠다.

1. 석비의 해석문

비는 높이 105.6cm, 폭 47cm에 49.4cm 정도의 자연석(화강암)을 이용하고 있고 비석의 1면에는 12행에 걸쳐 약 200자의 문자가 새겨져 있다. 나선은 없고 각행의 자수는 통일되어 있지 않으며 가장 많은 것이 22자, 가장 적은 것이 5자로 되어 있다. 글자 크기도 일정하지 않아 최대 3×5cm, 최소 2×2cm정도이다. 비면의 아래쪽은 전체의 4분의 1정도의 공간이 공백으로 되어 있고 이 부분을 좌대 부분에 꽂아서 비를 세운 것으로 추측하고 있다.⁶⁾

비석 전체의 보존상태는 양호하고 군데군데 비면이 벗겨진 부분이 있으나 새겨진 문자의 판독은 용이하다. 문제는 3곳에 걸쳐 벗겨진 문자인데 1행째 모두의 간지 뒤에 연월이 쓰여 있다고 추정되고 있고 이 곳의 문자수가 특정되지 않는다. 단 1행 하단은 나중에 논하듯이 두 자가 더 있을 가능성이 있다. 또 6행에서 8행에 걸쳐 상단부는 6행째의 상부에 2자, 8행째의 첫 글자가 빠져 있어 206자 전후로 추정된다. 국립경주문화재연구소가 2009년9월에 개최한 학술심포지엄에서 공표한 자료 및 심포지엄 당일의 비석 조사나 지금까지의 각 논자들의 검토를 참조하여 작성한 해석문은 다음과 같다.

3) 올진 봉평신라비蔚珍鳳坪新羅碑에 대해서는 李成市 「蔚珍鳳坪新羅碑の基礎的研究」(『古代東アジアの民族と国家』岩波書店, 1998年), 냉수비에 대해서는 韓國古代市硏究會編 『韓國古代史硏究』(3, 迎日冷水里新羅碑特集号, 1990年), 深津行徳 「迎日冷水新羅碑について」(『韓』 116, 1990年 11月)을 참조.

4) 심포지엄 발표논문은 다음을 참조. 문화재청·국립경주문화재연구소 『포항 중성리비 발견 기념 심포지움』(2009년 9월 3일, 경부 보존단지 내 드림센터), 포항정신문화연구원·한국고대사학회 『신발견 포항 중성리 신라비에 대한 역사학적 고찰』(2009년 10월 6, 7일, 포항시청), 한국고대사학회 『제113회 정기발표회 「浦項中城里碑考察」』 2010년 4월10일, 경북대학교).

5) 주보돈 「포항 중성리 신라비에 대한 연구전망」(『한국고대사연구』(59, 2010년 9월, 서울) 33, 34쪽.

6) 國立慶州文化財硏究所 『浦項中城里新羅碑』(전게서) 16쪽.

1) 國立慶州文化財硏究所 『浦項中城里新羅碑』(國立慶州文化財硏究所, 2009年, 慶州).

2) 441년을 적극적으로 주장하는 견해는 노중국 「포항 중성리비를 통해 본 마립간시기 신라의 분쟁처리 절차와 육부체제의 운영」(『한국고대사연구』(59, 2010년9월, 서울)이고, 이문기 「포항 중성리 신라비의 발견과 그 의의」(『한국고대사연구』(56, 특집 포항 중성리 신라비, 2009년12월, 서울)은 441년의 가능성을 배제하지 않는다고 말하고 있다.

- ① 辛巳〔 〕只折蘆葛〔 〕
- ② 喙部習智阿干支沙喙斯德^{*}智阿干支
- ③ 教沙喙余拙智奈麻喙部本智奈麻本牟子
- ④ 喙沙利夷斯利白争人喙評公斯弥沙喙夷須牟旦
- ⑤ 伐喙斯利壹伐皮末智本波喙柴干支弗乃壹伐金評
- ⑥ □ □ 干支祭智壹伐使人奈蘇毒只道使喙念牟智沙
- ⑦ 喙鄒須智世令于居伐壹斯利蘇豆古利村仇鄒列支
- ⑧ □ 干支沸竹休壹金知那音支村卜岳干支走斤壹金知
- ⑨ 珍伐壹置云豆智沙干支宮日夫智宮奪余今更還
- ⑩ 牟旦伐喙作民沙干支使人果西牟利白口若後世更
- ⑪ 嚮人者与重罪典書与牟豆故記
- ⑫ 沙喙心刀里

- 비고
- *

불분명한 문자이나 해석 가능한 문자

□

해석 불가능한 문자

—

해석이 일정하지 않은 문자

2. 입비연차

입비년인 「辛巳年」을 특정할 단서로서 주목하는 것은 2행째의 「沙喙 斯德智 阿干支」라는 인물이다. 왜냐하면 503년의 냉수비(冷水碑)에는 「沙喙至都盧葛文王」 다음에 「沙喙斯德智阿干支」라고 쓰여 있고 동일인물로 보이기 때문이다. 논자에 따라서는 「德」자는 판독할 수 없고 「斯德智」라고는 읽기 어려우므로 이 비를 잘 살펴보면 「德」자로 보아 별 문제는 없다.⁷⁾

또 1행의 「折蘆」의 직전 문자는 처음부터 「中」으로 해석되고 「辛巳」년 밑에 「某月」의 문자를 추측하여 시격時

格의 조사인 「中」자가 이어지는 것으로 추정되어 왔으나⁸⁾, 남은 그림으로 「中」자는 될 수 없다. 이 부분은 자획字畫의 흔적에서 어느 문자의 상하 부분에 상당하므로 추측해보면 「只」자의 왼쪽 밑 부분에 가깝다.⁹⁾

「只」자라면 밑의 2글자와 이어져 「只折蘆」가 되고 냉수비에 보이는 「沙喙斯德智阿干支」 직전에 쓰인 「至都盧葛文王」의 「至都盧」의 다른 표기가 된다. 그 밑 문자에는草변의 자획이 남아 있고¹⁰⁾, 그 밑이 벗겨져 여러 문자의 공간이 있으므로 「葛文王」이 들어갈 여지는 충분히 있다. 냉수비에도 보이는 「至都盧葛文王」이란 500년에 즉위하였다고 전하는 지증왕智證王이고 『三国史記』나 『三国遺事』에는 지증왕의 휘호로서 「智大路」「智度路」「智哲老」 등이 전해지고 있고, 「只折蘆」로 해석되면 이들 지증왕의 휘호의 표기와 대응하게 된다.

냉수비에 의하면 「癸未年九月廿五日」에 「至都盧葛文王」을 필두로 하여 「沙喙斯德智阿干支」 등의 7명이 「教」를 내리는 주체가 되어 재물분쟁의 재정裁定에 관여하고 있는데¹¹⁾, 이 같은 형식에 대응하듯이 중성리비에는 1행부터 2행에 걸쳐 다음과 같이 3명의 인물명이 3행 모두의 「教」자 앞에 새겨져 있고 이 「教」의 주체로서 기재되어 있다고 볼 수 있다.

□ □ 只折蘆 葛□ □

喙部 習智 阿干支

沙喙 斯德智 阿干支

두 비에 새겨진 인명의 일치나 「教」의 주체가 될 수 있다는 지위의 대응관계를 보아도 비의 입비연차인 「辛巳」년은 냉수비의 2년 앞선 501년으로 볼 수 있다. 또 이로써 「辛巳」가 벗겨진 부분에는 지금까지의 연월을 추정해 왔지만, 냉수비에는 「至都盧葛文王」을 「沙喙」이라고 하고 있으므로 여기에 부명部名이 들어갈 가능성이 있음을 제기하고 싶다.¹²⁾

비문 가운데 특히 크게 쓰여진 「教」의 주체로서의 위치에 냉수비와 동일한 인물이 검출되는 것은 형식적으로도 경시할 수 없으며 이런 점들을 포함하여 입비년차인 「辛巳」년은 501년으로 생각한다.

8) 国立慶州文化財研究所 『浦項中城里新羅碑』(전게서) 24쪽, 선석열 「浦項中城里碑の金石学的位置」(文化財庁・国立慶州文化財研究所 『浦項 中城里碑 発見 記念 심포지움』전개) 41쪽.

9) 2009年 9月 6日の 심포지움 개최 전에 허가된 조사에서 확인하고 당일 宣石悅의 발표에 대한 토론에서 지적하였다. 단 동 비문의 제6행, 14행에도 「只」자가 있고 자획의 각도가 좀 다른 점을 과제로 남기고 있다.

10) 풀초 변의 자획에 대해서는 대개 일치된 지적이 있다. 또 그 밑이 크게 벗겨져 있는 것은 현 비에 의해 확인할 수 있다.

11) 木村誠 「朝鮮における古代国家の形成」(『新版 古代の日本』2, 角川書店, 1992年) 115頁.

12) 「只折蘆」을 「至都盧葛文王」으로 추정하는 것에 대해 「只」자로는 판독할 수 없다는 비판 외에 중성리의 2년 후에 비석이 세워진 냉수비에 「至都盧」라는 인명과 완전히 다른 표기가 될 수 있을 것인가 하는 의문도 강하게 제기되고 있다. 주보돈 「포항 중성리 신라비에 대한 연구전망」(전개) 13~15쪽.

7) 노태돈 「포항 중성리비와 外位」(『한구고대사연구』(59, 전개, 52, 53쪽)에는 같은 취지의 지적이 있다.

3. 六部の 표기법

지금까지의 연구에서 여러 학설이 제기된 이유 중 하나는 비문의 대부분을 차지하는 성명기사의 구성을 명확히 분절할 수 없는데 있었다. 논자에 의해 부명部名, 인명, 관위의 분절이 일치하지 않는 것이다. 신라 왕정인은 6개의 자연적, 혈연적인 집단으로 구성되어 「六部」라고 칭하였다. 중성리비는 지금까지의 문헌에도 석비에도 나타나지 않았던 표기가 되어 있기 때문에 분절을 곤란하게 하고 있었다.

중성리비에는 6부 가운데 5개의 부가 나타나는데 그것들은 다음과 같다.

喙, 沙喙, 牟旦伐喙, 本波喙, 金評

이들 부명 중 4개의 부에는 「喙」자가 이어지고 「喙」는 문헌사료에는 「梁」으로 쓰여있고 「梁」은 「督」자로도 표기되어 있기 때문에, 「토쿠(トク)」 「타쿠(タク)」로 읽히고 있었다고 지적되어 왔다.¹³⁾

지금까지 「喙」자를 포함한 부명은 喙部和 沙喙部 두 가지로 한정되어 왔지만 또 두개의 부에도 「喙」가 붙어있음이 판명되었다. 원래 喙部에는 「及梁」과의 異表記가 문헌으로 전해지고 있었다. 「及」이란 「밋」 「아울러」의 고유어 「●」(mit)를 표기함으로써 「사물의 근본, 기초」를 의미하는 고유어의 「●」(mit)을 이른바 가차假借한 것으로, 「及梁」이란 「본래의 梁部」이고 沙梁(沙喙)은 「沙」가 新의 훈 (「●」sai)을 나타낸다는 지적이 있었다.¹⁴⁾ 즉 「본래의 梁部」에 대해 「새로운 梁部(喙部)」가 된다.

따라서 중성리비에 의해 또 「牟旦伐」의 喙이나 「本波」의 喙이라는 부명의 표기법이 있었음이 판명되었다.¹⁵⁾ 6부명의 유래를 해명하는데 중성리비가 갖는 사료적 역할이 적지 않다. 요컨대 6부는 「喙」을 기저로 하고 있었던 것이다.

그리고 새롭게 판명된 부명 표기의 하나로 金評이 있다.¹⁶⁾ 「金評」이란 문헌사료의 「翳比」 「翳部」으로 비정되어 냉수비에는 「斯波」로 표기되어 있었다. 「翳」은 「sup」을, 「比」는 「pi」 「pir」를 쓴 것이라는 지적이 이미 있듯이¹⁷⁾, 그들 음은 「斯波」에 대응하고 있음은 쉽게 추측할 수 있다. 또 「斯」와 「金」이 호환적으로 쓰이고 있었던 것

은 신라의 국호가 「斯羅」 「徐羅伐」 등으로 표기되어 그것이 왕경을 의미하는 「金城」으로도 전화되어 사용되고 있었던 것에서도 알 수 있듯이 문제는 없다.

「評」이란 고대 일본에서 「고오리(コホリ)」로 읽히는 예가 알려져 있고, 「評」이 고대한국어의 村의 뜻인 「pol」을 쓴 것이라는 설도 예부터 주장되고 있다.¹⁸⁾ 즉 「評」은 「比」 「波」의 p음으로 일치하고 있고 그러므로 「翳比」 「斯波」와 동일 실체의 다른 표기로 볼 수 있다.

주목할 만한 점은 6부의 하나로 「評」자를 쓰는 「金評」이 나타남과 동시에 중성리비에는 喙部를 「喙評」으로도 쓰고 있다는 것이다.¹⁹⁾

「喙評」이란 『梁書』 新羅伝에는 521년에 파견된 신라 사절에 의해 梁에 전해진 신라의 국정에 관한 기사로 나타났다²⁰⁾. 즉 그에 의하면 신라의 음의 명칭은 「안에 있는」 것을 「啄評」이라 하고, 밖에 있는 「五二邑勒」에 대해 안으로 「六啄評」이 있었다고 梁왕조에 전해지고 있었던 것이다. 6개의 「啄評」이야말로 왕정의 6부를 지칭하는 것이고²¹⁾, 6부의 부명이 「喙」, 「喙評」을 기본으로 하고 있었던 것을 중성리비는 전하고 있어 동시대의 문헌과 금석문의 양자가 일치하게 된다.²²⁾

이상의 6부명의 이해를 얻게 되면 중성리비에 기재된 인물은 30명이 되어 일람표에 보인 대로이다.

4. 비문의 구성

중성리비의 특징은 동사가 적고 완성된 문장을 구성하고 있는 부분도 적어 문자의 대부분이 역명기사歷名記事가 점하고 있기 때문에 그 내용의 정확한 파악이 어려웠다. 그러나 지금까지의 논자들의 견해는 대개 「爭人, 奪尔, 更還 등의 용어와 함께 『若後世更還人者与重罪』라는 문장을 매개로 그 당시 어느 분쟁이 진행된 결과 중앙의 정치세력이 공식적으로 개입하여 이에 대한 정식 판결을 내림으로써 일단락되었다는 개략은 불충분하나마 분명하다.”²³⁾라는 지적이 있듯이 적어도 이러한 이해가 최대공약적인 견해로 공유되고 있다.

16) 李鎔賢 「中城里碑の 基礎的検討—冷水碑・鳳坪碑와의 比較的 視点」(韓國古代史学会 『第113回定期発表会 浦項中城里碑考察』 2010年 4月 10日, 慶北大学) 33쪽.

지금까지 「金評」을 인명으로 본 것은 6행 째의 모두의 문자를 「沙」로 판독하고 그 밑의 문자 「干支」와 이어 「沙干支」로 한 것에 기초한다. 그러나 「沙」로 판독하는 것은 문자의 흔적이 거의 없어 곤란하다. 게다가 동일 부내(本波)의 인물이라고 한다면 관위의 서열로 보아 여기에 「沙干支」가 오는 것은 있을 수 없다. 특히 하시모토 시게루(橋本繁)씨는 관찰에 기초하여 「金評」을 부명으로 파악할 것을 주장하였다.

17) 末松保和 「新羅六部考」(前掲書) 304쪽.

18) 연구사의 개요는 末松保和 「梁書新羅伝考」(『新羅史の諸問題』 전계) 388, 390쪽 참조.

19) 李鎔賢 「중성리비의 기초적 검토 —冷水碑・鳳坪碑와의 比較的視点」 (전계).

20) 武田幸男 「新羅官位制の成立」(旗田巍先生古稀記念会編 『朝鮮歴史論集』 上巻, 龍溪書舎, 1979年) 180頁.

21) 今西龍 「新羅史通史」(『新羅史研究』 国書刊行会, 1970年) 7頁.

22) 中城里碑에는 喙部는 「喙」, 「喙部」, 「喙評」의 세 종류의 다른 표기가 동일한 비문 중에 나타나고 있다는 것이 된다.

23) 朱甫暉 「浦項中城里新羅碑에 대한 研究展望」(前掲誌, 12頁)

13) 「喙」의 음은 「카이(カイ)」이지만 梁, 督, 喙 등과 호환적으로 사용되고 있고, 신라에서는 ‘토쿠’ ‘타쿠’로 읽히고 있었다고 생각되고 있다. 末松保和 「新羅六部考」(『新羅史の諸問題』 東洋文庫, 1954年) 299, 300쪽.

14) 末松保和 「新羅六部考」(前掲書) 300쪽. 스에마츠(末松)는 마에마 료사쿠(前間恭作)의 지적을 그대로 인용하여 及梁部는 「원래부터 梁部の 의미이다」고 하고 있지만 「及」은 「밋」 「더붙어」의 고유어인 「●」(mit)을 표기할 때 사용되고 있는 점에 의해서, 그리고 「사물의 근본, 기초」를 의미하는 고유어인 「●」(mit)을 표기한다고 하는 전화의 과정이 생략되어 있다. 중성리비에 의해서 「牟旦伐喙」 「本波喙」가 검출되고 「沙喙」과 더불어서 「及梁」이 「本源의인 喙」를 의미한다는 점이 분명해졌다.

15) 末松保和 「新羅六部考」(前掲書, 301쪽)는 근거는 다르지만 「本彼도 원래 『本彼도쿠』라고 말해지던 것은 아닌지 의심스럽다」고 지적하고 있다. 또한 「本波喙」까지를 부명이라고 한다면 인명은 「柴」 한 글자가 되는데 주보돈 「포항 중성리 신라비에 대한 연구 전망」(전개지, 23쪽)은 존대의 접미사인 「智」 「知」 등도 없고 「柴」 한 글자로 이름을 표기하는 것은 있을 수 없다고 비판하고 있다.

이 같은 이해를 기초로 전체의 구성을 검토해 보면 중성리비에는 6세기 초두의 2개의 신라비에서 보듯이 관직명 내지 직명으로서 「争人」「使人」「典書」 등이 있고 그들 밑에 인명이 열거되어 있다. 그리하여 다음으로 임비년(辛巳) 밑에 쓰여진 전문을 그대로 문자를 바꿔 넣지 않고 순차로 써 보기로 한다.

그것들의 표기에는 관직명 내지 직명을 상단에 쓰고 동사는 하단에 큰 글자로 쓰기로 한다. 또 작업가설로서 한 집단으로 보이는 경우는 모두에 숫자를 붙이고 역명歷名부분은 출신지, 인명, 관위로 분절하여 전문을 쓰면 다음과 같다(자료참조).

보듯이 비문 중의 역명은 (1)에서 (8)까지의 그룹으로 나눌 수가 있다. 「教」의 주체인 (1)과 「争人」의 역명인 (3)에 대해서는 이미 언급하였고 그들은 왕경의 6부인으로 구성되어 있다. 왕경인은 (2) (4) (8)에도 보이고 그들이 소속된 부가 명기되어 있고 관위를 갖는 자와 없는 자가 있다.

왕경인이 갖는 관위京位는 (1)과 (2)에는 「阿干支」와 「奈麻」가 보이고 520년을 획기로 체계화되는17등의 관위 체계 중에서 볼 수 있다.²⁴⁾ (6)에는 「豆智」와 「牟旦伐喙」의 「作民」²⁵⁾이 「沙干支」를 갖고 있는데 이것도 또 경위 체계에서 찾을 수 있다. 단 「豆智」에는 경위를 갖지만 부명이 없어 이 점은 의심이 가긴 하지만 (6)이 단순한 歷名 기사가 아니고 분쟁의 내용을 보이므로 이에 대해서는 다음 절에서 검토하기로 한다.

왕경인이 갖는 것으로 되어 있는 관위로 문제가 되는 것은 「争人」이 갖고 있는 「干支」와 「壹伐」이다. 「干支」는 이미 냉수비나 봉평비에도 나타났듯이 부의 유력자나 지방의 수장이 갖고 있고, 경위(京位)나 외위(外位)의 체계에 속하지 않은 전통적인 수장호로 보인다.²⁶⁾

한편 「壹伐」은 관위 체계에서 구하자면 제1위의 「壹伐干支」로 비정할 수 있다고 생각되고, 중성리비가 세워진 6세기 초에는 경위는 체계화되어 있지 않고, 「干支」 2자의 탈락도 그것과 관련시켜 생각하고 싶다. 모두 「干支」와 같이 부의 고위자였다고 보인다.

(5)는 4개의 지방명 아래에 6명의 인명이 열거되어 있는데 「干支」는 위와 같이 냉수비에 촌주가 갖고 있는 사례가 있다. 또 「壹金知」는 냉수비에는 「壹今知」라고 되어 있어 역시 촌주가 갖던 관위로서 기재되어 있고 현재까지 알려져 있는 경위나 외위의 체계 안에서 찾을 수 없다. 그러나 냉수비의 2명의 촌주가 각각 「干支」와 「壹今知」를 가진 것에 대응하고 있고 이 당시에는 외위의 체계는 성립하지는 않았으나 「壹金知」를 외위의 범주에 포함시키겠다.

부명도 지방명도 없는 것은 (7) 使人의 「果西牟利」와 (8) 전서(典書)의 「与牟豆」이고, 그가 한 역할을 감안하여 왕경인으로 추정하고 싶다.

이상의 8개 그룹의 성명으로 보이는 인물의 출신지와 관위를 검토하였는데 왕경인으로 구성되어 있는 (1) (2)

(4) (8)은 喙部和 沙喙部와의 2부로 구성되어 있고, 6세기의 신라비에서 널리 보이듯이 행정을 맡은 지도층의 구성과 일치한다.²⁷⁾ 따라서 이들 인물이 비석의 발견지에서 생긴 분쟁 해결에 행정집행의 입장에서 관여하였다고 추측할 수 있다. 또 「争人」은 6부 중 5부의 유력자층으로 구성되어 있고, 「争人」의 명칭이 붙어있듯이 분쟁의 이해에 관여하는 사람들로 추정된다.

원래 분쟁은 비가 세워진 지역(홍해읍)이 중심적이 위치를 차지하나 (5)에 보이듯이4지역의 수장의 이름이 기재되어 있어 분쟁에 관련된 지역은 하나의 특정지역이라기보다는 복수의 지역에 걸쳐있었다고 상정하는 것이 좋을듯하다.

이들 8개의 집단이 서로 어떻게 연결되어 있었는지는 집단의 성명 끝에 기재된 동사에 주목하고 싶다. 중성리비에 보이는 동사는 これらの八つの集団が相互にどのように結びつくのかについては, 集団の歴名の終わりに記された動詞に注目してみたい. 中城里碑に見られる動詞は, まとまりをもった集団の末尾に記されていることから, 작업가설로서 그들 동사를 각 집단의 행동내용을 보임으로써 전체의 흐름을 다음과 같이 설정하기로 한다. 그리고 (6)의 해석은 비문의 핵심적인 내용이므로 다음 절에서 논하겠다.

(1) 只折盧葛文王 이하 3명이 가르쳤다. (教)

(2) 沙喙과 喙部の 5명이 말을 전하였다. (白)

(3) 争人은 喙部, 沙喙, 牟旦伐喙, 本波喙, 金評의 5부 대표자들이다.

(4) 使人으로서 奈蘇毒只의 道使(地方官)인 喙과 沙喙部の 2명이世令하였다.

(5) 于居伐, 蘇豆古利村, 那首支村, 珍伐의 4지역 수장 6명은 전하였다. (云)

(6) 「豆智 沙干支 宮, 日夫智 宮, 奪尔, 今更還 牟旦伐喙 作民 沙干支」

(7) 使人인 果西牟利은 말을 전하였다. (白口)

만약 후세에 更導하는 사람은 중죄를 내리겠다.

(8) 전서典書인 与牟豆는 故記하였다(그대로 기록하였다).

5. 「争人」과 분쟁의 대상

(1)에서 (8)까지의 추이를 보아 안건의 분쟁처리에 대한 왕권의 의지가 전달되고 집행되는 과정을 파악할 수 있다. 그중에서도 「争人」은 분쟁에 관한 왕경의 이해관계자이고 그 분쟁에 직접 관련된 것은 (5)에 기재된 4지역의 수장들로 보인다. 그 같은 4지역의 수장들이 ‘말한’ 내용이 아래의 (6)의 문장이다.

27) 武田幸男 「新羅の二人派遣官と外司正」(西嶋定生博士追悼論文集編集委員会 『西嶋博士追悼論文集』 山川出版社, 2000年) 396쪽.

24) 新羅 官位制에 대해서는 武田幸男 「新羅官位制の成立にかんする覚書」(武田幸男編 『朝鮮社会の史的展開と東アジア』 山川出版社, 1997年) 参照.

25) 지금까지의 중성리비 연구에서는 신라의 인명표기에는 「作民」이라는 한자어로서 의미를 나타내는 표기는 있을 수 없다는 견해가 지배적이다. 그러나 부명과 관위의 사이에 있으면서 위와 같은 이유만으로 인명으로 볼 수 없다는 것은 이해하기 힘들다.

26) 武田幸男 「新羅官位制の成立にかんする覚書」(전게서) 124頁.

27) 武田幸男 「新羅の二人派遣官と外司正」(西嶋定生博士追悼論文集編集委員会 『西嶋博士追悼論文集』 山川出版社, 2000年) 396쪽.

「豆智 沙干支 宮, 日夫智 宮, 奪余, 今更還 牟旦伐喙 作民 沙干支」

(6)의 이 부분과 (7)의 「若後世更遭人者与重罪」이라는 문장만이 중성리비문 가운데서는 완결성 있는 문장을 이루고 있고 분쟁의 처리에 직접 관련된 내용이 기재되어 있다고 추측할 수 있다.

여기서 (6)을 해석해 보면 동사가 「奪余」「更還」이라고 되어 있으므로 종래 이 동사의 주어가 누구인가가 중요한 과제로 되어 왔다. 단 빼앗거나 되돌리거나 하는 데는 목적어가 있어야 하므로 여기서는 주어를 특정하기 전에 목적어를 밝히는 데 주력하고자 한다. 결론부터 말하면 빼앗거나 되돌리거나 한 대상으로 가장 어울리는 것은 동사 직전에 있는 「豆智」와 「日夫智」 2명의 「宮」외에는 있을 수 없다. 왜냐하면 비문 가운데에서 「宮」만이 빼앗거나 되돌리거나 할 수 있기 때문이다.

신라의 「宮」에 대해서는 「宅」과 호환적으로 쓰이고 있고 7세기 이후의 사례이지만 真骨貴族(王族)의 가호나 「宅一区」와 같은 건물의 한 획을 나타내거나 官司・離宮 등의 시설, 기관을 나타내는 용례가 확인된다.²⁸⁾ 특히 최후의 용례가 주목되는데 시설, 기관으로서의 「宮」의 성격을 잘 나타내는 것으로서 『三国史記』文武王二年(662) 条에는 대고구려전의 논공행상 중에서

공을 논하여 本彼宮의 재화, 전장, 노복을 중분하여 分信・仁問에게 줌.

이라고 되어 있어 「宮」이 재화, 전장, 노복 등의 종속민을 포함한 경영체였음을 엿볼 수 있다. 9세기에 30 이상 전해지는 진골귀족의 「宅」에도 각각 가정기관이 있었고 그 지배권은 널리 신라의 전토에 미치고 있어 역시 9세기의 사례이지만 석간의 전권田券(『開仙寺石燈記』 891年, 전라도 담양군)에도 宅의 소유지가 새겨져 있다.²⁹⁾

또 고려 초기에 강주康州(경상남도 진주)에 소재한 백엄선사伯嚴禪寺의 古伝(『三国遺事』 卷 3, 伯嚴寺石塔舍利条)에는

전대인 신라 대에 그 전의 북택의 청기(廳基)를 버리고 이 절을 세웠다.

고 되어 있어 지방에 소재한 宅의 소유지에는 「廳」 즉 가정기관이 존재하였음이 전해지고 있다.

따라서 「豆智」와 「日夫智」의 「宮」은 중성리 부근에 있었다고 해도 큰 문제는 없다. 중성리비가 발견된 흥해읍은 신라가 5세기부터 고구려와의 항쟁을 격화시켜 하는 동해안의 간선도를 복상하는 이른바 기점으로서의 요충지이고 비석이 발견된 지점에서 남쪽으로 700미터 정도 떨어진 곳에는 彌實城(一名, 南彌秩夫城)이 있다. 이 미실성에 대해서는 『三国史記』新羅本紀・智證麻立干五(504)年秋九月条에

역부役夫를 모아 波里・彌實・珍德・骨火 등의 12성을 쌓았다.

라고 되어 있어 「彌實」 城에 해당하는 것으로 보고 있고 지증왕대에 축조되었다는 기록이 있는 것으로 보아 이 지역이 6세기 초엽의 신라에 있어 전초기지로써의 역할을 담당하고 있었다고 추정된다.³⁰⁾

이 지역 부근에 소재하고 있었던 것으로 추측되는 「豆智」와 「日夫智」의 「宮」이 이때 새롭게 되돌려진(「今更還」)것으로 되어 있는데 그렇다면 되돌려진 대상이 없어서는 안 된다. (6)에는 「今更還」후에 「牟旦伐喙의 作民・沙干支」으로 이어짐에도 불구하고 이 인물이 역명 중에서는 고립되어 있는듯이 보였다. 그러나 이 인물이야말로 「宮」이 되돌려진 대상이 되는 것은 아닐까. 즉 「豆智의 宮과 日夫智의 宮을 빼앗았으나 지금 다시 牟旦伐喙의 作民에게 돌려준다」라고 해석하고 싶다.

비문 중 가장 의문시되고 있는 「豆智의 宮과 日夫智의 宮을 빼앗았다」라고 하는 주체(주어)에 대해서는 (5)의 4지방의 6명의 수장이 해당하는 것은 아닐까. 왜냐하면 우선 (5)의 말미에 「말하였다」는 내용을 (6)에서 「豆智의 宮과 日夫智의 宮을 빼앗았지만 지금 다시 牟旦伐喙의 作民에게 돌려준다」로 받을 수 있다고 보이기 때문이다.

이같이 (6)에서 분쟁의 해결책이 6명의 주체에 의해 선포된 후에 (7)에서는 使人인 果西牟가 일러 전하였다는 말은 「만약 후세에 更遭하는 자는 중죄를 내린다」는 것이었다. 이러한 문언이 그곳에서 행해지지 않았다면 이 곳에 비를 세울 근거가 없어지는 것이므로 위협적인 문언이 향한 대상이야말로 빼앗거나 되돌리거나 한 주체가 되지 않으면 안 된다.

이와 유사하게 냉수비에서도 분쟁의 해결책을 교령敎令으로 보인 뒤 재물분쟁에 관여한 珎而麻村의 2명에 대해

末鄒斯申支此二人, 莫更遭此財, 若更遭者, 敎其重罪耳.

末鄒와 斯申支의 2명은 나중에 이 재산을 다시 말해서는 안 된다. 만약 다시 말하면 중죄를 내릴 것을 敎함.

이라고 敎가 내려지고 있다. 중성리비와 냉수비의 양자의 문언은 매우 비슷할 뿐 아니라 냉수비의 경우는 재물분쟁 당사자에게 인도되고 있는 것에서 보아 (5)와 6명에 대해 「更遭」하면(다시 문제삼으면) 「重罪」로 처하겠다고 것을 고지한 것으로 추측할 수 있다.

요컨대 4지역의 수장들이 이 지역에 있었던 「豆智」와 「日夫智」 2명의 「宮」을 빼앗았는데 그것을 牟旦伐喙의 「作民」에게 반환하겠다고 말하게 한 위에 이 문제를 다시 거론하는 것을 법적규제로 강하게 금지하고 재정의 경위를 관계자와 함께 기록하여 장래에도 준수시키기 위한 비석으로 새긴 것이 된다.

덧붙여 말하면 「豆智」와 「日夫智」 2명에는 부명이 기재되어 있지 않았지만 2명의 宮이 「牟旦伐喙」의 「作民」으로 「更還」되었다(다시 돌려보냈다)는 것에서 2명이 속하고 있던 부도 또 「牟旦伐喙」이 아니었을까 추측해 본다.

28) 李成市 「正倉院所藏新羅氈貼布記の研究」(『古代東アジアの民族と国家』 岩波書店, 1998年) 319~321쪽.

29) 李成市 「正倉院所藏新羅氈貼布記の研究」(前掲書) 334쪽.

30) 国立慶州文化財研究所 『浦項中城里新羅碑』(前掲書) 14쪽.

맺음말

나타나고 있으며 그러한 제3의 권력으로서의 신라 6부의 권력구조를 보여주고 있는 점에 특별한 의의가 있다고 할 수 있다.

중성리비의 발견 이후 2년이 지났으나 지금까지의 중성리비의 성격은 ‘오리무중’이라는 지적도 있는 것처럼³¹⁾ 비문의 내용은 밝혀지지 않았다. 그러나 역명기사의 분절을 명확히 하면 입비년에 대해서는 냉수비나 봉평비 등 6세기 초두의 신라비의 기본적인 양식은 일치하고 「敎」의 주체가 되는 인물이 점하는 위치나 지방인이 쓰는 칭호, 관위 등에서 양자가 매우 가까운 시기에 세워진 것은 부정할 수 없다. 중성리비는 501년에 건립된 현존 최고의 신라비로 볼 수 있다.

비석의 내용에 대해서도 기본적인 구성에서 냉수비와 많은 점에서 공통되는 형식을 갖추고 있다. 비문의 대체적인 내용은 왕경의 6부인이 6부의 외방에 전개하고 있던 경영체로서의 「宮」을 둘러싼 왕경인과 지방 수장과의 분쟁에 대해 신라왕권이 분쟁을 처리한 경위를 기록하여 고지한 포고비라고 볼 수 있다.

남은 문제는 지방수장들에 의한 왕경인의 「宮」에 관련된 분쟁에 대하여 6부 중의 5부의 유력자가 「爭人」으로서 이름을 올리고 있다는 점이다. 「爭人」이 지방에 존재하는 「宮」을 둘러싼 분쟁에서 어떠한 입장에서 어떻게 관여하고 있었던가를 분명히 하지 않으면 안될 것이다.

「爭人」이 분쟁의 이해에 관련된 것이라고 논했는데 6부의 유력자가 지방에 영유하는 「宮」의 소유관계에 관여하는 것이야말로 이 시대의 왕경 6부의 역사적 성격이 응축되어 있는 것으로 생각된다. 6부란 지배공동체라고 개념화 할 수 있듯이³²⁾ 각 부는 경주에 거주하는 6개의 지연적 혈연적 집단으로서 서로 외방(타공동체)에 대한 지배에 있어서 이해를 공유하는 「공동체」였다. 6부는 일체가 되어 『梁書』 신라전에 전하는 신라의 영역내의 「五十二邑勒」에 대하여 군사적, 공납적, 종교적 지배를 하고 있었다고 보인다.

한편으로 6부의 각 부는 외방 지역에 대하여 각각이 고유한 지배영역을 각각 전개하고 있었을 것이다. 그것들은 지배공동체가 고대국가로서의 공적 영역을 확대해 갈 때 (그것은 왕권을 확장시켜 가는 과정이기도 했지만) 반드시 건드리지 않을 수 없는 불가피한 이해조정 과정이었을 것이다. 중성리비에는 행정집행의 역할을 담당했던 자들이 喙부와 沙喙部の 2부로 구성되어 있듯이 신라의 중핵적인 정치집단은 이 2부에서 형성되어 간다. 「爭人」이 喙部, 沙喙部를 제외한 각 부의 유력자로 채워지고 있는 점도 그러한 관계를 암시하고 있는 것이라고 추론할 수 있다.

6세기 신라의 비석에 기록된 왕경인의 인명에는 거의 예외 없이 부명이 명기되어 있다. 그러한 인명표기에 불가결한 부명은 7세기말 이후에는 전혀 나타나지 않게 된다. 부명을 과시하고 그 중에서도 喙部, 沙喙部の 2부를 중심으로 중핵적인 정치집단이 형성되어 있었다는 것을 나타내고 있는 점은 6세기의 신라비에서 공통적으로 나타나는 특징이다. 중성리비는 6부 중에 5부의 인명을 기록하고 있다는 점에서 가장 많이 6부의 역사적 유래를 탐구하는 과정에서도 주목을 받고 있는데 중성리가 6세기 이후의 신라비의 원초적인 정치집단의 모습이 유감없이

31) 朱甫噉 「浦項中城里新羅碑に対する研究展望」(前掲誌) 12쪽.

32) 武田幸男 「朝鮮三国の国家形成」(『朝鮮史研究会論文集』 17, 1980年3月).

「龍王」銘木簡と古代東アジア世界

－ 韓日出土木簡研究の新展開 －

三上喜孝

日本 山形大學

はじめに

韓国出土木簡は、同時代の史料がほとんどない韓国古代史の研究に一筋の光明をもたらした。とくに三国時代の統治形態や地方制度など、政治支配の実態を明らかにする材料として韓国出土木簡の果たした役割は大きい。

一方で近年では、そうした政治史的観点だけではなく、古代の祭祀や信仰の研究においても韓国出土木簡が大きな意味を持つことが明らかになりつつある。その一例が、「龍王」銘木簡である。

これまでのところ、韓国では、「龍王」と書かれた古代の木簡が2点確認されている。一点は、2002年から2005年にかけての調査により昌寧・火旺山城の池跡から出土した7点の木簡のうち、人形に「龍王」と書かれたものであり、もう一点は、2009年、慶州・伝仁容寺址の井戸中から出土したものである¹⁾。また、慶州・雁鳴池からは「辛審（番）龍王」と書かれた刻書土器が数多く出土していることもこれまでに知られている。

「龍王」と書かれた古代木簡は、これまで日本でも数点出土しており、同時期の朝鮮半島でも出土したことによって、東アジアにおける祭祀・儀礼の形態を考える際に、興味深い素材を提供してくれるように思える。

そこで本報告では、日韓の「龍王」銘木簡の検討を通じて、古代東アジア世界における祭祀の広がりを理解するための素材を提供したい。

1. 山形県米沢市・馳上遺跡出土木簡²⁾

山形県米沢市の馳上遺跡は、9世紀の集落遺跡である。この遺跡からは河川跡が検出され、そこからは土器などとともに木簡1点が出土した。

出土した木簡は短冊形で、上端は一部欠損しているものの、原形をとどめている。下端も原形をとどめている。ただし中間部が折れており、そのまま接続するかどうかは不明である。

积文（『木簡研究』23、2001年）

（梵字カ）

□（符籙）鬼鬼鬼…〔 〕□八龍王水八竜王草木万七千

（龍カ）

□□龍王□□龍王…〔 〕□□□□□八竜王

(129+68)×20×3 011

オモテ面は比較的文字が明瞭に読みとれるが、裏面は墨の残りが悪く、文字がきわめて不明瞭である。

木簡が出土した河川から出土した土器の年代が9世紀中頃のものと考えられることなどから、本木簡の年代も9世紀頃のもの と推定できる。

本木簡は呪符木簡である。書式、内容は、呪符木簡としての性格をよく表している。とりわけオモテ面の上端部にある符籙と「鬼」の表記は、呪符木簡に特徴的な記載である。

本木簡で最も注目されるのは、「龍王」の記載である。本木簡の表裏両面に、「龍王」あるいは「竜王」という言葉が繰り返し書かれている。しかも「龍王」の語の前には、「水八」といった二字の語が冠せられている。

「龍王」とは、龍の形をして水中に住む水の神のことで、仏典などでは請雨（雨乞い）の際の神としてしばしば登場する。

本木簡にみえる「水八竜王」は、『法華経』などにみえる、「八大龍王（八龍王）」のことを指している

1) 이재환「傳仁容寺址 ‘龍王’ 목간과 우물·연못에서의 제사의식」（『木簡과 文字』7、2011年6月）によれば、国立慶州博物館構内から出土した統一新羅時代の木簡（『韓国の古代木簡』279号木簡）にも、「龍王」の文字が確認されるという。これを含めれば、「龍王」銘木簡は、韓国内で3例確認されることになる。

2) 三上喜孝「米沢市馳上遺跡出土木簡」『山形県埋蔵文化財センター調査報告書101集 馳上遺跡発掘調査報告書』（財）山形県埋蔵文化財センター、2002年3月。

可能性がある。「八大龍王」とは、仏教で、法華經説法の座に列したという八種の龍王のことで、難陀龍王、跋難陀龍王、娑伽羅龍王、和脩吉龍王、徳叉迦龍王、阿那婆達多龍王、摩那斯龍王。優鉢羅龍王の各龍王を指す（『法華經』第一序品）。このうち、娑伽羅龍王が、海や雨をつかさどるとされることから、航海の守護神や雨乞いの本尊とされている。本木簡の他の箇所にも「八龍王」の語が繰り返し書かれており、いずれも「八大龍王」を指している可能性がある。

一方で、『大正新修大藏經』におさめられている『大方大雲經請雨品第六四』『大雲輪請雨經』『仏説大孔雀呪王經』『仏母大孔雀明王經』などの雜密經典には、請雨や止雨の修法に関わるものが数多くあり、その中に、「龍王」の名が列記されている部分がある。「水八龍王」の名は、管見の限り、これらの經典の中にみえないが、あるいは龍王の名前をあらわしている可能性も考えられる。

ところで、こうした雜密經典は、古くは推古・天智朝に日本に伝わりはじめ、さらには奈良時代の遣唐使によっても将来されたと考えられている。

平安時代になると、祈雨・請雨が国家的な祭祀として、たびたび行われるようになる。

最も有名なものは、弘法大師空海による請雨修法である。平安時代の請雨修法について記した『祈雨日記』（続群書類従第二五輯 釈家部）によれば、天長元年（824）、空海が平安京の神泉苑で請雨經法を行った際、池中に「善如」と名付けられた龍が出現し、雨が降ったとしている。この龍は長さ五尺ほどの蛇で、水面上に金色の八寸ばかりの姿をあらわしたという。伝説化した話ではあるが、龍王が水中に住んでいると考えられていたこと、そしてそれが蛇の形をしていたといった点は、当時の「龍王」観をさぐる上で興味深い。

古代におけるこうした祈雨祭祀を参考にすると、本木簡もまた、水中に住むと信じられていた「龍王」に対する祈雨祭祀（あるいは止雨祭祀）にともなって作成されたものと考えることができる。

ところで、「龍王」と記された古代の木簡は以下の事例が確認されている。

① 藤原京跡九条四坊出土木簡（『木簡研究』16号、1994年）

- ・「< 七里□□内□送々打々急々如律令 四方卅□大神龍王」
- ・<東方木神王 婢麻佐女生年廿九黒色 南方火神王 （人物像） 中央土神王 婢□□女生年□□□□ [] [] （人物像）

467×83×7

② 静岡県浜松市伊場遺跡出土木簡（『静岡県史 資料編四』1989年）

- ・「>百怪咒符百々怪宣受不解和西怪□□令疾三神□□□ 宣天岡直符佐□当不佐□（亡ヵ）急々如律令 弓 龍神 （竜の墨画） 人山 龍 急々如律令 人山龍」
- ・「> 戌 蛇子ロロロ 戌 急々如律令 戌 弓ヨヨヨ弓」

322×67×4 032

③ 群馬県富岡市内匠日向周地遺跡出土木簡（『（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第一八八集 内匠日向周地遺跡 下高瀬寺山遺跡 下高瀬前田遺跡』）

（一号木簡）

「□□蛟□奉龍王 (250)×33×4 051

（二号木簡）

「□□□蛇奉龍王 (145)×33×7 019

（三号木簡）

「□□□×鬼□□ (42+53)×35×6 019

①の木簡は、藤原京右京九条四坊発掘調査において、南北道路である西四坊坊間小路東側の溝から出土したものである。和田萃氏によれば、ここに記載されている「四方卅□大神龍王」「七里□□内送々打々急々如律令」「東方木神王」「南方木神王」「中央土神王」などの表現は、鳩摩羅什訳の『孔雀王呪經』にある「東方大神龍王七里結界金剛宅」「南方大神龍王七里結界金剛宅王」「西方大神龍王七里結界金剛宅」「北方大神龍王七里結界金剛宅」「中央大神龍王七里結界金剛宅」の表現と類似していることを指摘し、この木簡が四方の龍王に雨乞いするためのものだったろうと推測している³⁾。

②の木簡は、伊場遺跡の大溝から出土したもので、八世紀後半から一〇世紀中頃のもものとされ、年代幅がある資料である。「龍王」の文言そのものは記載されていないが、この木簡の表には「天■（岡の異体字）」「龍神」、裏に「虵（蛇）」の文字が確認できる。木簡全体の釈文が確定していないので性格は不明だが、

3) 和田萃「南山の九頭龍」『日本国家の史的特質 古代・中世』思文閣出版、1997年

止雨祈願呪符とする説⁴⁾や、疾病除去とする説⁵⁾などがある。

③の木簡が出土した内匠日向周地遺跡は、谷状地形の底部に位置する遺跡で、三点の木簡は、古代の谷状遺構から出土したものである。

この木簡が作成された背景として注目されたのが、8世紀前半に成立した『常陸国風土記』の行方郡条に伝わる、箭括麻多智（やはずのまたち）による開発説話である。この説話の舞台となった行方郡の西方、霞ヶ浦に面した谷地には、複雑に入り込む何本もの谷があった。箭括麻多智という人物はこの谷口の低湿地の葦原を切りはらって、新たに水田を開発した。その開発に際して、谷に住む神である蛇を鎮めるために、蛇を祭ったことが風土記に記されている。風土記に見える行方郡の谷戸の景観と、内匠日向周地遺跡の地形は類似しており、その点から、本木簡が谷地における水田開発の際の祭祀と関わっているのではないかと推測される。

③の木簡を积読した平川南氏は、『常陸風土記』の説話をふまえて、これを「龍神の使いである蛟蛇が水の枯渴または大雨による洪水を恐れ、水神である龍王に雨乞いまたは止雨を祈願した札ではないか」あるいは、「谷戸開発に伴う犯土のさいに龍王に対する祭祀を実施した可能性も、考えられるであろう」と推定している⁶⁾。

これらの木簡は、いずれもその土地の水の神である「龍王」との交渉や契約の際に作成された呪術的な木簡であることは確実である。

ところで、本木簡が、河川跡から出土している点が注目される。このことから、河川の枯渴あるいは増水による洪水を恐れ、水神である「龍王」に雨乞いあるいは止雨を祈願した札であると考えられる。おそらく河川の周辺において祈雨あるいは止雨に関する祭祀が行われたのであり、本木簡はそれにとまって作成され、河川に投げ込まれたものであろう。

2. 山形県山形市・梅ノ木前 1 遺跡出土木簡 ⁷⁾

山形県山形市の梅ノ木前 1 遺跡は、9世紀ごろの集落遺跡である。この遺跡の竪穴建物跡から、木簡1点が出土した。

木簡の形状は、上下端は原形をとどめているが、左右側面は欠損している。上下端は、斜めに整形されて

おり、当初からの加工か、あるいはなにかの木製品を転用したもののかについては、不明である。年代は、伴出の須恵器の杯や、遺跡の土層から、9世紀前半と考えられる。



本木簡は、内容から考えて呪符木簡であると考えられる。「龍王」の記載が見られる点が特徴である。左右側面は欠損しているが、「東方青龍王」と書かれた行の左側に、「北方黒龍王」と書かれていた可能性がある。裏面は、天地逆に文字が書かれているが、墨が薄れており判読は困難である。

記載内容は、さきにあげた藤原宮木簡に近い。すなわち、「東方青龍王」「南方赤龍王」「西方白龍王」は、①の木簡の「東方木神王」「南方火神王」「中央土神王」という表現にきわめて近い。

本木簡に見える、東方を「青」とし、南方を「赤」とし、西方を「白」とする考え方は、いうまでもなく陰陽五行説にもとづくものであり、東方の守護神として「青龍」、南方の守護神として「朱雀」、西方の守護神として「白虎」、北方の守護神として「玄武」があることはよく知られている。

また、管見のかぎり、木簡の記載と対応する表現を持つ經典に、名古屋市の七寺一切經（平安末期書写）の『安墓經』がある⁸⁾。

「仏告東方青龍王軍・南方赤龍王軍・西方白龍王軍・北方黒龍王軍。五行六甲禁忌十二時神立符時歲月劫殺、家王、父母墓前微在墓石墓処八神天神公神其母神子女神各安所在墓有燒害人生起功立墓傷害衆生恐傷犯土公立家天上諸神及立中諸神恐燒害亡人致趣便生人家中諫詞大小若有疾病或致官家口舌横生錢財不長家中不安田重不収」

これは家墓を安穩に保つことを説いた經典であるが、同種の經典として、居宅の安寧を説いた『安宅經』がある。これは、後漢代失訳（訳経者不明）として『大正新修大藏經』第二一卷に収められているが、典型的な中国撰述の疑偽經典であると考えられる。『安宅經』は、『日本書紀』白雉二年（651）12月晦日条に、

8) 増尾伸一郎「都城の鎮祭と〈疫神〉祭儀の展開」『環境と心性の文化史 下巻』勉誠出版、2003年。

「味経宮」において「安宅・土側等の経を読みしむ」とあり、七世紀後半段階ですでに日本に受容されていたことが分かり、8世紀の正倉院文書にもその名がみえる。この『安宅経』にも、「東方大神龍王七里結界金剛宅南方大神龍王七里結界金剛宅西方大神龍王七里結界金剛宅北方大神龍王七里結界金剛宅」という表現がみえ、藤原京出土木簡の記載とも類似する。

本木簡は、こうした『安宅経』や『安墓経』などの經典の存在が背景にあって作成されたとみることができるだろう。

「龍王」が記載された木簡の評価をめぐっては、祈雨や止雨にかかわる祭祀と結びつけられていることが多いが、『安宅経』『安墓経』などの存在から、犯土にともなう祭祀と関わって作成された可能性も考慮しておく必要があろう。

3. 韓国出土の「龍王」銘文字資料

上に紹介した2点の「龍王」木簡により、9世紀の日本古代地方社会において、祈雨祭祀や止雨祭祀、犯土にともなう祭祀としての「龍王」信仰が広まりを見せていたこと、それが木簡という形態を利用して広まっていったと考えられること、さらに、「龍王」木簡にみえる文言の背景に、經典の存在がうかがえること、などが明らかになった。次に、韓国出土の「龍王」銘文字資料について検討したい。

(1) 昌寧・火旺山城出土木簡

2002年から2005年にかけて、慶南文化財研究院の発掘調査により、昌寧・火旺山城の池から木簡7点が出土した。

このうちの1点は円筒形木簡で、丸い頭の部分と胴の部分からなる人形状の木簡である(4号木簡)。墨書で、前面の頭の部分には顔の輪郭線を描いた後、眉毛と目、鼻、口、首を表現しており、胴体の部分は服を着ている姿を現わしている。裏面には「龍王」を含む複数の文字が確認できる。この木簡の頭上と胴の部分にクギがささったまま出土した。

調査報告⁹⁾によれば、この木簡は、共伴遺物から、9～10世紀の年代が与えられている。

积文については、その後金在弘氏が次のような判読文を発表している¹⁰⁾。

(1面)

9) 박성전·김시환 「창녕 화왕산성 연지 출토 목간」 한국 목간학회 발표문(2009년 8월 13일)

10) 김재홍 「창녕 화왕산성 龍池출토 木簡과 祭儀」 (『木簡과 文字』第4号、2009年。

真族

(2面)

□古仰□□年六月廿九日真族

龍王開祭

また、金昌錫氏は、次のように判読している¹¹⁾。

(オモテ面)

• □□古□仗□割六用廿九歳真族

龍王開祭

(裏面)

• 真族

木簡の解釈についても、両氏の見解は異なる。金在弘氏は、これを祈雨とのかかわりで解釈しているのに対し、金昌錫氏は、これを病氣治癒のために龍王に祈願した際に、自分の分身として作った人形である、と解釈している。

だが木簡の赤外線写真を観察すると、明らかに「六月廿九日」という日付が確認できる。そして、この木簡ではこの「六月廿九日」という日付こそが重要な鍵となる。金在弘氏らが指摘しているように、『三国史記』によれば、5月や6月を中心にした夏の時期において、さかんに祈雨祭祀が行われていることが注目される。

「夏、大旱、移市、画龍祈雨」(『三国史記』新羅本紀卷10、眞平王50年条)

「六月、大旱、王召〈河西州〉〈龍鳴嶽〉居士〈理曉〉、祈雨於〈林泉寺〉池上、則雨浹旬」同、聖徳王14年条)

「夏六月、旱、又召居士〈理曉〉祈祷、則雨、赦罪人」(同、聖徳王15年条)

「夏五月、不雨、遍祈山川、至秋七月、乃雨」(同、憲徳王9年条)

以上から、本木簡も、祈雨祭祀との関わりで考えるべきである。

また、人形という形状の意味は、藤原宮出土の「龍王」木簡に人物像が描かれることの意味と、関係する可能性がある。

11) 김창석 「창녕화왕산성蓮池출토木簡의 내용과 용도」 『木簡과文字』第5号、2010年。

（2）慶州・伝仁容寺出土木簡

新羅の王京がおかれていた月城の南側に所在する伝仁容寺址の発掘調査で、井戸跡から「龍王」と書かれた木簡が出土している¹²⁾。伝仁容寺址の発掘調査では、7世紀初葉の瓦築基壇の建物跡が確認されており、7世紀初葉から寺が存在していたことが推定される。木簡は、10号井戸跡が廃絶したあとに廃棄されたものとみられ、その年代は9世紀初頭ごろと推定されている（なお、井戸の使用時期は、井戸の底から見つかった土器の編年から、7世紀後半～8世紀初葉と考えられている）。法量は、長さ158mm、幅13.8mm、厚さ7.7mmである。樹種は松で、木簡の両面に書いて約40文字が確認されている。形状は、刀子の形に加工されており、文字は切られていないので、当初から刀子状に加工されていたものとみられる。

この木簡の意味については、すでに李在琬氏が次のような釈文を提示している。

- 大龍王中白主民渙次心阿多乎去亦在
- （名）者所貴公歳卅金（候）公歳卅五（逆方向から記載）
是二人者歳中人亦在如□与□□右□

すでに李在琬氏は、本木簡が池や井戸などの水の祭祀に用いられたことを論証しているが、本報告では、他の資料もあげながら、本木簡の意味を考えてみたい。

この木簡で特徴的なのは、次の3点である。

一つめの特徴として、あらかじめ木片を刀子状に加工したあと、文字を記している。つまり、刀子状木製品に墨書している。

ふたつめの特徴として、文章は、「大龍王」ではじまるオモテ面から裏面へと記載がわたるが、その際に文字列が上下逆に配され、さらに裏面2行目も、直前の行とは上下逆に文字が配される。

呪符木簡では、しばしば前後の行が上下逆に記される例があり（「九九八十一、八九七十二」など）、こうした記載様式は、通常の文書木簡では考えがたく、呪符木簡に共通するものである。

さらに、前後の行が上下逆に記される書式は廻文形式といわれ、高麗時代の買地券にもみられる記載方法である。仁宗21年（1143）の僧侶世賢の買地券（国立中央博物館所蔵）は、廻文形式で書かれたものである¹⁴⁾。

維皇統三年癸亥歳五月朔丁巳七日癸亥高麗国

興王寺接松川寺住持妙能三重大師世賢（逆方向より記載）

歿故亡人乞人前一萬万九千九百九十文就

皇天父后土母社稷十二辺買得前件墓（逆方向より記載）

田周流一頃東至青龍南至朱雀西至

白虎北至玄武上至蒼天下至黄泉四至分

明即日錢財分付天地神明了保人張陸（逆方向より記載）

李定度知見人東王公西王母書契人石

切曹読契人金主簿書契飛上（逆方向より記載）

天読契人入黄泉急急如律令 (271×305×16mm)

買地券とは、現実世界の土地売買と同様の方法で、地下世界から墓地用の土地を購入するために作られた、土地の神との契約文書である。それは現実世界に向けて作られたものではなく、土地の神に向けて作られた、一種の宗教的行為である。各行がわざと上下逆に記されるのは、現実世界に対してではなく、土地の神に向けた一種のメッセージとして機能していたものと考えられる。

ところでこうした廻文形式の記載方法は、もとは中国の買地券に由来するものであることが、中国出土の買地券の事例からも確認できる¹⁵⁾。つまり廻文形式により呪術的意味を持たせるという記載方法は、中国に由来し、それが韓半島や日本列島の呪符木簡に影響を与えたものとみることができる。

日本の「龍王」銘木簡では、例えば先にあげた山形県山形市梅野木前1遺跡出土木簡をみると、裏面がオモテ面との記載とは上下逆の方向から文字が記されており、これも、廻文形式による記載方法を意識している可能性がある。

三つ目の特徴として、木簡中には、2名の人物の名前と年齢が記載されている。これは、日本の藤原京跡九条四坊出土木簡（前掲）の「龍王」銘木簡に、2人の「婢」の名前と「生年」が記載されていることと共通している。一度の龍王祭祀に2人の人物が関与していると思われることや、年齢が祭祀に重要な意味を持っていたことなどがうかがえる。

なお、本木簡の出土状況を見ると、井戸の廃絶後に廃棄されたことが確認されることから、井戸にかかわる祭祀と直接にかかわるかどうかは、慎重な検討が必要である。井戸のすぐ脇には、池の遺構も確認されており、あるいは池の祭祀に関わって使用され、それが井戸に廃棄された可能性も考えられる。

（3）慶州・雁鳴池出土「辛審（番）龍王」銘刻書土器

慶州・雁鳴池は、新羅の王宮であった月城の東北に隣接し、その宮殿跡は、月池宮とよばれる太子の居所であったことが明らかにされている。ここからは、これまで「辛審（番）龍王」と書かれた刻書土器が出土

12) 「경주 伝仁容寺址 발굴조사 4차 자문회의」国立慶州文化財研究所、2010年

13) 이재환「傳仁容寺址 ‘龍王’ 목간과 우물·연못에서의 제사의식」(『木簡과 文字』7、2011年 6月)

14) 국립중앙박물관「다시 보는 역사 편지 高麗墓誌銘」2006年

15) 池田温「中国歴代墓券略考」『東洋文化研究所紀要』86、1981年

していることが知られている。

「辛審」の意味は不明だが、雁鴨池木簡に「辛番」とみえることからすると、この「辛番」と同一の意味を示している可能性が高い。

「龍王」については、『三国史記』巻第39、雑誌第8 職官中にみえる東宮官の官司の一つである「龍王典」を表している可能性がある(「龍王典 大舍二人、史二人」)。雁鴨池から出土した墨書土器の中に「本宮辛番」「洗宅」など、官司名を書いたと思われるものがみられるためである。

龍王典は、龍王の祭祀をつかさどる官司であると言われており、そうだとすれば、雁鴨池における龍王祭祀をつかさどる役所であった可能性がある。龍王への請雨祭祀は、日本の平安京において神泉苑で行われていたことからわかるように、一般に池で行われるものであり、雁鴨池を擁する東宮に「龍王典」という役所が置かれていたのも、そのためであろう。

これまで出土した2点の「龍王銘」木簡についても、その出土状況から池の祭祀との関わりを考える必要があるだろう。

さらに興味深いことに、雁鴨池からはミニチュアの刀子製品や人形なども出土している。とくにミニチュアの刀子製品は鉛製であり、実用品とは考えられず、祭祀に用いられたことは明らかである。これらも、雁鴨池における龍王祭祀にともなって使用された可能性が想定できる。そしてこのことは、2点の龍王木簡の形状についても示唆を与える。すなわち、火旺山城出土の人形の龍王木簡も、伝仁容寺址出土の刀子形の龍王木簡も、祈雨祭祀に使用される木製品に直接墨書されたと考えられる。

おわりに

韓国出土の2点の木簡により、祈雨などを主とする龍王祭祀が9世紀の新羅の各地で行われていたことが確実となった。

その祭祀の方法も、祈雨祭祀に用いる祭祀用木製品に直接墨書するという点や、記載様式が通常の文書木簡とは異なり各行を上下逆に記すなど、明らかに祭祀を意識した書き方をしている点が特徴的である。とくに、各行を上下逆に記していく記載方法は、中国の買地券などに由来する特徴的なもので、おそらく現実世界へのメッセージではなく、水の神としての「龍王」に対するメッセージとして書かれたことは明白である。このように、「龍王」祭祀は、木簡の記載方法も含めて、中国に端を発する東アジア世界に特徴的な祭祀方法として広がりを見せたのである。「龍王」祭祀は、同時期(9世紀)の日本列島各地においても木簡を用いた形で行われており、今後も古代東アジアの祭祀形態の広がりを考える素材として、「龍王」祭祀に注目していかなければならない。

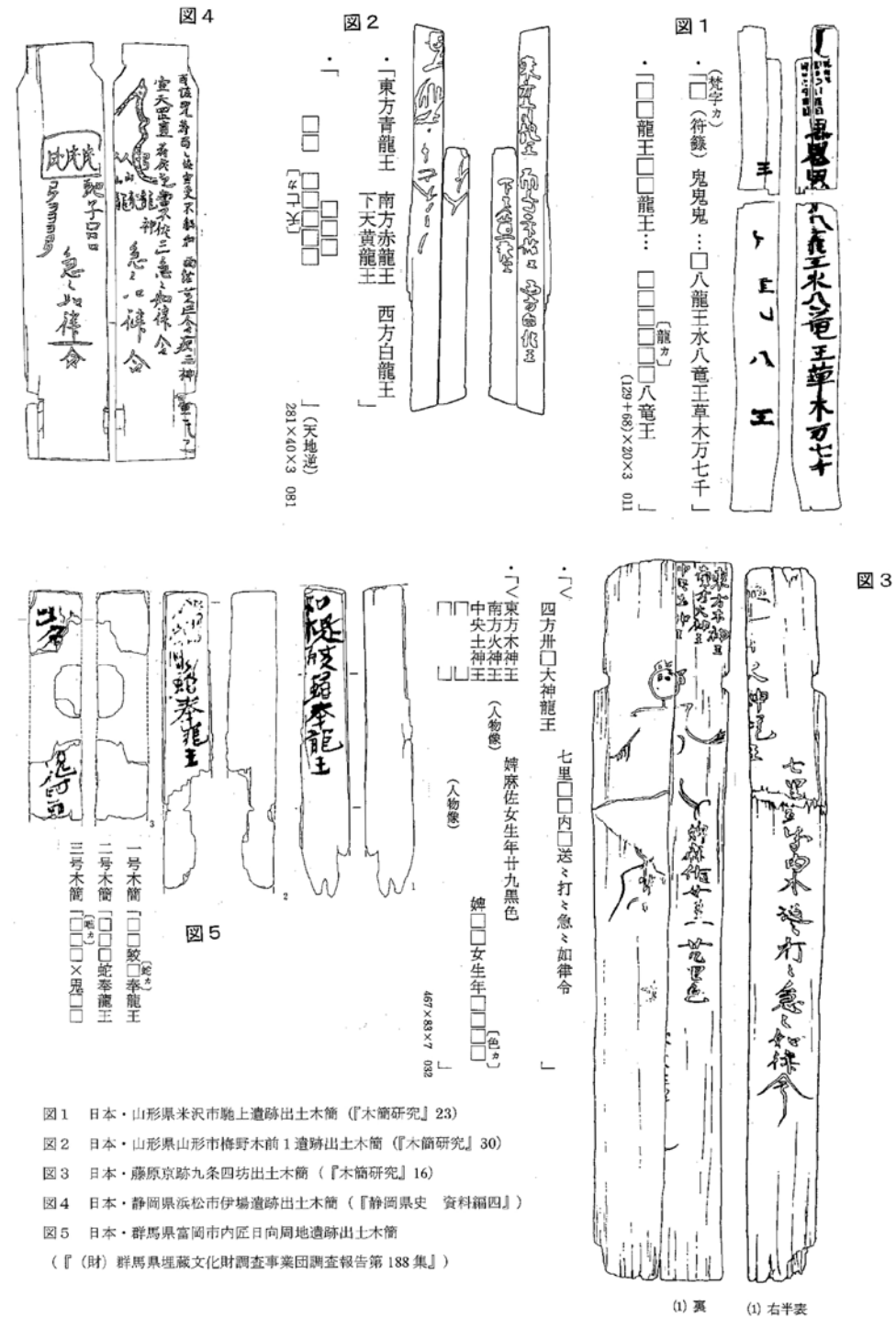


図1 日本・山形県米沢市馳上遺跡出土木簡(『木簡研究』23)
 図2 日本・山形県山形市梅野木前1遺跡出土木簡(『木簡研究』30)
 図3 日本・藤原京跡九条四坊出土木簡(『木簡研究』16)
 図4 日本・静岡県浜松市伊場遺跡出土木簡(『静岡県史 資料編四』)
 図5 日本・群馬県富岡市内匠日向周地遺跡出土木簡
 (『(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第188集』)

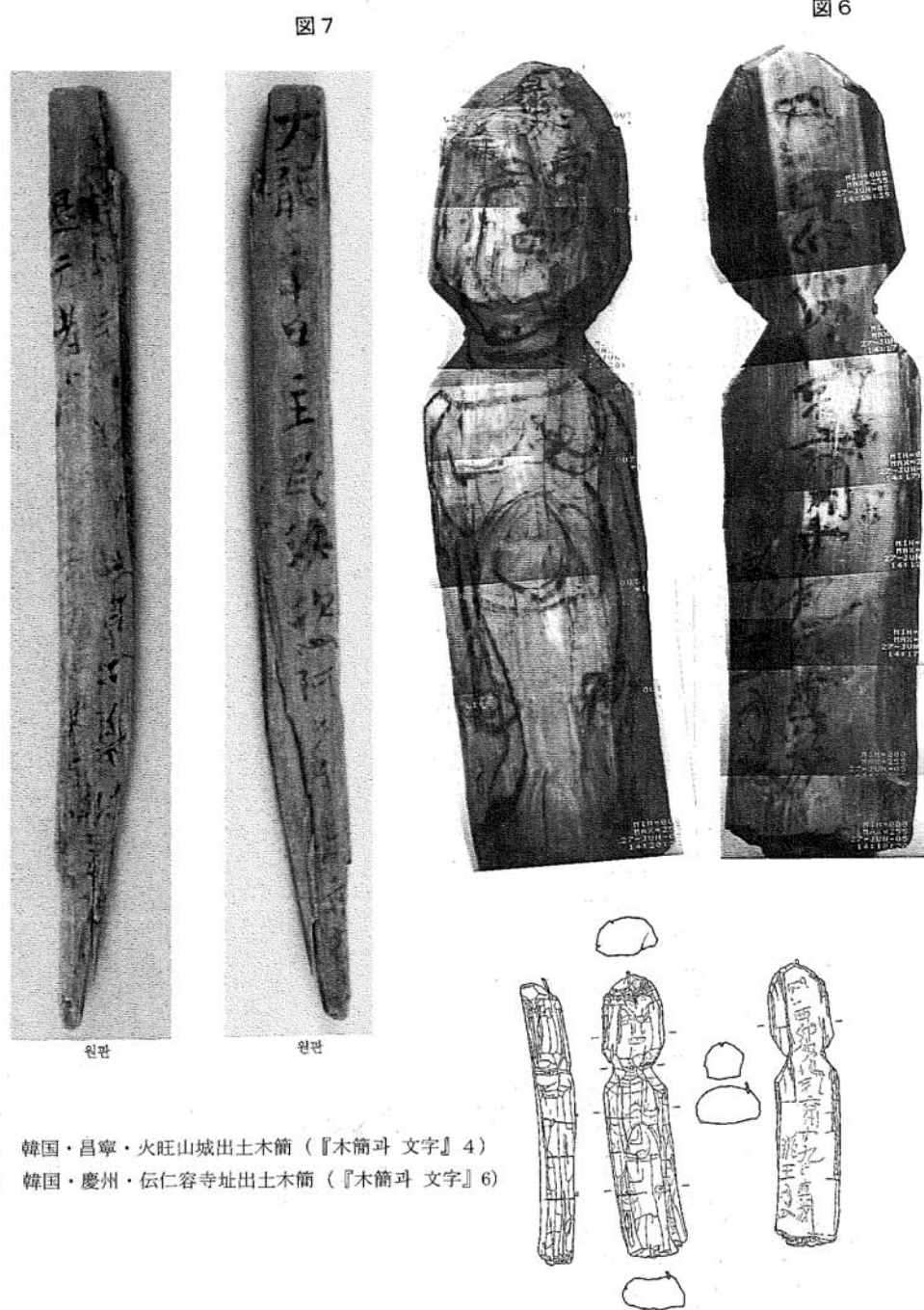


圖8 송천사 주지 새현 매지권 (1143年)

「龍王」銘 목간과 고대 동아시아세계 - 한일 출토 목간 연구의 신전개 -

三上喜孝

日本 山形大學

*번역 : 정 애 영 (숙명여대)

머리말

한국 출토 목간은 동시대의 사료가 거의 없는 한국고대사연구에 한줄기 광명을 비춰주었다. 특히 삼국시대의 통치형태나 지방제도 등 정치지배의 실태를 밝힐 재료로서 한국 출토 목간의 역할은 중대하다.

한편 근년에는 그러한 정치사적 관점 뿐만 아니라 고대의 제사나 신앙의 연구에서도 한국출토 목간이 큰 의미를 지니고 있음이 점차 분명해지고 있다. 그 일례가 「龍王」銘 목간이다.

지금까지 한국에서는 ‘용왕’이라고 쓰여 있는 고대의 목간이 2점이 확인되고 있다. 한 점은 2002년부터 2005년에 걸친 조사에 의해 창녕 화왕산성의 연못 유적에서 출토된 7점의 목간 중 인형에 ‘용왕’이라고 쓰여진 것이 있고 또 한 점은 2009년 경주 전인용사(倝仁容寺) 유적의 우물 안에서 나온 것이 있다.¹⁾ 또 경주 안압지에서는 「辛審(番)龍王」이라고 쓰인 각서토기가 많이 출토되고 있는 것은 지금까지 알려지고 있다.

「龍王」이라고 쓰인 고대목간은 지금까지 일본에서도 수 점 출토되고 있고 동 시기의 한반도에서도 출토함으로써 동아시아의 제사, 의례의 형태를 생각할 때 흥미로운 소재를 제공하고 있다고 생각한다.

그런 점에서 본 보고에서는 한국과 일본의 ‘용왕’명 목간의 검토를 통해 동아시아세계의 제사의 확대를 이해하기 위한 소개를 제공하고자 한다.

1) 이재환 「傳仁容寺址 ‘龍王’ 목간과 우물 · 연못에서의 제사의식」(『木簡과 文字』 7, 2011년 6월)에 의하면 국립경주박물관 안에서 출토된 통일신라시대의 목간 (『韓國の古代木簡』 279号木簡)에도 「龍王」의 문자가 확인된다고 한다. 이것을 포함하면 「龍王」명 목간은 한국에서 세 개의 예가 확인된다.

1. 야마가타(山形) 현 요네자와(米沢)시 · 하세가미(馳上)유적 출토 목간²⁾

야마가타(山形)현 요네자와(米沢)시의 하세가미(馳上)유적은 9세기의 집락유적이다. 이 유적에서는 하천의 흔적이 검출되고 그곳에서 토기 등과 함께 목간 1점이 출토되었다. 출토된 목간은 단책형으로 상단은 일부 결손되어 있으나 원형을 유지하고 있다. 하단도 원형을 갖고 있다. 단 중간부가 접혀 있고 그 대로 접속하는지의 여부는 명확치 않다.

해석문 (『木簡研究』 23, 2001年)

〔梵字力〕

□ (符籙) 鬼鬼鬼… [] □ 八龍王水八竜王草木万七千

〔龍力〕

□ □ 龍王 □ □ 龍王… [] □ □ □ □ □ □ 八竜王

(129+68)×20×3 011

겉면은 비교적 문자가 명확히 읽히는데 안쪽 면은 먹이 잘 남아있지 않아 문자가 매우 불명료하다.

목간이 나온 하천에서 출토된 토기의 연대가 9세기 중반의 것으로 추정되는 것으로 보아 이 목간의 연대도 9세기 경의 것으로 추정할 수 있다.

이 목간은 주부목간(呪符木簡)이다. 서식, 내용은 주부목간으로서의 성격을 잘 나타내고 있다. 특히 겉면의 상단부에 있는 부록(符籙)과 「鬼」의 표기는 주부목간(呪符木簡)에 특징적인 기재이다.

이 목간에서 가장 주목되는 것은 「龍王」의 기재이다. 이 목간의 안팎 양면에 「龍王」 혹은 「竜王」이라는 말이 계속하여 쓰여 있다. 그리고 「龍王」 앞에는 「水八」이라는 두 글자가 쓰여 있다.

「龍王」이란 용의 형태를 한 수중에 사는 물의 신으로 불경 등에서는 청우(淸雨)제의 신으로 자주 등장한다.

이 목간에서 보이는 「水八竜王」은 『法華經』 등에 보이는 「八大龍王 (八龍王)」을 가리킬 가능성이 있다. 「八大龍王」이란 불교에서 범화경 설법 자리에 있었다는 8종류의 용왕으로 難陀龍王, 跋難陀龍王, 娑伽羅龍王, 和脩吉龍王, 徳叉迦龍王, 阿那婆達多龍王, 摩那斯龍王, 優鉢羅龍王의 각 용왕을 가리킨다. (『法華經』 第一序品). 이 중 娑伽羅龍王이 바다나 비를 관장하는 데서 항해의 수호신이나 기우제의 본존으로 되어 있다. 이 목간의 다른 부분에도 「八龍王」이 반복해서 쓰여 있고 모두 「八大龍王」을 가리키고 있을 가능성이 있다.

한편으로 『大正新修大藏經』에 수록되어 있는 『大方大雲經請雨品第六四』 『大雲輪請雨經』 『仏説大孔雀呪王經』 『仏母大孔雀明王經』 등의 잡밀경전(雜密經典)에는 기우나 비를 그치게 하는 수법에 관한 것이 많고 그 중에 「

2) 三上喜孝 「米沢市馳上遺跡出土木簡」 『山形県埋蔵文化財センター調査報告書101集 馳上遺跡発掘調査報告書』 (財) 山形県埋蔵文化財センター, 2002年 3月

龍王」의 이름이 열거되어 있는 부분이 있다. 「水八龍王」의 이름은 내가 본 바로는 이들 경전 중에는 보이지 않으나 용왕의 이름을 나타내고 있을 가능성도 생각할 수 있다.

그런데 이 잠밀경전은 예로는 스이코(推古), 텐지(天智)조에 일본에 전해지기 시작하여 나아가 나라시대의 건당사들이 가져왔을 것으로 생각되고 있다.

헤이안시대가 되면 기우, 청우가 국가적인 제사가 되어 가끔 열리게 된다.

가장 유명한 것은 홍법대사弘法大師 구카이(空海)에 의한 청우수법請雨修法이다. 헤이안시대의 청우수법에 관해 쓴『祈雨日記』(続群書類從第二五輯 釈家部)에 의하면 天長元年(824) 구카이가 헤이안쿄의 神泉苑에서 청우경법을 할 때 연못 속에서 「善如」라는 이름의 용이 출현하여 비가 내렸다고 되어 있다. 이 용은 길이 5척의 뱀으로 수면상으로 금색의 8촌 정도만 모습을 드러냈다고 한다. 전설화된 이야기이나 용왕이 수중에 살고 있다고 생각하고 있었던 점, 그리고 그것이 뱀의 형태를 하고 있었던 점은 당시의 ‘용왕’관을 밝히는데 흥미롭다. 고대의 이러한 기우제사를 참고하면 이 목간도 또 수중에 산다고 믿어지고 ‘용왕’에 대한 기우제사(혹은 지우제사止雨祭祀)에 즈음하여 작성된 것으로 생각할 수 있다.

그런데 ‘용왕’으로 쓰여 있는 고대의 목간은 이하의 사례가 확인되고 있다.

① 原京跡九条四坊 출토 목간 (『木簡研究』16号, 1994年)

● 「< 七里□□内□送々打々急々如律令 四方卅□大神龍王 』	
● < 東方木神王 婢麻佐女生年廿九黒色 南方火神王 (人物像) 中央土神王 婢□□女生年□□□□ [] [] (人物像) 』	467×83×7

② 静岡県浜松市伊場遺跡 출토 목간 (『静岡県史 資料編四』1989年)

● 「> 百怪咒符百々怪宣受不解和西怪□□令疾三神□□□ 宣天岡直符佐□当不佐□〔亡カ〕急々如律令 弓 龍神 (竜の墨画) 人山 龍 急々如律令 人山龍 』	
--	--

● 「 戌 蛇子□□□ 急々如律令 戌 弓ㄣㄣㄣㄣ 』	322×67×4 032
③ 군마현 토미오카(富岡) 시 内匠日向周地 유적 출토목간 (『(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第一八八集 内匠日向周地遺跡 下高瀬寺山遺跡 下高瀬前田遺跡』) (一号木簡) 「□□蛟□奉龍王 (250)×33×4 051 (二号木簡) 「□□□蛇奉龍王 (145)×33×7 019 (三号木簡) 「□□□×鬼□□ (42+53)×35×6 019	

①의 목간은 후지와라쿄(藤原京) 우경右京 9조九条 4방四坊 발굴조사에서 남북도로인 西四坊坊間小路 동측의 구덩이에서 출토된 것이다. 와다 아즈무(和田葦)씨에 의하면 여기에 기재되어 있는 「四方卅□大神龍王」「七里□□内送々打々急々如律令」「東方木神王」「南方木神王」「中央土神王」등의 표현은 구마라십鳩摩羅什이 번역한『孔雀王呪経』에 있는 「東方大神龍王七里結界金剛宅」「南方大神龍王七里結界金剛宅王」「西方大神龍王七里結界金剛宅」「北方大神龍王七里結界金剛宅」「中央大神龍王七里結界金剛宅」의 표현과 유사하다고 지적하고 이 목간이 사방의 용왕에게 비를 청하기 위한 것으로 추측하고 있다.³⁾

②의 목간은 이바(伊場) 유적의 큰 구덩이에서 나온 것으로 8세기 후반에서 10세기 중반의 것으로 추측되어 연대폭이 있는 자료이다. 「龍王」의 문언 자체는 기재되어 있지 않으나 이 목간의 곁에는 「天■ (岡の異体字)」「龍神」, 안에는 「虵(蛇)」의 문자가 확인된다. 목간 전제의 해석문이 확정되어 있지 않으므로 성격은 확실치 않으나 기우기원 부적이라는 설 이나 질병구제라는 설⁴⁾ 등이 있다.

③의 목간이 출토된 타쿠미(内匠)日向周地 유적은 계곡 형태의 저부에 위치하는 유적으로 3점의 목간은 고대의 곡상유구谷狀遺構에서 출토된 것이다. 이 목간이 작성된 배경으로 주목되는 것이 8세기 전반에 성립한『常陸国風土記』의 行方郡条에 전해지는 箭括麻多智(아마즈노마다치)에 의한 관련설화가 주목을 받는데 한편 가스가우라(霞ヶ浦)에 면한 골짜기에는 복잡하게 얽힌 몇 개의 계곡이 있었다. 箭括麻多智라는 인물은 이 골

3) 和田葦「南山の九頭龍」『日本国家の史的特質 古代・中世』思文閣出版, 1997年

4) 芝田文雄「百怪呪符」『伊場木簡の研究』東京堂出版, 1981年

짜기 입구의 저습지의 갈대밭을 잘라 새롭게 수전을 개발하였다. 그 개발 때 골짜기에 사는 신인 뱀을 진정시키기 위해 뱀을 제사지낸 것이 풍토기에 기록되어 있다. 풍토기에 보이는 行方郡의 골짜기의 경관과 다쿠미(内匠) 日向周地 유적의 지형이 유사하며 그 점에서 이 목간이 골짜기에 있는 수전개발 때의 제사와 관련된 것으로 추측한다.

④의 목간을 해석한 히라가와 미나미(平川南)씨는 『常陸風土記』의 설화를 포함하여 이를 “龍神의 부하인 뱀이 물의 고갈 또는 홍수를 두려워하여 수신인 용왕에게 기우 또는 지우를 기원한 징표가 아닐까” 혹은 “골짜기 개발에 수반되는 범토犯土에 대해 용왕에 대한 제사를 실시한 가능성도 생각할 수 있을 것이다”라고 추정하고 있다.⁵⁾

⑤이들 목간은 모두 그 토지의 수신인 ‘용왕’과의 교섭이나 계약 시에 작성된 주술적인 목간인 것은 확실하다.

그런데 이 목간이 하천유적에서 출토되고 있는 점이 주목된다. 이 점에서 하천의 고갈 혹은 증수에 의한 홍수를 두려워하여 수신인 ‘용왕’에게 기우 혹은 지우를 기원한 증표라고 생각할 수 있다. 아마 하천 주변에서 기우 혹은 지우에 관한 제사가 행해지고 이 목간이 그와 관련되어 작성되어 하천으로 던져졌을 것이다.

2. 山形県山形市・梅ノ木前1遺跡 출토목간⁶⁾

야마가타(山形)현 야마가타시의 우메노키(梅ノ木)前1 유적은 9세기 경의 집락유적이다. 이 유적의 견혈건물터에서 목간 1점이 출토되었다.

목간의 형상은 상하단은 원형이 있으나 좌우 측면은 결손되어 있다. 상하단은 비스듬하게 정형되어 있고 처음부터 가공한 것인지 어떤 목제품을 전용한 것인지에 대해서는 명확치 않다. 연대는 같이 출토된 스에키잔이나 유적의 토층 등으로 9세기 전반으로 생각된다.

해석문 (『木簡研究』 30, 2008년)

● 「東方青龍王 南方赤龍王 西方白龍王
下天黃龍王
」
「
□ □ □
」
〔天亡カ〕 (天地逆)

5) 平川南 「呪符木簡 (1) 龍王呪符」 『古代地方木簡の研究』 吉川弘文館, 2003年, 初出 1995年

6) 三上喜孝 「梅野木前1遺跡出土木簡」 『山形県山形市埋蔵文化財調査報告書第28集 梅野木前1遺跡発掘調査報告書』 株式会社しまむら, 山形市教育委員会, 2007年 7月

● □ □ □ □ □ □ □
」
281×40×3 081

이 목간은 내용으로 보아 주부목간이라고 생각된다. 「龍王」이 쓰여 있는 점이 특징이다. 좌우 측면은 결손되어 있으나 「東方青龍王」이라고 쓰여진 행의 왼쪽에 「北方黒龍王」이라고 쓰여 있었을 가능성이 있다. 안쪽면은 천지라고 쓰여 있었을 가능성이 있다. 안쪽면은 천지가 반대로 문자가 쓰여져 있는데 먹이 얼어져 판독이 곤란하다.

기재내용은 앞에서 언급한 후지와라쿄 목간에 가깝다. 즉 「東方青龍王」「南方赤龍王」「西方白龍王」은, ①의 목간의 「東方木神王」「南方火神王」「中央土神王」이라는 표현과 매우 가깝다.

이 목간에서 보이는 동방을 ‘청’으로 하고 남방을 ‘적’으로 하고 서쪽을 ‘백’으로 하는 생각은 말할 것도 없이 음양오행설에 기초한 것으로 동방의 수호신으로서 ‘청룡’, 남방의 수호신으로서 ‘朱雀’, 서방의 수호신으로서 ‘白虎’, 북방의 수호신으로 ‘玄武’가 있는 것은 잘 알려져 있다.

또 알려진 바에 의하면 목간의 기재와 대응하는 표현을 갖는 경전으로 나고야시의 七寺一切經(헤이안 말기 필사)의 『安墓經』이 있다.⁷⁾

「仏告東方青龍王軍・南方赤龍王軍・西方白龍王軍・北方黒龍王軍。 五行六甲禁忌十二時神立符時歲月劫殺, 家王, 父母墓前微在墓石墓処八神天神公神其母神子女神各安所在墓有嬈害人生起功立墓傷害衆生恐傷犯土公立家天上諸神及立中諸神恐嬈害亡人致趣便生人家中諫詞大小若有疾病或致官家口舌横生錢財不長家中不安田重不収」

이는 가묘를 안온하게 유지할 것을 말한 경전으로 동종의 경전으로 거택의 안녕을 설파한 『安宅經』이 있다. 이것은 후한대의 실역失訳(역경자 불명)으로 『大正新修大藏經』 第二一卷에 수록되어 있는데 전형적인 중국찬술의 疑偽經典으로 생각된다.

『安宅經』은 『日本書紀』 白雉二年 (651) 12月晦日条에 「昧経宮」에서 「安宅・土側 등의 경전을 읽었다」고 되어 있어, 7세기 후반 단계에 이미 일본에 수용되었음을 알 수 있고 8세기의 정창원문서에도 그 이름이 보인다.

이 『安宅經』에도 「東方大神龍王七里結界金剛宅南方大神龍王七里結界金剛宅西方大神龍王七里結界金剛宅北方大神龍王七里結界金剛宅」이라는 표현이 보이고 있어 후지와라쿄에서 출토된 목간의 기재와도 유사함을 보인다.

이 목간은 이러한 『安宅經』이나 『安墓經』 등의 경전의 존재가 배경이 되어 작성되었다고 볼 수 있을 것이다. 「龍王」이 기재된 목간의 평가를 둘러싸고는 기우나 지우와 관계된 제사와 관련된 것이 많으나, 『安宅經』『安墓經』 등의 존재에서 범토犯土에 수반된 제사와 관련하여 작성된 가능성도 고려할 필요가 있을 것이다.

7) 増尾伸一郎 「都城の鎮祭と〈疫神〉祭儀の展開」 『環境と心性の文化史 下巻』 勉誠出版, 2003年.

3. 韓國에서 출토된 「龍王」銘 문자자료

위에서 소개한 2점의 「龍王」 목간에 의해 9세기의 일본고대 지방사회에서 기우제사나 지우제사, 범토와 관련된 제사로서의 「龍王」 신앙이 퍼지고 있었다는 점, 그것이 목간이라는 형태를 이용하여 확대되고 있었다고 생각 되는 점, 그리고 「龍王」 목간에 보이는 문언의 배경에 경전의 존재가 보인다는 점 등이 밝혀졌다. 다음으로 한국에서 출토된 「龍王」銘 문자자료에 대해 검토하겠다.

(1) 창녕 화왕산성火旺山城 출토 목간

2002년부터 2005년에 걸쳐 경남문화재연구원의 발굴조사에 의해 창녕 화왕산성의 연못에서 목간 7점이 출토되었다.

이 중 1점은 원통형 목간으로 등근 머리와 몸통 부분으로 구성되는 인형상의 목간이다(4호 목간). 검은 글씨로 전면 머리 부분에는 얼굴의 윤곽선을 그린 후 눈썹과 눈, 머리를 표현하고 있고 몸통 부분은 옷을 입고 있는 모습을 나타내고 있다. 안쪽 면은 「龍王」을 포함한 복수의 문자가 확인된다. 이 목간의 머리와 몸통 부분에 못이 박힌채 출토되었다.

조사보고에 의하면 이 목간은 같이 출토된 유물로부터 9~10세기의 연대로 추정되고 있다.

해석문에 대해서는 그 후 김재홍씨가 다음과 같이 판독문을 발표하고 있다.⁸⁾

(1 面)
眞族
(2 面)
□古仰□□年六月廿九日眞族
龍王開祭
또 김창석金昌錫씨는 다음과 같이 판독하고 있다. ⁹⁾
(겉면)
●□□古□仗□剖六用廿九歲眞族
龍王開祭
(안쪽면)
●眞族

8) 김재홍 「창녕 화왕산성 龍池출토 木簡과 祭儀」『木簡과 文字』 第4号, 2009年.

9) 김창석 「창녕화왕산성連池출토木簡의 내용과 용도」『木簡과文字』 第5号, 2010年.

목간의 해석에 대해서도 양 씨의 견해가 다르다. 김재홍씨는 이를 기우와의 관련에서 해석하고 있는데 대해 김창석씨는 이를 질병치료를 위해 용왕에게 제사를 올릴 때 자신의 분신으로 만든 인형이라고 해석하고 있다.

그러나 목간의 적외선 사진을 관찰하면 분명히 「六月廿九日」이라는 날짜가 확인된다. 그리고 이 목간에서는 이 「六月廿九日」이라는 날짜야말로 중요한 열쇠가 된다. 김재홍씨 등이 지적하고 있듯이 『三國史記』에 의하면 5월이나 6월을 중심으로 한 여름 시기에 기우제가 활발하게 거행되었음이 주목된다.

「夏, 大旱, 移市, 画龍祈雨」(『三國史記』 新羅本紀卷10, 眞平王50年条)
「六月, 大旱, 王召 〈河西州〉〈龍鳴嶽〉居士 〈理曉〉, 祈雨於 〈林泉寺〉池上, 則雨浹旬」同, 聖德王14年条)
「夏六月, 旱, 又召居士 〈理曉〉 祈禱, 則雨, 赦罪人」(同, 聖德王15年条)
「夏五月, 不雨, 遍祈山川, 至秋七月, 乃雨」(同, 憲德王 9 年条)

이상으로 이 목간도 기우제사와의 관련을 생각할 수 있을 것이다.

또 인형의 형상의 의미는 후지와라쿄에서 출토된 「龍王」 목간에 인물상이 그려져 있는 것의 의미와 관계될 가능성이 있다.

(2) 경주 전인용사伝仁容寺 출토 목간

신라의 왕궁이 있었던 월성 남쪽에 소재하는 전인용사지伝仁容寺址 발굴조사에서 우물터로부터 「龍王」으로 쓰여진 목간이 출토되고 있다.¹⁰⁾ 전인용사지 발굴조사에서는 7세기 초엽의 기와로 만든 기단의 건물터가 확인되어 7세기 초엽부터 절이 있었음을 추정할 수 있다. 목간은 10호 우물터가 막히면서 폐기된 것으로 보이고 그 연대는 9세기 초엽 경으로 추정되고 있다(그리고 우물의 사용기간은 우물 바닥에서 발견된 토기의 편년으로 7세기 후반~8세기 초반으로 생각되고 있다). 목간의 치수는 길이 158mm, 폭13.8mm, 두께7.7mm이다. 수종은 소나무로 목간 양면에 약 40문자가 확인되고 있다. 형상은 칼 모양으로 가공되어 있고 문자는 잘려있지 않아 처음부터 칼 모양으로 가공되어 있었던 것으로 보인다.

이 목간의 의미에 대해서는 이미 이재환李在晩씨가 다음과 같은 해석문을 제시하고 있다.¹¹⁾

- 大龍王中白主民渙次心阿多乎去亦在
- 〔名〕者所貴公歲卅金〔候〕公歲卅五 (역방향으로 기재)
- 是二人者歲中人亦在如□与□□右□

10) 「경주 伝仁容寺址 발굴조사 4차 자문회의」 国立慶州文化財研究所, 2010年

11) 이재환 「傳仁容寺址 ‘龍王’ 목간과 우물 · 연못에서의 제사의식」(『木簡과 文字』 7, 2011年 6月)

이미 이재환씨는 이 목간이 연못이나 우물 등의 물의 제사에 사용된 점을 논증하고 있는데 이 보고에서는 다른 자료도 참고하며 이 목간의 의미를 생각해 보기로 하겠다.

이 목간에서는 3가지의 특징을 들 수 있다.

첫번 째 특징은 미리 목편을 칼 모양으로 가공한 뒤 문자를 쓰고 있는 점이다. 즉 칼 모양 목제품에 묵으로 쓰고 있다.

두번 째 특징으로 문장은 「大龍王」으로 시작하는 겹면에서 안쪽면으로 기제가 이어지는데 그 때 문자열이 상하 반대로 배치되어 있고 안쪽면 2번째 행도 직전의 행과는 상하 반대로 문자가 배열되어 있다.

주부목간에서는 자주 전후의 행이 상하 반대로 기재되어 있는 예가 있고 (「九九八十一, 八九七十二」 등), 이러한 기재양식은 통상의 문서목간으로는 생각하기 어렵고 주부목간에 공통된 것이다.

그리고 전후의 행이 상하 반대로 기재되는 서식은 회문廻文 형식이라 하여 고려시대의 매지권買地券에도 보이는 기재방법이다. 인종21년(1143)의 승려 世賢의 매지권 (國立中央博物館 소장) 은 회문형식으로 쓰여진 것이다.¹²⁾

維皇統三年癸亥歲五月朔丁巳七日癸亥高麗國	
興王寺接松川寺住持妙能三重大師世賢 (역방향으로 기재)	
歿故亡人乞人前一萬万九千九百九十文就	
皇天父后土母社稷十二辺買得前件墓 (역방향으로 기재)	
田周流一頃東至青龍南至朱雀西至	
白虎北至玄武上至蒼天下至黃泉四至分	
明即日錢財分付天地神明了保人張陸 (역방향으로 기재)	
李定度知見人東王公西王母書契人石	
切曹読契人金主簿書契飛上 (역방향으로 기재)	
天読契人入黃泉急急如律令	(271×305×16mm)

매지권이란 현실 세계의 토지매매와 같은 방식으로 지하세계에서 묘지용의 토지를 구입하기 위해 만들어진 토지의 신과의 계약문서이다. 그것은 현실세계를 향해 만들어진 것이 아니고 토지의 신을 향해 만들어진 일종의 종교적 행위이다. 각 행을 일부러 상하 반대로 쓰는 것은 현실세계가 아닌 토지의 신을 향한 일종의 메시지로써 기능하고 있었던 것으로 생각된다.

그런데 이러한 회문형식의 기재방법은 원래는 중국의 매지권에서 유래하는 것으로 중국에서 출토된 매지권의 사례에서도 확인된다.¹³⁾ 즉 회문형식에 의한 주술적 의미를 부여한다는 기재방법은 중국에서 유래사여 한반도나

일본열도의 주부목간에 영향을 끼쳤다고 볼 수 있다.

일본의 「龍王」명 목간에서는 예를 들면 앞에서 언급한 야마가타현 야마가타시 梅野木前 1 遺跡 출토 목간을 보면 안쪽면이 겹면과의 기제가 상하 역방향으로 문자가 기재되어 있고 이것도 회문형식에 의한 기재방법을 의식하고 있을 가능성이 있다.

세번 째의 특징으로 목간 가운데는 2명의 인물의 이름과 연령이 기재되어 있는 점이다. 이것은 일본의 藤原京跡九条四坊에서 출토된 목간(전계)의 「龍王」명 목간에 2명의 「婢」의 이름과 「生年」이 기재되어 있는 것과 공통되어 있다. 한 번의 용왕제사에 2명의 인물이 관여하고 있다고 생각되며 연령이 제사에 중요한 의미를 지니고 있음을 알 수 있다.

그리고 이 목간의 출토상황을 보면 우물이 막힌 후에 폐기된 것이 확인되는 것으로 우물에 관련된 제사와 직접 연관이 있는지는 신중한 검토가 필요하다. 우물 바로 옆에는 연못의 유구도 확인되고 있어 연못의 제사와 관련되어 사용되었다 그것이 우물에 폐기되었을 가능성도 생각할 수 있다.

(3) 경주 안압지 출토 「辛審(番) 龍王」銘刻書土器

경주 안압지는 신라의 왕궁이었던 월성의 동북에 인접하고 그 궁전터는 월지궁으로 불리는 태자의 거소이었음이 밝혀지고 있다. 여기서는 지금까지 「辛審(番) 龍王」이라고 쓰인 각서토기가 출토된 것이 알려져 있다.

「辛審」의 의미는 불명이나 안압지 목간에 「辛番」이 보이는 것으로 보면 이 「辛番」과 동일한 의미를 보이고 있을 가능성이 높다.

「龍王」에 대해서는 『三國史記』卷 第39, 雜志第 8 職官 중에 보이는 東宮官의 궁사의 하나인 「龍王典」을 나타내고 있을 가능성이 있다(「龍王典 大舍二人, 史二人」). 안압지에서 출토된 묵서토기墨書土器 가운데 「本宮辛番」「洗宅」 등의 궁사명을 쓴 것으로 생각되는 것이 보이기 때문이다.

龍王典은 용왕의 제사를 관장하는 궁사로 말해지고 있고 그렇다면 한다면 안압지의 용왕제사를 관장하는 역할이었을 가능성이 있다. 용왕에 대한 청우제사는 일본의 헤이안쿄의 神泉苑에서 행해졌던 것에서도 알 수 있듯이 일반적으로 연못에서 행해지는 것으로 안압지를 둘러싼 동궁에 「龍王典」이라는 관청이 있었던 것도 그 때문 일 것이다.

지금까지 출토된 2점의 「龍王銘」 목간에 대해서도 그 출토상황으로부터 연못의 제사와 관련되었을 것으로 생각할 필요가 있을 것이다.

그리고 흥미로운 것으로 안압지로부터는 미니어처의 칼제품이나 인형 등도 출토되고 있다. 특히 미니 칼 제품은 구리로 만들어져 실용품으로 생각하기 어렵고 제사와 관계된 것임은 분명하다. 이것들도 안압지의 용왕제사와 함께 사용된 가능성을 상정할 수 있다. 그리고 이것은 2점의 용왕목간의 형상에 대해서도 시사를 준다. 즉 화왕산성에서 출토된 인형의 용왕목간도 전인용사지에서 출토된 칼 모양의 용왕목간도 기우제사에 사용되는 목제품에 직접 묵서된 것으로 생각된다.

12) 국립중앙박물관 『다시 보는 역사 편지 高麗墓誌銘』 2006年.

13) 池田温 「中国歴代墓券略考」 『東洋文化研究所紀要』 86, 1981年.

맺음말

한국에서 출토된 2점의 목간으로 기우 등을 주로 하는 용왕제사가 9세기 신라 각지에서 행해지고 있었음이 확실해졌다.

그 제사의 방법도 기우제사에 사용되는 제사용 목제품에 직접 묵서했다는 점이나 기재양식이 통상의 문서목간과는 다르게 각 행을 상하 역방향으로 쓰는 등 분명히 제사를 의식한 기재방식이라는 점이 특징적이다. 특히 각 행을 상하 반대로 쓰는 기재방식은 중국의 매지권 등에 유래하는 특징적인 것으로 아마 현실세계에 대한 메시지가 아니라 물의 신으로서의 「龍王」에 대한 메시지로서 쓰여진 것은 분명하다. 이같이 「龍王」 제사는 목간의 기재방법을 포함하여 중국에서 시작된 동아시아세계에 특징적인 제사방법으로 확대되었던 것이다. 「龍王」 제사는 동시기(9세기)의 일본열도 각지에서도 목간을 사용한 형태로 행해지고 있고 앞으로도 고대 동아시아의 제사형태의 전파를 생각할하는 소재로서 「龍王」 제사에 주목하지 않으면 안 될 것이다.

出土 文字資料에 나타난 人名表記 方法

- 百濟資料를 中心으로 -

朴 仲 煥

國立金海博物館

韓國 古代의 출토 문자자료들에는 그것이 製作된 나라에 따라서 또 제작된 時期에 따라서 文章 안에서 사람을 나타내는 人名 표기방법이 서로 다르게 나타나고 있다. 이러한 차이에는 해당사회의 統治形態나 社會 發展段階 등을 파악할 수 있게 하는 중요한 자료가 반영되어 있어 주목을 끈다. 또 이러한 한국 고대의 인명 표기방법은 일본의 그것과도 비교될 수 있어서 양 지역의 언어와 문화를 비교하는 데 有用한 資料가 될 수 있다.

먼저 한국 고대의 문자자료 가운데 新羅碑의 경우를 보자. 新羅의 石碑 특히 蔚珍 鳳坪里碑의 경우 碑文의 인명 표기법에서 관심을 모으고 있는 부분은 인명 앞에 붙어 있는 部名의 冠稱형태이다. 이는 新羅 6部の 性格變化를 이해할 수 있게 하는 자료가 되고 있다. 신라 中古期の 金石文에 보이는 인명표기 방식은 中代의 그것과는 다른 것으로 알려져 있다. 中古時代의 금석문 자료에는 인명 앞에 반드시 部名이 명기되어 있기 때문이다. 이와 같이 인명 앞에 부명을 冠稱하고 있는 이유는 部員들이 出身部에 所屬되어 있었기 때문이며, 중고기의 6부가 아직 單位政治體的 성격을 가진 지역공동체로서의 기능을 갖고 있어서 부원들이 국가와 所屬部에 二重으로 귀속된 사실을 보여주는 것이라고 생각하는 견해가 있다. 그런데 부명의 관칭이 示唆하는 이러한 시대적 특징에 더하여 冷水里碑나 鳳坪里碑의 경우 部名의 사용에 있어서 또 다른 특징을 갖고 있다. '喙部 牟卽智 寐錦王'이라거나 '沙喙部 徙夫智 葛文王'처럼 왕의 이름 앞에도 部名이 관칭되어 있었던 것이다.¹⁾ 국왕의 부명 관칭현상은 이들 두 금석문 이후의 단계에서는 발견되지 않고 있는데 국왕의 이름 앞에 부명이 관칭되지 않는 단계가 되면 그때 비로소 국왕권이 部를 초월할 만큼 성장하였음을 의미하는 것이라고 받아들여지고 있다.²⁾ 예컨대, 眞興王巡狩碑에서

는 臣僚들의 所屬部는 明記했지만, 국왕의 소속부는 명기하지 않았던 것이다. 이러한 해석에 따르면 진흥왕순수비 단계에 이르러서 비로소 국왕의 位相이 소속부를 벗어나 국가 전체를 대표하는 것으로 자리매김하게 되었다고 볼 수 있는 것이다.

이러한 人名表記法이 示唆하는 政治體의 發展 段階에 대한 해석은 百濟의 경우에서도 가능하다. 王名에까지 부명이 관칭되어 있는 新羅 鳳坪里碑에서의 인명표기 방법과 백제 武寧王陵 誌石에서의 인명 표기방법의 차이점을 어렵지 않게 읽을 수 있기 때문이다. 무령왕릉 지석의 경우 石文의 성격이 앞의 신라비들과 다르고 문장의 내용에도 신라의 봉평리비나 냉수리비에서와 같은 多數의 인물이 등장하지 않는다. 왕과 왕비 두 사람이 등장하고 있을 뿐이다. 물론 買地券의 경우 實存인물은 아니지만 土王, 土伯, 土父母, 上下衆官二千石 이라고 하는 冥界의 土神들과 假想의 고위 관료들이 등장한다. 신라의 '部'와 백제의 '部'가 각각의 해당사회에서 동일한 기능을 갖는 것은 아니었을 것이므로 두 나라의 이 문자자료들을 단순 비교할 수는 없다.

그럼에도 불구하고 王名이 국가 안의 특정 행정구역이나 특정 지역의 명칭을 관칭하고 있는지, 아니면 특정 행정구역이나 특정지역을 초월하여 表記되고 있는지는 그 자체로서 해당 국가의 사회 발전단계에 대한 의미있는 정보가 된다. 무령왕릉 誌石에서 인명표기에 해당되는 부분은 王 墓誌의 '寧東大將軍 百濟斯麻王'과 王妃 墓誌의 '百濟國王 大妃' 부분이다. 중국으로부터 冊封받은 官位와 함께 '百濟某王'이라는 형식으로 인명'을 표기한 것이다. 이는 봉평리비에서 부명이 관칭되었던 왕의 인명 표기 방법과는 크게 다른 것이다. 신라의 石文 가운데서 이러한 형태의 왕명 표기 사례를 찾는다면 北漢山 진흥왕순수비의 왕명표기 방법이 될 것이다. 국왕의 이름 앞에 부명이 관칭되지 않는 단계에 이르러 국왕권이 部를 초월할 만큼 성장하였음을 의미하는 것이라고 보는 앞서의 견해를 따른다면 무령왕릉 지석을 만들었던 525년 무렵의 백제는 봉평비 단계의 신라보다 더 집권적인 상태의 왕권을 형성하고 있었다고 말할 수 있다.

출토 문자자료에 등장하는 인명표기법에서는 우선 해당된 사람의 人名이 가장 중요한 요소이지만 그가 소속되어 있는 地名이나 部名, 巷名과 같은 지역구분이 덧붙여지게 되고 거기에 더하여 官位나 官職名이 붙는 경우가 있다. 봉평리비의 경우에서는 「官職名+部名+人名+官位名」의 순서로 인명을 나타내고 있다. 신라에서는 늦어도 6세기 초두에 출현하여 신라 멸망 때까지 존속한 신라 六部の 展開過程을 兩分하는 것이 바로 7세기 무렵 인명 표기에서 부명 관칭이 消滅되는 시점이라고 이해되고 있다. 이 때에 이르러 部の 단위정치체적 성격이 완전히 소멸되었다고 보는 견해가 그것이다.

그렇다면 백제에서의 인명과 부명의 표기 방식은 어떠할까. 백제의 金石文 가운데 인명이나 관직명을 明記한 경우는 상당수에 이르지만 신라의 石碑들처럼 人名을 部名이나 官位, 官職名 등과 함께 나타낸 경우는 많지 않다. 때문에 봉평리비의 인명표기 혹은 부명 표기와 백제의 인명 표기법을 비교해 보려면 백제 지역에서 나온 금석문 자료 이외의 출토 문자자료와 문헌자료를 함께 살펴보는 것이 필요하다. 출토 문자자료와 文獻에서 찾을 수 있는 백제의 인명표기 자료를 모아보면 다음 표와 같다.

1) 올진 봉평비의 冒頭부분은 '甲辰年 正月 十五日 喙部 牟卽智 寐·錦王 沙喙部 徙夫智 葛文王 □ □ □'으로 시작하고 있다.

2) 전미희, 2000, 「冷水碑·鳳坪碑에 보이는 신라 6部の 성격 - 단위정치체설에 대한 검토를 중심으로」 『韓國古代史研究』 17, 231쪽.

[표] 百濟 人名表記 資料

資料名	人名表記 內容	人名表記 要素와 順序
扶餘 宮南池出土 木簡	‘西部+後巷+已達巳斯’	部名 + 巷名 + 人名
羅州 伏岩里出土 木簡	‘前巷+奈率+烏胡甌’	巷名 + 官等名 + 人名
扶餘 陵山里出土 木簡	‘韓城+下部+對德+疏加爾’	地方城名 + 部名 + 官等名 + 人名
砂宅智積碑	‘奈祗城+砂宅智積’	地方城名 + 人名
瑞光庵 癸酉銘三尊千佛碑像	‘香徒名 + □ 彌次乃 +(眞)牟氏’	地名 + 人名
	‘大舍 + (上生), ‘小舍 + □ □ 等二百五十(人)’	官等 + 人名
『三國史記』의 첫 번째 類型	‘北部 + 解婁’, ‘高木城 + 昆優’	部名 (地名) + 人名
『三國史記』의 두 번째 類型	‘德率 + 眞老’, ‘左將 + 志忠’	官等 (官職) + 人名
『日本書紀』 (欽明 2年)	‘奈率 + 宣文’	官等 + 人名
『日本書紀』 (繼體 7年)	‘五經博士 + 段楊爾’	官職 + 人名
『日本書紀』 (欽明 2年)	‘前部 + 奈率 + 鼻利莫古’	部名 + 官等 + 人名
『日本書紀』 (欽明 2年)	‘下部 + 中佐平 + 麻爾’	部名 + 官等 + 人名
『日本書紀』 (繼體 7年)	‘姐彌 + 文貴將軍’	人名 + 官職
『日本書紀』 (欽明 15年)	下部 + 杆率 + 將軍 + 三貴	部名 + 官等 + 官職 + 人名
『日本書紀』 (欽明 15年)	‘易博士 + 施德 + 王道良’	官職 + 官等 + 人名

이 表를 통해서 一覽할 수 있듯이 백제에서의 인명표기에는 세가지 유형이 있다. 첫번째 유형은 ‘行政區域名(部名, 巷名, 地方城名 등) + 人名’의 형식이다. 두번째 유형은 ‘身分(官等, 官職) + 人名’의 형식이다. 세번째 유형은 첫번째 유형의 표기 요소들과 두번째 유형의 표기요소들을 합쳐놓은 것이다. 즉 ‘행정구역명(部名, 地方城名, 巷名 등) + 신분(관등, 관직) + 인명’의 형식이 된다. 먼저 행정구역의 표기 사례들을 보면 ‘西部 後巷’ 처럼 부명 다음에 보다 下位의 행정구역인 ‘巷’의 이름을 표기하는 형식이 있다. ‘韓城 下部’, ‘奈祗城’, ‘高木城’ 처럼 지방성의 이름이나 지방성과 그 하위의 행정구역인 部名을 다시 표기한 경우도 있다. 近年에는 全北 井邑의 古阜舊邑城에서 출토된 銘文 기와에서 인명을 포함하지는 않았지만 ‘上部上巷’이라고 하여 部와 巷까지 표기한 지방 행정구역명 표기 글자가 확인되었고³⁾ 羅州 伏岩里 출토 木簡에서는 ‘前巷 奈率 烏胡甌’라고 하여 巷名이 먼저 나오고 官等名이 나온 다음 인명이 오는 인명표기의 예도 발견되었다.⁴⁾ 井邑과 羅州의 예는 모두 지방성 내의 하위 행정구역인 部와 巷의 존재를 전하고 있는 것이라고 생각된다. 요컨대 백제 인명표기에서 가장 먼저 표기하는 요소는 行

政區域인데 이 부분은 부명이나, 향명, 혹은 지방성명과 그 지방성의 부명, 향명 까지를 포함하여 출신지나 거주지를 나타내는 요소이다. 백제의 인명표기에 있어서 두 번째로 나오는 것은 身分이다. 여기에는 관위(관등)와 관직의 두가지 요소가 있다. 위의 표에서 신분을 나타내는 관위(관등)는 ‘對德’, ‘德率’, ‘奈率’, ‘中佐平’ 등이다. 주목되는 부분은 百濟 16官等으로 대표되는 官等⁵⁾ 즉 官位와, 이와는 또 다른 신분표기 요소인 官職과의 順序문제이다. 위의 표에서 볼 수 있듯이 백제의 인명표기 사례 속에는 官位와는 다른 것으로 ‘左將’, ‘五經博士’, ‘文貴將軍’, ‘將軍’, ‘易博士’ 등의 官職이 나타나 있다. 관위와 관직의 성격 규명은 별도의 작업을 요하는 것이지만 여기에서는 우선 이들 官職이 官位 즉 官等과 구분되는 것으로 본다. 하지만 16官等制의 官等(官位)이나 이들 관직은 모두 해당 인물의 사회적 지위 즉 신분을 나타낸다는 점에서 같은 기능을 수행한다. 끝으로 백제의 인명표기에서 마지막으로 오는 요소는 인명이다. 요컨대 이러한 내용을 종합하면 백제 사회에서의 인명표기법에서 가장 발전된 단계의 형태는 세가지 요소를 표현하는 것이 되는데 가장 먼저 부로 대표되는 거주지나 출신지에 해당하는 내용이 제시되고 두 번째로 관위나 관직과 같은 신분표시 내용이 제시됨을 알 수 있다. 그리고 인명이 온다. 물론 앞서 언급한 바와 같이 첫 번째 요소와 인명만 표시되거나 두 번째 요소와 인명만 표시되는 경우가 있었다. 이는 인명표기 방법의 初期的 형태를 보여주는 것이거나 後代에 이루어진 史書 編纂過程에서 인명표기법을 人爲的으로 簡略化한 결과의 형태일 것이다.

砂宅智積碑의 경우 後期の 資料임에도 불구하고 관직명이나 관등명이 없이 居住地이거나 出身地로 보이는 城名만 나온다는 점에서 눈길을 끈다. 이 경우 역시 간략화한 인명표기의 사례일 것이다. 사택지적비의 건립자인 砂宅智積은 『日本書紀』에 등장하는 大佐平 智積과 동일인물로 이해되고 있기 때문에 비문에서의 인명표기에 ‘大佐平’과 같은 관등이 표기되지 않았던 데 대한 의문이 있었다. 이에 대하여 『日本書紀』에 기록된 641년 11월에서 642년 1월 사이에 걸쳐 일어난 政變에 사택지적이 연루되었던 때문으로 보는 시각이 있다. 이에 따르면 사택지적은 이 때 內亂을 일으키다가 실패한 것으로 추정된다는 것이다. 하지만 보다 超越의이며 永續的인 세계를 指向하고 있는 사택지적비 비문 내용을 통하여 본다면 퇴임한 前職 고위 관리의 현세초월적 태도가 반영된 결과였을 가능성이 있다.

요컨대 출토문자자료를 통하여 본 백제의 인명표기방법은 기본적으로는 두가지 유형이지만 그 두가지 요소가 모두 포함되어 있는 세번째 유형에서는 관등(관위)이나 관직과 같은 신분표시 내용보다는 출신지나 거주지인 행정구역명(지방성명, 부명, 향명 등)을 먼저 적었음을 알 수 있다. 이러한 백제의 표기 순서를 봉평리비를 비롯한 신라의 그것과 비교할 때 두드러지는 특징은 백제인들이 신분보다는 출신지역을 앞서 나타냈다는 것으로 요약할 수 있다. 또 관등이나 관직 다음에 마지막으로 인명을 적었던 것도 신라와는 다른 백제적 인명표기법의 전통

5) 백제는 古爾王 27년인 260년 16관등을 두었다고 전한다. (二十七年 春正月 置內臣佐平 掌宣納事, 內頭佐平掌庫藏事, 內法佐平掌禮儀事, 衛士佐平掌宿衛兵事, 朝廷佐平掌刑獄事, 兵官佐平掌外兵馬使, 又置達率·恩率·德率·杆率·奈率 及將德·施德·固德·李德·對德·文督·武督·佐軍·振武·克虞 六佐平並一品, 達率二品, 恩率三品, 德率四品, 杆率五品, 奈率六品, 將德七品, 施德八品, 固德九品, 李德十品, 對德十一品, 文督十二品, 武督十三品, 佐軍十四品, 振武十五品, 克虞十六品, 二月, 下令六品已上服紫, 以銀花飾冠, 十一品已上服緋, 十六品已上服青. 『三國史記』 百濟本紀 제2 古爾王)

3) 전북문화재연구원, 2005년 10월, 「고부구읍성2차발굴조사 현장설명회 및 지도위원회의 자료」 11~13쪽.

4) 金聖範, 2009, 「羅州 伏岩里 유적 출토 백제목간과 기타 문자 관련 유물」 『百濟學報』 창간호, 94~95쪽.

으로 이해할 수 있다.

한편 백제의 경우 출토문자자료에서 확인된 당시의 인명표기 방법은 『三國史記』나 『日本書紀』 등의 文獻資料가 전하는 인명 표기방법과 비교되는 것이어서 주목된다. 『三國史記』百濟本紀의 인명 표기방법은 백제 全期間을 통하여 매우 규범화되어 있는데, 그것은 두 가지 유형으로 나눌 수 있다. 첫 번째의 경우, 腆支王 以前の 初期記錄에서만 발견되는 것으로 것으로 ‘部名(혹은 지방성명) + 人名’의 표기법이다. ‘北部 + 解婁’, ‘高木城 + 昆優’와 같은 형식이 그것이다. 또 다른 하나의 유형은 腆支王 이후에 발견되는 것으로 ‘관등(관직) + 인명’의 표기법으로 ‘德率 + 眞老’, ‘左將 + 志忠’과 같은 형식이다. 그런데 『일본서기』에서는 『삼국사기』보다 다양한 형태의 인명 표기의 사례가 발견된다. 『일본서기』에서의 백제 인명표기 방법에는 먼저 『삼국사기』에서의 두 번째 패턴과 같이 ‘관등 + 인명’으로 나타내어 ‘奈率 + 宣文’(欽明 2년)처럼 표기하거나 ‘관직 + 인명’으로 나타내어 ‘五經博士 + 段楊爾’(繼體 7년)와 같은 경우가 있다. 또한 이와는 다르게 부명과 관등(관직)명과 인명을 포함하여 ‘部名 + 官等名 + 人名’으로 표기하는 방법도 발견된다. ‘前部 + 奈率 + 鼻利莫古’(欽明 2년)라든가 ‘下部 + 中佐平 + 麻鹵’(欽明 2년)와 같은 경우이다. 한편 『일본서기』의 백제 인명표기 자료 가운데에는 예외적으로 이름을 먼저 써서 ‘이름 + 관직’의 방법으로 이름이 관직보다 먼저 오는 예도 있다. ‘姐彌 + 文貴將軍’(繼體 7년)과 같은 경우가 여기에 해당한다. 인명과 관등의 순서가 바뀐 경우이다. 이 사례는 현재까지의 자료로 본다면 이례적인 것이다. 또 ‘下部 + 杆率 + 將軍 + 三貴’처럼 ‘부명 + 관등 + 관직 + 인명’으로 표기하여 관등과 관직을 모두 넣은 보다 더 복잡한 표기법도 보이고 ‘易博士 + 施德 + 王道良’(欽明 15년)과 같이 ‘관직 + 관등 + 인명’과 같은 형태의 표기법도 보인다. 하지만 전체적인 양상으로 보아 ‘부명 + 관등 + 인명’의 표기법이 『일본서기』에서도 보다 발전된 형태의 표기법이었다고 생각된다. ‘前部 + 奈率 + 鼻利莫古’(欽明 2년)라든가 ‘下部 + 中佐平 + 麻鹵’(欽明 2년)의 경우가 그러한 보편화된 패턴을 보여주고 있다. 때문에 앞서 설명한 바와 같이 부여 능산리의 ‘韓城 下部’명 목간에서 확인된 ‘地方城名 + 部名 + 官等名 + 人名’ 순서의 인명표기법이 백제 사회에 퍼져 있었을 뿐 아니라 일본에도 전해져서 『일본서기』와 같은 사서에 채록된 것이라고 보아야 할 것이다.

나아가 이러한 ‘부명 + 관등 + 인명’의 표기법이 陵山里 목간에서 발견된다는 점에서 백제의 인명표기를 전하는 두 史書 즉 『삼국사기』와 『일본서기』의 史書로서의 성격을 이해할 수 있는 하나의 자료가 되고 있다. 무엇보다 백제 당시의 인명 표기 방법을 사실 그대로 전하는 一級 자료는 출토 문자자료인 木簡일 것이다. 따라서 『三國史記』에서의 백제 인명 표기는 백제 당시의 다소 복잡한 유형의 자료들을 『삼국사기』 편찬 당시의 기준으로 간략화시켰던 것이라고 생각된다. 한편 『삼국사기』에서의 인명표기의 간략화는 백제 인명표기의 경우보다 신라 인명표기방법에 더 큰 변화를 가져왔을 것이다. 봉평리비를 비롯한 금석문 자료에서 확인되는 신라 중고기 인명표기법의 보편적인 형태는 「官職名+部名+人名+官位名(관등명)」이었기 때문이다. 『삼국사기』의 百濟本紀나 新羅本紀를 보면 백제의 인명이건 신라의 인명이건 모두 ‘관위(관등) + 인명’으로 표기하거나 ‘部名 혹은 城名(출신지 혹은 거주지) + 인명’으로 簡略化해서 표기하고 있는데 이러한 簡略化된 표기법은 봉평리비에서와 같은 신라 중고기 금석문의 보편적인 인명표기법보다는 ‘부명 + 관등 + 인명’의 순서로 적는 백제의 인명표기법의 순서에 가깝다.

‘부명 + 관등명 + 인명’이라는 백제식 인명표기방식은 삼국문화의 비교라는 측면에서도 有用한 자료가 되고 있

다. ‘부명 + 관등명 + 인명’의 형식으로 定型化되어 갔던 백제의 인명표기방법은 ‘官職名+部名+人名+官位(官等)名’의 순서로 정형화된 眞興王巡狩碑를 비롯한 신라의 인명기록방식과는 각 요소의 표기 순서가 다르다. 반면 평양 경상동출토 평양성 석각의 ‘.....漢城下後部小兄文達節自此.....’의 표기방식에서 보듯이 ‘지방성명 + 부명 + 관등명 + 인명’의 순서로 되어 있는 고구려의 인명표기방법과 일치함을 알 수 있다. 이를 통하여 백제의 경우 인명표기방식이 신라와는 다른 반면 고구려의 표기법과 동일했음을 알 수 있다. 이는 건국설화나 古墳의 構造와 같은 유적·유물상에서 발견되는 고구려·백제 양국 간의 文化的 親緣性이 또 다른 방법으로 나타난 사례라고 생각된다.

[이 글은 韓國古代史學會가 主催한 學術會議(蔚珍 鳳坪里碑와 韓國古代金石文)(2011. 6)에서 발표한 내용 가운데 인명표기 부분을 발췌하여 그 내용을 보완한 것이다.]

사발을 쓴 新羅文書(佐波理加盤付屬文書)의 檢討

李 鎔 賢

國立中央博物館

머리말

日本 宮内廳 正倉院事務所 所藏의 이른바 “사하리가반부속문서佐波理加盤付屬文書”, 즉 사발을 쓴 문서는 손에 꼽히는 신라의 문서로 4중 사발을 감싸고 있었다고 알려져 있다. 종이는 黃褐色의 두터운 닥종이이고, 세로 29cm, 상단의 가로는 13.5cm이며, 앞 뒷면에 기록이 있다. 이 문서연구에 있어서는 鈴木靖民, 平川南의 선행업적이 중요하다. 일본 정창원사무소가 제공한 사진자료가 특별전 ‘문자, 그 이후: 한국고대문자전’(2011.10.5.-11.27)에 실렸다.¹⁾ 이제까지 흑백사진만이 공개되어 왔던 바, 최초로 컬러사진이 공개되었다는 점에서 그 의미는 매우 크다. 본고는 도록에 실린 컬러사진을 참고하였다. 필자는 이들 업적에 힘입어, 사진자료의 관찰 과정에서 떠올랐던 소박한 단상들을 본고에서 정리해둔다.

1. 既存 判讀과 解釋

이 자료에 대한 분석은 다각도로 이뤄져왔는데, 鈴木靖民와 平川南의 연구가 매우 중요하다. 먼저 鈴木靖民씨의 판독문은 다음과 같다.

(앞면문서)

才 口 五 口는 [イ + 亡 + 女]

馬 口上才 一具上仕之, 才 尾者上仕而汚去如. 口는 [膺 - 月 + 内]

口 川村, 正月一日, 上米四斗一刀, 大豆二斗四刀, 二月一日, 上米四斗一刀, 大豆二斗四刀, 三月, 米四斗.

(뒷면문서)

…米十斗失受…

未忽知榮, 受丑二石, 上米十五斗七刀, 六直 口,受失二石, 口는 [大 + 吉]

上米十七斗, 丑一石十斗, 上米十三斗, 口山 口,受丑二石, 口는 [執 + 火]

上米一石一斗.

鈴木靖民는 1977년과 1978년에 이를 종합적으로 분석하여 이 방면 연구의 윤곽을 잡았다. 이를 통해 사발은 8세기 전반 신라 공방에서 제작되었으며, 일본에 간 것은 8세기중엽 아마도 752년 전후였고, 950년경에 사발과 문서가 정창원 남창에 들어갔으며, 문서는 752년 이전에 작성된 것임을 알게 되었다. 그는 한 걸음 더 나아가, 752년 (신라 경덕왕 11) 이전에, 촌락의 貢進 및 녹봉 등과 관련된 倉部 및 左右司祿館 같은 중앙관서가 기재한 공적 문서로 판단하였다. 통상 일컫는 앞면문서는 지방의 촌에서 보낸 공진물을 달마다 기록한 장부이며, 뒷면문서는 관료에 대한 상등급 쌀 같은 녹봉지급 기록이라고 판단하였다.²⁾ 이상의 주장은 오랫동안 不動의 定說이었다. 그런데, 2010년 말 平川南에 의해 주목할 만한 새로운 설이 주장되었다. 그의 판독은 다음과 같다.

(앞면문서)

才 倭五 口是 [加 + 内]

馬 口上才 一具上仕之 才 尾者上仕而汚去如 口是 [加 + 内]

口 川村正月一日上米四斗一刀大豆二斗四刀二月一日上米四斗一刀大豆二斗四刀三月米四斗

(뒷면문서)

…米十斗失受…

未忽知榮受丑二石上米十五斗七刀之立受失二石

上米十七斗丑一石十斗上米十三斗 口山 口受丑二石 口는 [執 + 火]

上米一石一斗

1) 국립중앙박물관, 『문자, 그 이후: 한국고대문자전』, 2011년

2) 鈴木靖民, 『古代對外關係史の研究』 1985년, 334면

平川南는 표를 刀로 읽고, 糲(혹 粳)의 약자로 보아, 탈곡하지 않은 벼로 해석하였으며, 𪛗는 돼지로 해석하였다. 이같은 석독을 토대로 뒷면문서는 관청에서 창고에 수납되어 있던 탈곡이 되지 않은 상태의 벼를 백성에게 지급하여 이를 탈곡하여 상납하게 한 기록임을 밝혔다. 또 앞면문서는 動物 不良品 5건에 관한 기록으로, 전체적으로 앞ㄷ 뒷면 모두 창고의 출납, 점검과 관련된 연속된 기록임을 밝혔다.3) 平川南의 새로운 주장은 이 방면 연구의 새로운 里程標라고 평가할 만하다.

2. 앞면문서의 이해

1) 앞부분의 解釋

이상의 관독을 참고하면서, 사진에 의한 필자의 관독안은 다음과 같다.

(앞면문서)	
완형	
01 𪛗 佞五	
02 馬腐上𪛗一具上仕之 𪛗尾者上仕而汚去如	
03	
04	
05 口川村正月一日上米四斗一刀大豆二斗四刀二月一日上米	
06 四斗一刀大豆二斗四刀三月米四斗	
07	
과손	* 숫자는 문서의 行

平川의 연구와 같이 이는 어떤 창고의 물건 점검 기록이며, 佞는 ‘바르지 못함’이란 뜻으로, ‘조악한 것’ 즉 혹 불량품⁴⁾이다. 앞면문서는 조잡하지만 종이에 가로, 세로 계선이 분명하다. 특징적인 것은 1행의 𪛗 이 계선을 넘어서 쓰여진 점인데, 이는 매우 돌출적이다. 𪛗 만을 강조하기 위해 가로 界線 위에 썼을 가능성도 있지만, 강조할 이유가 명확하지 않다.

𪛗는 돼지고기로 본 것을 비롯하여 본 문서에 대한 이해는 平川南설에 따른다. 다만, 腐는 𩵿[加 + 内]로 읽고 가슴부위라 해석한 先學의 의견⁵⁾과 달리하여, 필자는 腐로 읽고 부패한 것으로 보아, 馬腐는 부패한 말고기, 혹은 말고기로 부패한 것으로 해석해 둔다. 나머지 관독은 기존 견해를 따른다.⁶⁾ 이에 문장구조는 다음과 같이 파악할 수 있다.

	품목	불량상황	수량	상납사실	불량상황	
(1)	𪛗	佞	五		돼지고기	불량품 5
(2)	馬	腐		上	말	상한 것 상납됨
(3)	𪛗		一具	上仕之	돼지고기 1구	상납됨
(4)	𪛗尾者		上仕而	汚去如	돼지꼬리는	상납되었지만 더럽혀져 있었다

具는 말린 고기의 단위라는 지적에 주목하면⁷⁾, 이들 돼지고기나 말고기는 모두 말린 상태로 두어졌을 것인데, 高句麗 德興里 古墳 廚房 壁畫에 보이는 바와 같이 고리에 걸려져 보관되었을 모습이 상상된다.

(1)의 𪛗 佞五의 𪛗 이 가로 계선을 넘어 돌출되게 쓰여진 것은 나중에 쓰였기 때문일 것으로 추정된다. 𪛗는 2행이 쓰일 무렵에 추가되었을 것이다. 즉 당초 佞五(불량품 5)라고만 써넣어 두었는데, 그 고기의 내용은 쓰지 않아도 알 수 있는 𪛗 이었다. 그런데, 다음에 𪛗 과 함께 馬가 상납됨으로써, 두 종류를 기록해야 했고, 따라서 앞서 佞五도 그 품목이 𪛗 임을 명기해야 했기 때문에 추가했을 것이다. 1행의 3자는 다른 글자보다 먹선이 두텁고 진하며, 그에 비해 2행의 글자들은 먹선이 비교적 흐리고 글자도 작은 편이다. 이같은 상황은 추기의 방증이 된다.

(2)와 (3)은 平川南의 주장과 같이 上은 상납을 의미한다⁸⁾. 특히 7세기 초반 백제자료인 佐官賃食記 목간에 “佃目之(전목지란 사람) 二石 上(2석은 상납함), 未 一石(1석 상납하지 못함)”에 보이는 바와 같이, 上은 창고로 납입되는 행위, 창고로 물품이 들어오는 상황을 일컫는다. 上仕之의 之는 문장의 종결을 나타내는 것이다. (3)에 이어 (4)에서도 上仕가 보이는데, 仕는 上아래 붙어 관용구처럼 활용되었다. 상납되어 섞기어진다는 정도의 의미로, 상납을 존경하는 보조동사로 쓰였을 가능성이 있다. (4)汚去如의 如는 ‘-다’란 토씨여서, 汚去如는 ‘더럽혀졌다.’ “더럽혀져 있었다”는 의미다.

(1)은 기왕에 창고에 있던 재고에 관한 기록이다. (2)와 (3)은 새롭게 창고에 상납되어 들어온 물품에 대한 기록이다. (4)는 (3)에 대한 부연설명으로 보인다. 즉 나중에 쓰여진 (2)(3)(4)는 (1)의 내역이나 부연설명으로는 보이지 않는다. 여기서 복원되는 상황은 다음과 같다.

처음에, 창고에 돼지고기로 불량품이 5건 있었다. 거기에 추가되어 말 부패한 것 1건과 돼지고기 1구가 상납되

3) 平川南, 「正倉院佐波理加盤付屬文書の再檢討」『日本歴史』2010년 11월호, 吉川弘文館, 4면

4) 平川南, 앞의 논문, 4면

5) 平川南, 앞의 논문, 3면

6) 鈴木靖民, 앞의 책, 平川南, 앞의 논문

7) 平川南, 앞의 논문, 3면

8) 平川南, 앞의 논문, 6면

었다. 상납된 돼지고기 1구를 점검한 결과, 꼬리부분이 더럽혀져 있었다. 文書는 이같은 상황을 順次的으로 기록한 것이다. 결과적으로, 현재 倉庫에는 돼지고기 불량품이 5건, 꼬리가 더럽혀진 돼지고기가 1건, 말고기가 1건 있는 것이 된다.

2) 뒷부분의 해석

이 부분에는 종래부터 판독에 이론이 없다.

05 □川村正月一日上米四斗一刀大豆二斗四刀二月一日上米
06 四斗一刀大豆二斗四刀三月米四斗
숫자는 행
(뒷면문서)
파손
(숫자는 문서의 行)

巴川村：				파친촌			
일자	상납	품목	수량				
正月一日	上	米	四斗一刀	정월 1 일	上納	쌀	4 말 1 되
		大豆	二斗四刀			콩	2 말 4 되
二月一日	上	米	四斗一刀	2 월 1 일	上納	쌀	4 말 1 되
		大豆	二斗四刀			콩	2 말 4 되
三月	米	四斗		3 월		쌀	4 말

正月1日和 2月1日에 각각 쌀 4말1되와 콩 2말4되가 상납되었다. 즉 창고에 입고된 것이다. 3월은 일자기재가 없고, ‘上’도 생략되었다. 상납품에 콩이 보이지 않고 쌀도 4말로 종래와 달리 1되가 모자라다. 통상적 입고에 비해 감액되었으며, 일자가 기재되지 않았는데, 이는 정기 入庫日인 초하루가 지켜지지 않았기 때문일 수 있다. 입고액이 적은 것에 대해서는 춘궁기여서 조정된 것이라는 견해가 있다.⁹⁾ 춘궁기와 같은 납부자 측의 납부상황에 따라 納付額와 品目, 納付日이 조정되기도 했었음을 알 수 있다.

9) 鈴木靖民, 앞의 책, 368-369면

3) 전체에 대한 이해

이 부분의 문서에 대해 각 지방별 공진물 장부, 즉 正稅帳설과¹⁰⁾ 倉庫管理部署의 出納點檢文書說¹¹⁾이 있다. 村 즉 마을 별로 이 장부가 작성되었다고 본다면, 먼저 마을 이름이 나오고 다음에 달별로 穀食(구체적으로 쌀과 콩)의 納付 狀況이 기재되고 기타 항목이 기재된 후에, 마지막에 고기(구체적으로 돼지, 말)의 납부 상황이 기재된 것이 된다.

그런데 앞면 문서 전반부에는 동물 구체적으로 돼지와 말의 건육 상태와 수가 기록되어 있고, 후반부에는 곡식 구체적으로 쌀과 콩의 양이 기록되어 있다. 이들은 모두 음식과 관련 있는 食材料라는 공통점을 갖는다. 이같은 관점에서 보면, 식재료를 관리하는 창고에서 식재료의 수납상황을 기록한 장부라고 볼 수도 있다.

이 장부를 어떠한 성격으로 보든, 문서 후반부의 정월, 2월, 3월 부분의 기록으로 보아 작성 주기는 적어도 3개월 이상이며, 작성 시점은 3월 이후가 된다. 아울러 해 즉 年次가 기록되지 않은 것으로 보아 같은 해에 이와 같은 장부 혹 기록이 몇 차례 이뤄졌을 것으로 추정된다.

전반부 동물 중 하나인 𪎾는 안압지 출토 刻書 목간에 보이는 바와 같이

□𪎾捧才百廿品上
□𪎾에서 받들어 올린(상납한) 𪎾 120개, 품질은 상등급

이 보인다. 𪎾는 지역사회에서 궁중 혹 나라에 공진되는 동물이었다. 따라서 이것을 어떤 동물로 인정하는가와 관계없이 상납받는 품목이었다. 또 하나의 점검 대상이던 말은 신라촌락문서에 보면, 신라국가에서 그 수를 일일이 파악하는 중요한 동물이었다. 아울러 달마다 지역 村에서 정기적으로 쌀과 콩을 상납받는 곳이었다. 이러한 곳은 국가기관이외에 생각할 수 없을 것이다.

한편, 문서의 성격에 관해서인데, 계선이 쳐져 있기는 하나 세로선이 조잡하다. 어떤 것은 위에서 아래로 내려긋기도 하고 어떤 것은 아래서 위로 올려긋기도 하였다. 또 행간의 간격이 일정하지 않다. 이는 정연한 형식을 갖고 있는 신라촌락문서(신라촌락장적, 신라제1장적)의 계선과 뚜렷하게 비교된다. 또한 칸을 띄거나 상하계선을 넘어 탈격적으로 글자를 쓰거나 하는 부분도 있다. 따라서 이것이 상부에 보고되는 최종 문서라고 보기 어렵다. 이는 이와 관련된 물품의 출납을 관리하는 관리가 기록한 장부, 기록으로 보인다.¹²⁾

10) 鈴木靖民, 앞의 책, 380-381면

11) 平川南, 앞의 논문, 13면

12) 이 문서를 平川南는 창고를 관리하는 동일 관청이며, 출납 점검을 위해 관리 개인의 장부라고 하였다.(平川南, 앞의 논문, 13면)

3. 뒷면문서의 理解

이 부분에 대한 필자의 관독은 다음과 같다.

01	…米十斗失受…	
02	未忽知榮受丑二石上米十五斗七刀之立●受失二石	●는 [大 + 吉]
03	上米十七斗丑一石十斗上米十三斗◆□山●受丑二石	◆는 [執 + 火]
04	上米一石一斗 空白	
	숫자는 문서의 行을 나타냄	

이를 平川南가 다음과 같이 정리하였다. 즉

사람이름 + 受 + 丑 + 수량 : 어떤 이가 탈곡되지 않은 벼를 얼마 받았다.
+ 上 + 米 + 수량 : 그 가 탈곡하여 쌀 얼마를 바쳤다.

표을 탈곡되지 않은 상태의 벼를 표시하는 百濟, 新羅 및 日本 공통의 俗字 혹은 國字임을 밝혀낸 것은 研究史에 길이 남을 卓見이다. 이를 참조하여 이 문서를 아래와 같이 정리할 수 있다.

사람이름/관등	受 혹은 上	곡식	수량	
[]		…□□		----- 1가
	□	米	十斗	----- 1나
	失受	□	□□□	----- 2가
	□	□	□□	----- 2나
未忽知／榮	受	丑	二石	----- 3가
	上	米	十五斗七刀	----- 3나
之立／●	受失		二石	----- 4가
	上	米	十七斗	----- 4나
		丑	一石十斗	----- 5가
	上	米	十三斗	----- 5나
◆□山／●	受	丑	二石	----- 6가
	上	米	一石一斗	----- 6나

이처럼 “受+丑”구문(“가”에 해당)과 “上+米”구문(“나”에 해당)은 늘 짝을 이룬다. 그런데 之立／●의 예에서와 같이 受는 생략되기도 하였으며, 受失로 대체될 수도 있는 용어였다. 또한 미상인[] 혹은 2의 예에서와 같이 失受로도 대체될 수도 있는 것이었다. 한편, 之立／●에서 표가 생략되기도 하였다. 이는 단순한 누락일 수도 있지만, 이처럼 두 단어가 앞뒤로 순서가 바뀌어도 같은 뜻을 의미하는 예는 신라 축성 및 제방저수지 건설 관련 비석에 보인다.

作受(明活山城作城碑), 受作(觀門城 新垆里城 제5 명문석각), 受(南山新城碑)

즉 受, 受失, 失受는 같은 내용을 의미하는 것으로, 作受류와 同工異曲으로 보인다. 따라서 여기서의 失은 壬申誓記石에 보이는 바와 같은 통상적 의미인 ‘잘못’이란 뜻으로 풀기는 어렵다.¹³⁾ 失에는 ‘喪失하다’, ‘없어지다’는 뜻을 代入해두고자 한다. 脫穀을 담당한 어떤 이가 ‘받아감으로써 없어진 것’으로 해석하고자 한다. 倉庫 측 입장에서 그들은 받아감으로써 창고가 비워지기 때문에 없어진 것, 상실된 것으로 파악했을 수 있다. 한편 受는 수령하다, 받는다는 의미도 있지만, 南山新城碑나 明活山城作城碑 등의 용법을 보면, 담당하다, 맡다는 의미도 있다. 뒷면문서에서는 脫穀을 담당하다는 의미로 해석가능하여 보인다. 혹은 ‘擔當하다’, ‘受領하다’는 의미가 함께 重義적으로 쓰였을 수도 있다.

한편, 榮은 알려진 바와 같이 신라 경위 奈末, 奈麻의 이표기인 乃末의 合字 혹은 連書다. 관등이나 숫자를 연서로 쓰는 것은 泗川新羅碑를 비롯 신라금석문에서 자주 보인다. 之立나 ◆□山 다음에 보이는 ●는 大舍의 合字 혹은 連書다. 乃末은 신라 경위 17관등 중 11위이고, 大舍는 12위이다.¹⁴⁾ 따라서 이곳의 사람 명단은 官等の 高下順으로 기록된 것임을 알 수 있다.

문서가 찢어진 상태여서 결락된 부분이 있어 단언할 수 없는 부분도 있지만, 대체로 탈곡을 맡긴 벼의 양은 2석을 넘지 않는다. 이것은 한 번에 탈곡할 수 있는 최대범위였을 가능성이 있다. 之立／●의 경우는 受와 上의 행위가 2회에 걸쳐 있고 있다. 이를 합산하여 한 번에 기록하지 않은 것은 이것이 2회에 걸쳐 이뤄지거나 동시에 2곳에서 행해졌기 때문일 것으로 추정된다. 脫穀 可能 容量이 컸기 때문일까. 아울러 이 자체가 각자가 자신이 보유하고 있던 곡식을 탈곡하여 탈곡된 米의 상태로 상납한 것을 의미할 수도 있다. 이 경우, 受失은 ‘받아 없어지다’가 아니라 ‘맡아 없어지다’로 해석가능하다. 세금을 바치는 사람의 입장에서 ‘없어지다’는 표기는 유효하다.

界線은 앞면문서에는 있고 뒷면문서에는 없다. 뒷면문서 左側に 보이는 패선과 같은 것은 앞면문서의 먹이 비친 자국에 불과하다. 이로 보아 앞면문서가 먼저 작성되고, 뒤에 뒷면문서가 작성된 것으로 판단된다. 앞면문서는 전체가 원 장부에 정리되고 난 뒤에 폐기되고, 뒷면에 문서를 작성하였을 것인데, 상호간 시간적 간격은 잘 알 수 없다.

13) 鈴木靖民(앞의 책, 347면, 351면)는 이를 ‘받았다가 잃어버린 것’, ‘받지 못한 것’ 혹은 ‘잘못 받은 것’으로 해석하였다.

14) 신라의 경위는 위에서부터 아래로 이별찬伊伐濬 · 이찬伊濬 · 잡찬曼濬 · 파진찬波珍濬 · 대아찬大阿濬 · 아찬阿些 · 일길찬一吉濬 · 사찬沙濬 · 급별찬級伐濬 · 대나마大奈麻 · 나마奈麻 · 대사大舍 · 사지舍知 · 길사吉士 · 대오大烏 · 소오小烏 · 조위造位가 있었다. 이것은 이미 鈴木靖民(앞의 책, 380면)이 지적하였다.

4. 사발을 쓴 종이문서의 一生과 종이

이처럼 사발문서가 종이문서의 뒷면을 재활용하여 다시 문서로 활용하는 것은 正倉院文書들을 연상케 한다. 宮內廳正倉院에 소장된 이른바 宮內廳正倉院文書들은 문서 폐기 뒤에 뒷면을 활용한 것들이 많다. 최종적으로 이 문서는 신라에서 日本 貴族 혹은 王室에 수출된 鎡器그릇을 싸는 종이로 활용된 것이므로, 이 종이는 최초 문서로 사용된 이래, 두 차례나 재활용된 셈이다. 즉 사발을 쓴 신라문서는 다음과 같은 일생을 보낸 것이다.

- (1) 문서로 활용(‘앞면문서’)
- (2) 문서의 용도폐기 후, 이면을 활용하여 다시 문서를 작성(‘뒷면 문서’)
- (3) ‘뒷면 문서’도 용도폐기 된 후, 그릇 포장재로 종이로서 활용

이같은 종이 재활용의 전통은 新羅村落文書(혹 신라관문서, 신라촌락장적, 신라 제1장적)에서도 보인다. 신라 촌락문서는 서원경을 비롯한 마을 들에 관한 計帳적 문서로서 작성되었다가 용도 폐기된 후, 다시 華嚴經註釋書의 논질 즉 두루마기 문서의 커버 안의 내장재로서 재활용되었다.

신라사회의 종이에 대한 재활용의 모습에서 그들이 살림살이의 알뜰함을 엿볼 수 있기도 하지만, 이는 바로 종이가 高價品이었음을 반증하는 것이다. 일본 정창원문서 가운데 상당부분을 점하는 寫經所文書 가운데는 經筆師에게 종이를 대어주는 내용의 문서들이 있는데, 여기서는 내어 준 종지와 경필에 사용된 종지, 다시 반납된 종지의 수량을 체크하였다. 이는 종지 관리에 세심한 배려를 기울인 것인데, 역시 종지 가격과 무관하지 않을 것으로 보인다. 종지와 관련해서는 慶州 月城垓子 출토 목간이 주목된다.

제1면	大烏知郎足下万拜白	大烏知郎 足下께 万拜하며 보고드립니다.
제2면	經中入用思買白不離紙一二斤	經에 넣어 쓰려고 해서(=생각해서) 산다고 보고드리지 않았지만, [산] 종지가 1, 2斤[입니다].

제3면, 제4면 생략

이 목간은 漢字를 新羅말 語順으로 쓴 이두문장으로 유명하다. 이른바 壬申誓記石體에 해당하는데, 經은 아마도 佛經을 의미하고 여기에 사용되는 종지는 寫經 혹은 木版印刷에 활용할 종지 구입 관련 사항으로 판단된다. 이에 의하면 종지의 구입은 원칙적으로는 사전에 보고하고 결재를 얻어 사야할 사안이었으며, 때로는 사후 보고도 가능했던 모양이다. 어쨌든 종지 구입은 결재를 받아야 하였던 것이었다.

한편 종지 제작과 관련해서는 新羅白紙墨書 大方廣佛華嚴經의 跋文에 紙作人 즉 종이만드는 사람을 비롯하여 종지 제작 관련 자료가 보인다. 이에 의하면 종지제작은 經筆師, 佛菩薩像을 그리는 사람, 經心匠 등과는 별도의 특화된 匠人이 있었다. 백지묵서 대방광불화엄경의 종지는 닥나무로 만들었다.

5. 종이문서가 사발을 쓴 상황의 실험적 복원

奈良國立博物館 『(第五十四回)正倉院展』(2002년)의 이 유물 관련 해설은 다음과 같다.

사발을 쓴 문서는 녹로로 마감한 그릇 4개를 안에 포개넣은 것으로 뚜껑은 보이지 않는다. 모두 바닥을 높게 만들지 않고 문양도 넣지 않았다. 구연부분은 용기벽에서 거의 수직으로 올라가면서 안쪽을 약간 두텁게 하였다. 가장 바깥쪽 그릇 바깥바닥쪽에 “五”라는 墨書가 있다. 이로 보아 본래 5개 이상의 그릇으로 구성된 것으로 여겨지며, 이 4개의 그릇 역시 원래부터 같은 셋트였는지 알 수 없다. (중략) 여기에는 신라문서서가 붙어 있었으므로 이 그릇이 新羅製임을 엿볼 수 있다.¹⁵⁾

이를 통해 원래 5개로 구성되었음을 알 수 있다. “五”란 글자는 안쪽 그릇에서부터 “一”로 시작하여 바깥쪽으로 순차적으로 번호를 준 것인지, 아니면 가장 바깥쪽 그릇에만 “五”라고 써서 전체가 5개 1조임을 나타낸 것인지 알 수 없다. 다만 원래 종이문서가 그릇에 부착된 상황에 대한 기술은 보이지 않는다.

그런데 종이문서를 관찰해보면 하단부의 아래로부터 1/4되는 부분과 2/4되는 부분에 구겨진 선이 보인다. 1/4되는 부분은 일부 가장자리가 닳아 찢어지고 얼룩이 묻어 있다.

이로 보아 이 종이문서는 상반부가 그릇 안쪽 바닥에 깔리고 하반부를 접어 그릇의 구연쪽에 걸쳤던 것으로 추정된다. 1/4에 생긴 찢어진 흔적과 선은 그릇 구연부에 걸쳐 있던 흔적이고, 2/4 부분에 생긴 구겨진 선은 그릇과 그릇 사이에 겹쳐 눌러 들어간 흔적이었을 것이다. 그러므로 이 종이문서는 5개의 그릇 가운데 포개진 어떤 두 그릇 사이에 완충재로서 끼어 있었던 것이 된다. 이 문서의 사진을 복사하여 실물 길이 즉 29cm로 맞추고, 이를 실측한 결과 다음과 같다.

하단부에서 1/4되는 부분까지	약 8cm
1/4되는 부분에서 2/4되는 부분까지	약 7cm
2/4되는 부분에서 상단까지	약 14cm

그릇 가운데 가장 큰 것 즉 “五”란 墨書가 있는 것은 지름이 22cm, 높이가 9.2cm이다. 이것은 최대값인 바깥 지름과 바깥 높이를 이를 것이므로 안쪽은 그보다 더 작을 것이다. 따라서 현존하는 4개의 그릇 가운데 이 종이는 적어도 가장 큰 그릇 혹은 가장 바깥쪽의 그릇 안쪽에 있었던 것이 된다. 다시 말하면 다섯 번째 바깥쪽 그릇과 네 번째 그릇 사이나 혹은 네 번째 그릇과 세 번째 그릇 사이에 있었던 것으로 추정할 수 있다. 실제로 사진을 근거로 해서 동종의 그릇 이미테이션을 전시를 위해 만들어 보고 실제 모양의 종이문서를 놓아 본 결과, 다섯 번째 그릇과 네

15) 奈良國立博物館 『(第五十四回)正倉院展』 2002년, 62면

번째 그릇 사이에 들어맞는 듯 하였다. 이처럼 그릇을 포개 놓는 과정에서 마찰을 피하기 위한 완충재로서 폐기된 종이문서가 활용되었는데, 종이문서를 다시 관찰해보면 앞면문서의 오른쪽은 완형으로 보이고 왼쪽은 찢겨 있다. 의도적으로 13.5cm의 폭으로 찢겨진 것인데, 이는 원형의 그릇을 포장하기 위한 계산된 찢기였다고 보인다. 위에서 볼 때 문서 상단부를 그릇 중심부를 향해 겹쳐 높으면 대략 같은 크기의 종이 5장이 필요하다. 다시 말하면 같은 크기의 종이 5편이 두 겹의 그릇을 포장하는 데 필요했다.

아울러 앞면 종이문서의 행간은 2~2.5cm이며 윗계선에서 아랫계선은 24.5cm이다. 신라 목간 가운데 이정도 폭을 가진 一行木簡이 대세를 이룬다. 신라촌락문서는 세로 계선이 대략 23.4cm, 행간 폭은 대략 2cm여서 이같은 흐름에서 벗어나지 않아 보인다. 그런 시각에서 보면, 이 사발을 쓴 문서가 사발을 싸는 곳에 불하되어 활용된 이유는 세로의 길이가 사발의 크기(지름과 높이)와 대비하여 포장재로서 적합했기 때문이었다. 종이문서의 폭만 찢어 조절하면 포장재로서 주문된 종이와 같이 딱 맞아떨어졌기 때문이었을 것이다. 한편, 신라촌락문서가 華嚴經論第七帙이 된 것 즉 화엄경은 제7권의 커버의 내구재로 재활용된 것 역시, 帙 즉 겹 포장품과 신라촌락문서의 세로 폭이 맞아떨어졌기 때문이었다. 이것을 바꾸어 이야기하면, 문서의 크기(세로)나 화엄경의 크기(세로)가 다르지 않았던 것이 된다.

맺음말을 대신하여

우여곡절 끝에 여러분들의 정성이 모아져 특별전 ‘문자, 그 이후 : 한국고대문자전’이 개막되었다. 자료 조사 과정에서 눈여겨보았던 문서자료에 관한 斷想을 서둘러 이상과 같이 정리해보았다. 詳細한 연구는 추후 보완을 기약하며 叱正을 바란다.

고대 한일 간 교류 속에서 문자자료의 교류가 이뤄지고 그 덕분에 일본에서 잘 보관되어온 종이 문서는 비록 사진이나 국내에서 공식적인 전시에 출품되게 되었다. 日本 國立歷史民俗博物館 및 宮内廳正倉院事務所 關係者를 비롯한 各位께 마음으로 깊이 感謝를 드린다. 아울러, 쉽지 않았지만 眞品이 國內에도 선보이게 될 날을 期待한다.

[주요 참고 논문 및 자료]

- 平川南 「正倉院佐波理加盤付屬文書の再檢討」 『日本歴史』 2010년11월호, 吉川弘文館
- 鈴木靖民 「正倉院佐波理加盤付屬文書の基礎的研究」 『朝鮮學報』 85, 1977년 (『古代對外關係史の研究』 1985년에 재수록)
- 鈴木靖民 「正倉院佐波理加盤付屬文書の解読」 末松保和博士古稀紀念會編 『古代東アジア史論集』 1978년 (『古代對外關係史の研究』 1985년에 재수록)
- 奈良國立博物館 『(第五十四回)正倉院展』 2002년
- 국립중앙박물관 『문자, 그 이후: 한국고대문자전』 2011년

[illegible][illegible]

